

る可からず、先年齊武の人民は士良武等に後援を與へたれども、今日雅典の人民は其の方向未だ一定せざれば、齊武の有志者に後援を與へんとは、必し其の故に一旦有志者が義兵を擧ぐるに當り、後援無き孤軍を以て進入し、不幸にして蹉跌あらば退て據るべきの地なく、回復の大業は遂に此時に敗るべし、是れ此策の行ひ難き所以なり、又當時本國の奸黨は國境國都の出入を嚴にし、出入には人毎に通行券を帶ばしめ、此券なき者には容易に出入を許さず、且つ其他の探偵取締も甚だ嚴密にして、人民が弓矢等の如き兵器を携帶するを嚴禁し、又奸黨は其出入常に衆多の衛士を隨へ、用心最も嚴重なり、故に假令ひ有志者が都に忍び入らんと欲するも、第一途中に於て其事露顯し逮捕を被むるの危険あり、又假令ひ國都に忍び入るとも、公然と弓矢を携ふること能はざれば、本意を達するには、只劍戟を用ふるのみなり、然れども彼等が衆多の衛兵を従ふる以上は、之を除かんこと最も容易ならず、然らば即ち第二策も亦之を今日に行ひ難きものなりとす、然れども有志者中には慷慨悲憤の壯士多ければ、遠か

らず強て是非とも此二策の中を撰み行はんと欲するの議論あり、又思慮ある有志者は此策の不可を陳べて百方之を宥めけるが、兎角に議論居り合はざれば、此時有志者中の重立ちたる勢應本、多莫俱等の發議にて、先づ一人の有志者を國內に忍び込ませ、篤と其形勢を見定めて後に事を擧ぐるに定まりける、此に於て有志者中の最も敏捷にして物熟れたる安知本と云へる人を撰みて此事を囑托し、當國を出立して私かに本國齊武の境に忍び入らしめたり、然るに何ぞ圖らん此事よりして又諸有志者の身上に不測の大難を墮落せしめんとは、安知本は服を變じて出發せしが、本街道より國境に入らずして、山野村落の間を通行し、注意の上注意を加へて探偵捕縛の難を避け、遂に國都近くまで進み行きしが、如何にしけん、不幸にして一日邏卒の爲めに怪しまれ、遂に捕縛を蒙りしかば、奸黨等は嚴しく之を糾問せしに、安知本は苦楚に堪へずして遂に雅典に在る有志者の有様及び其計略の大體を白狀したり、然れども兼てより有志者の謀りたる仕組にて、其組の通信委員たる兩三名の外、他の有志者等は



互に其の居處を詳知せざるが故に、安知本も充分に他の有志者の居處を詳にせず、されは奸黨等も暗殺の計を施行すること能はずと雖も、今有志者の密謀の大略を聞き得たれば、猶更に憂苦し相謀て言ひけるは、假令ひ、齊武國內の取締を如何に嚴密に注意するとも、隣國なる雅典をして逃亡せる有志者の巢窟たらしむる間は、所詮枕を高ふして眠ること能はず、因ては又盟主たる斯波多の威力を假り、雅典をして其の國內に遁在せる有志者等を捕縛せしむるに如かずと、乃ち又使を斯波多に馳せて、此時の國王阿世刺に此事を請願しける、阿世刺は固より智勇逞き人にて、今斯波多が齊武を失ふは大不利なるを知らば、齊武の奸黨を助けざる可からざることを察し、快く其需めを容れて齊武の使者をぞ歸しける（カの一節は俱氏の希臘史）

斯くて斯波多の政府は、書を雅典の政府に送り、此度緊要の事件につき、特別の使臣を派遣して、雅典政府に謀る所あるべしとの事を豫め通知しけり、雅典にては、何事の要件なるかと、其の風評區々なる中に、早くも此度の事は、

極公明極正  
大安得嚴方  
如是而率法  
者今天下滔滔

齊武より逃れ來れる有志者を逮捕せしむる強迫の要求なりとの巷説盛に傳播せしかば、雅典國內にては物論沸騰し、斯波多の怒りに觸れては、戦端を開くの恐れあれば、枉けて其求めに應ずるを可とする者なり、或は又義に依て齊武の志士を救ひ、斯波多の求めを拒絶すべしと論ずるものあり、朝堂の上より閭巷市場の果に至るまで、相集まれる人民は皆此の論題を議せざる者なし、左なきだに中古當國に現出せる有名の制法家宗倫が「國政上の争に於て何れの論にも左袒せず、曖昧の地位に立つ者は愛國心なく、一個人たる國民の義務を盡さざる者」と見做して其の家産を沒收し之を雅典より放逐する（ヨの一節は遇氏希臘史）の嚴法を一たび設定したるほど有りて、當國の人民は、舊來政治思想甚だ盛にして、何事に由らず政治上の事には甚だしく注意するの風俗なるが故に、隨て又些かなる事柄にも、議論騒々しき國柄なり、近代は人民の徳義腐敗して、政治の思想、愛國の精神も漸く衰へたりとは言ひながら、此度の問題の如きは、斯波多、雅典二強國の治亂に關係し、或は其存亡をも定むべき緊要の大



事件なれば、其の議論の喧きことは之を想像するに足るべし  
當時列國は多く斯國の暴威に厭せられて、常に其命に違はんことを恐れ、之に  
抗爭し得る者は、唯雅典一國あるのみ、故に齊武の有志者に取ては、其應援と  
頼む可き人民と其身を隠すべき國土とは、此雅典の外には他に之を求むべから  
ざるに、若し今當國をして斯波多の要求に應ぜしめば、最早や希臘全土に其身  
を容るゝの餘地なく、一身の安危は勿論、本國民政を回復するの望みは、既に  
全く盡き果たりとも言ふべきなり、故に當國の人民が、此の論題を如何に議決  
するやは、有志者に取ては實に名状すべからざるの一大事なり、  
朝野の議論斯く紛々たる中に早や、斯波多の特派使臣は、其の國書を奉じて雅  
典の都に到着しけり、此に於て雅典の行政官は、斯國の使臣に應接して國書  
を開き見るに、其の大意は果して世上の風説に違はず、  
當時雅典に潜伏する齊武の亡命者は、列國の平和を攪亂するの罪人なれば、  
速に逮捕して之を斯波多に引渡す可し、此事に付て、斯波多政府は雅典政府

に向ひ、七日間に諾否の決答を望む

とのことにて、霸國たるの暴威を挾み、飽まで弱國を輕侮するの文意なり、此  
に於て政府の行政議官中にて、民政黨と知られたる李志等は、斯波多の要求を  
拒絶すべきを主唱し、又專制黨なる亞留智等は、其の要求に應ずべきを主唱し、  
茲に二派の議論を生ぜしが、流石に往年齊武の國人より受けたる恩誼を思へば、  
平生無事を喜ぶの曖昧黨も、如何に斯波多の強勢を恐るれば、遂に其の要求  
に應ずるを難じ、拒絶論に傾く者も少からねば、行政官中の議論は、遂に兩  
説平分の姿となり、今は只五百名公會と人民公會との議決に因て、是の大問題  
を定むべき有様となれり、然るに當時の人民公會は、多く五百名會の議決に倣  
ふの勢なれば、此論題の如何に決定するやは、其實只五百名會の議決に在り  
と言ふも可なり、當國の行政官は、斯波多の國書を受取りし後當國の憲法に  
隨て、先づ之を五百名會に報告し、該會招集の期日をぞ定めける（他國の使  
書を民會に報告することは遇氏の希臘史）



徹頭徹尾  
雙行法故  
屬尤覺偉  
不獨義理  
然可仰也

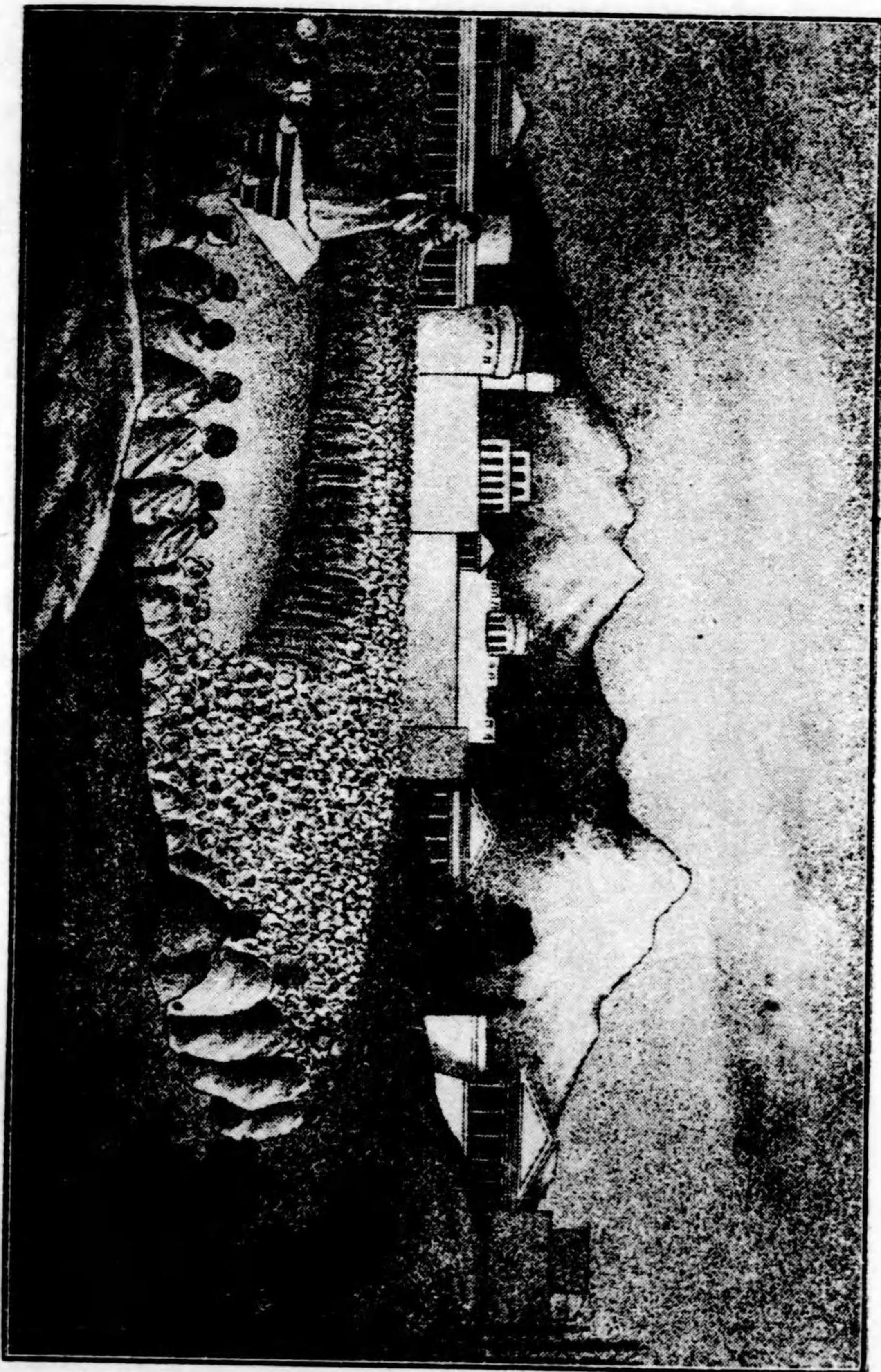
斯くて豫定の期日、即ち國書を受取りし第三日となりければ、式に依て五百名會議をぞ開きける、齊武の有志者等は、無論是日の議決如何を憂苦し、密に會堂の傍聽席に忍び居たりしが、開會の初より拒絕應諾の二論相錯出し、議論紛々として決せず、時としては拒絕論勢力を得るかと思ゆれば、時としては應諾論又勢力を得るが如く、二論互に強弱を争ふこと數次なりしに、最後に至て應諾論次第に勢を得て、會員の過半は、遂に斯國の要求に應ぜんと欲するの傾きを生ぜしかば、今や齊武有志者の身上は恰も草露の危きに似たり是の危急の時に當り、今日の大問題を一言の下に辯明して、會衆の心意を固定せしむべき命運を負擔したる大論士伊曾久は、此時發言臺に昇り、明亮なる音聲を發して曰く

雅典人民は必ず獨立國の幸福を知らん、雅典人民は必ず人民參政の幸福を知らん、然るに卅年前不幸にして斯波多の爲に我が獨立の幸福を失ひ、我が參政の幸福を奪はれしは我邦人民の記憶して今日猶忘れざる所なるべし、然れども天幸に我が雅典を遺てずして、士良武氏等の諸有志者を生じ、再び我が獨立と我が民政とを回復せしめたり、當時我が有志者は、一に齊武人民の援助を蒙りしにあらすや、我國今日の獨立と民政とは、是れ齊武人民義心の賜ものにあらずや、果して然らば、今日齊武の志士を救ふが爲めに、假令ひ隙を斯波多に開きて、我が獨立と民政とを亡ふの不幸ありとも、又何の憾むる所かあらん、且つ嚮きに我國有志者の齊武に潜伏せしに當りてや、斯波多が暴威を挾みて、我が有志者の逮捕を齊武に要求せしことは、恰も今日の如くなりき、然るに當時齊武の人民は、我が有志者を憫むの義心より、之を拒絕して其の要求に應ぜざりしは、我が人民の尙ほ今日に徳とする所にあらずや、當時齊武の人民は、我が有志者を保護すべき義務有りしにあらす、又當時齊武の國勢は、尙ほ甚だ微弱なりき、然るに猶ほ我が有志者を援けて斯波多と開戦の危難を犯したりき、今や我が國人は、齊武の有志者に對して報恩の義務あるにあらすや、我國今日の國勢は、齊武昔時の國勢に幾倍せるに



あらずや、然るに我が國人は、齊武の有志者を救はざらんと欲するか、何れの國か亡びざらん、何れの民か死せざらん、恩に酬ひ徳を全ふするが爲めには、其の國亡ぶるも可なり、義に依り節を守るが爲めには、其の民死するも可なり、千載の下、列國に對し、我が雅典をして恩を忘れ義に背くの名を得せしめば、雅典人民はそれ將た何の面目有て天下に立たんとするか、恩に酬ゆるが爲めには齊武を援けざる可らず、義を全ふするが爲めには斯波多に絶たざる可らず

と演べ終りしが、其の義氣の凜然たるを、其の論理の精確なるとの爲めに、今まで揺々汎々として、心意の定まらざりし會衆を挽回して、遂に拒絶論に決心せしめたる此の演説の勢力は、恰も一陣の勁颯原頭の草葉を捲くが如くなりき、拒絶論者は此機に乗じて議決を促せしに、遂に拒絶論衆多の同意を得て、斯波多の要求を拒絶することに決議せり、齊武有志者の喜び亦知るべきなり（人民ス波多の求めを拒絶せしことは俱氏の希臘史）



(圖六第) 報ニ証舊ノ人齊ヲシ勵激ヲ民人氏伊ニ揚論ノ會大



又其の翌日に開きし人民公會も、果して五百名會に同じく、拒絶論大に勝利を得たりしかば、雅典政府は乃ち斯波多の要求に應ずる能はざる旨の返書を作り、之を斯波多の使臣に授けて、其本國にぞ歸しける、齊武の有志者等は、人民公會にても其決議の如何を憂苦し私かに傍聽席に忍び行きて、會場の有様を窺ふ者もありしに、斯る意外の顛末に至りしかば、皆々狂喜して天の未だ有志者を遺てざるを拜謝しけり、又雅典人民は、已に斯く斯波多に拒絶せし上は、此の末戦端を開くに至るやも測られずと、密に戦備を修めしかば、人心大に奮起せり、齊武の有志者等は、當初の憂慮に引更へて、今は却て雅典人民の向背を知り得たるを喜びけり、斯波多は雅典が其要求を拒絶せしを憤りたれども、此の事柄は未だ同盟列國の兵を集むるに十分なる口實ならずと思ひけん、其後は別に何等の事もなく、暫時は無事に打過ぎけり、

鋤雲云。晨鐘一响。迷夢立醒。辯士之力。勝千軍萬馬。

柳北云。喜中生憂。憂中生喜。變幻百出。一回奇於一回。求之支那史乘。匹儔極罕矣。



鳴鶴云。此回說斯、雅、齊三國關係。專記實事。此爲後段伏線途脈。故提起禮溫一話。使不寂莫。其奏春花曲一節。與第貳回（記禮溫爲人一節）遙相呼應。

學海云。本回爲斯國逼雅典以逐正黨雅典不肯一事。正黨恢復二策。並是至難。在當日殆無着手處。加以安知木見擒。強國來逼。雖賴有雅人不肯聽納。正黨諸人亦岌々矣。蓋巴氏等自來雅典既脫刺客之難。得安身之地。若不有此一逼。何以得出後段出走欲入本國一段奇話。此是作者翻弄實事點綴虛套妙處。

## 第十一回

山中の隱士禍福を説く  
孤村の月夜主従再會す

斯波多が無禮の要求をなせしより、雅典の人心は之が爲めに激動して、却て齊武の有志者を助くるの決心を表しければ、諸有志者には意外の仕合せを生ぜしが如くなれども、然ればとて又雅典の人民は、有志者を助けて回復の援兵を出だすべき程の勢にも至らざりければ、兎角する内に此の年も暮れて、紀元前三百七十九年（齊武騷亂の年より第四年目）の春にぞなりにける、此の時有志

者は他國に落魄して、已に至三年に近き歲月を過ぎたることなれば、其の囊中は日に月に困乏して不如意の身となり、今は各々其の口を過ぎすが爲めに、或は農家に入て傭夫となり、自ら耒耜を執るもあり、又牛羊を牧するもあり、或は商家の僕奴となるもあり、今日有志者等が斯く迄落魄する艱難の有様を、本國に在りし昔に較ぶれば、其の慄れる様は目も當られぬ程にて、中にも波莫忠等の如き富貴に成長せし二三の人々は、肢體に慣れざる艱苦の爲めにや、疾病を得て遂に敢果なく死亡せし者もあり、又俱利の如き憂苦に堪へずして自ら憤死を遂けたるもあり、又此時に於ては、病床に在る者も少なからざりき、有志者等が斯く他邦に流落して衰弱せる有様に引換へ、本國齊武の奸黨等は益々勢威を振ひ、其の治下に在る人民等も漸々に氣力を失ひ、若し永く此儘にて過ぎ行かんには、或は寡人專制の政に甘んじやせんかと思はる、様子のなきにもあらねば、雅典に在る有志者等は、頻りに回復の謀議を凝らせども、未だ之れぞと思ふ良策もなく空しく無念の月日を過ぎしける、然るに此時巴比陀は獨



古歌曰男兒  
欲爲健結伴  
不須多鷄子  
經天翔群雀  
驚向波蓋巴  
比陀當日之  
意也

り心に思ふやう

斯く安閑と空しく數年の歲月を過ぎざば、有志者等は徒に死亡するのみにて、本國の民心は彌よ萎靡し、假令百年の長きを過ぎて、烏の頭は白らむとも、民政回復の期はなかるべし、斯く安閑と有志者等が月日を過ぎずも、必竟は本國の内情を詳知せざるに因るものなれば、今より我れ唯一人にて密かに本國に忍び歸り、國內の人心を察して、回復の志ある壯士に謀らば施すべき策のなからずやは、然れども若し此の事を、當國に在る他の有志者等に告げ知らさば、必ず是の行の危険を説いて、我が出立を止むるなるべし然らば寧ろ他人に謀らずして、獨り此の策を行ふには如かじ、若し又忍び歸りし上にて、逆も回復を行ひ難き本國の内情ならんには、最早や我々の運命も夫れまでなり、生て甲斐なく在らんより、潔く一命を擲て、勢力ある三四の奸黨を除くべし、然る時には我が跡に生き存らへたる有志者等が回復の手段にも、幾多の便宜と爲り、我が一死を以て多少濟民の事業に益することを得べ

し、然なり然なり

と一たび心に思ひ起せしより、一念急なること矢の如く、遂に日ならず此地を出立することに決心したりける、今巴氏が斯く單身を以て、奸黨等の手配り嚴重なる本國に忍び歸るは、其の危きこと恰も自ら火中に投ずるが如く、三尺の童子と雖ども尙ほ其不利なるを知るべきに、俊秀絶倫の人物にして、斯る無謀の舉動を爲すは怪むべきに似たれども、巴氏は其齡未だ三十に上らず、氣力正に盛なる時なるに、一方にては遙かに人民の疾苦憤怨と奸黨等が繁昌の風説を聞き、又一方にては有志者等が流離落魄の有様を顧み、彼を思ひ此を思へば、其胸中に鬱積したる多年の憤情は、一時に破裂し、彼の大難に當り、百事を措辨して過らざる稀世の英雄も、其の慧眼只朦朧として憤雲怨霧の爲に蔽遮せられ、事の利害を慮るにも及ばず、遂に其人物に不似合なる憤激の舉動を爲すに至りしものなり、

巴比陀の出立するに當て、此に心懸りなるは、彼の瑪留が上にて同人は是まで



我を信敬し國事の爲めには死生を共にせんとぞ誓ひ居たるに、今斯る大事を思ひ立つに臨み、若し打ち捨て、出立せば、我が不人情を恨むなるべし、然ればとて之を伴ひ行くときには、彼は質直短氣の性なれば、途中にて珍事を惹き出し、必ず大事を敗りもすべし、兎やせん角やと案じ煩ひしが、寧ろ一時些かの私情を破ればとて、一國人民の大事には換へ難し、唯成功に便なる方を撰ぶに如かずと、乃ち瑪留をも残し置くことに決心せり、扱巴氏は一日瑪留の家に在らざる時を窺ひ、三通の書翰を認めて、其一通は之を諸有志者に與へ、一通は此家の主人に與へ、今一通は瑪留に残し置き、  
今俄かに思ふ所ありて單身此地を立去るなり、運命に因ては後日の再會も期し難ければ此書を以て訣別の遺物と思ひ呉れよ  
との文意にて、此家の主人へ與ふる書中には、厚く多年の恩遇を謝し、又諸有志者に與ふる書中には、瑪留を能く々々教誡して軽く身を誤らしむ可らずとのことを托し置き、又兼て貯へ居たる金子の一半を分て、之を瑪留に残し置き、

瑪留の在らざる時を幸ひ、唯一口の寶劍を帯びたるまゝ、大膽にも獨り此家を出立し、本國を指して忍び歸りける、頃は此年第二月末つかたの事なりき抑々雅典より齊武に赴くには、二條の街道ありて、其東南なるは平坦にして且つ近く、西南なるは險阻にして且つ遠し、然れども巴比陀は世を忍ぶ身の上なれば、人目の少き街道を撰び、此の西南の險路より本國に進み行きけるが、國境の手前より又更らに村路を経て、國都に忍び入らんと企てたり、諸雅典を立て出で、本國の境上に近づきし頃、或る村落に至りしが、此處に岐路あり、村民に尋ぬるに、一方は本道なるも路程遠く一方は徑路なるも甚だ近しと聞きければ、寧ろ其道は險はしくとも近き方を進むべしとて、足に任せて其の徑路の方に進み入りしが、往くこと大凡そ三四里計りにして、山聳へ溪横たはり、其道次第に窮まりて、思ふ方位に進み得ず、兎角する中に、春の日とは云ひながら、未だ二月の末なれば、思の外に日も暮れ易く、雨さへ時々降り來りしかば、猶ほ更ら心焦燥ちつ、頻りに進めば進む程、深き山路に迷ひ入りて、黑白も分



かずなりけるうち雨は益々降りしきり、其の難澁言ふべからず、先きに大道を行かざりしを悔めども、今更ら引返して本道に出づべきにもあらざれば、尙ほ其處此處と彷徨ふ中に、前なる谿を隔て、遙か彼方に一點の燈火あり、樹の間を洩れて見えければ、巴氏は大に打喜び、斯る深山の間にも又住む人のありけるよと、辛ふじて其所に進み、尙ほ近づき之を見れば、最と粗造なる一軒の陋屋あり、乃ち立寄て庵の扉を叩けば、主人と覺しき者出で來りしが、巴氏の難義を聞て之を室内に延き、雨に濕ふ衣裳を乾かせ、又粗末なる晚餐を與へ、尙だ薄寒き頃なれば、主客共に火の傍にぞ坐しにける、巴氏は此時熟々主人の容貌を視るに、七十許の高齡にて頭髮鬚共に灰白色にして、其容子凡ならず、室内の一隅には、數箇の書冊をさへ配置したり、其言語容貌に因て之を察すれば、此老翁は、先年當國に現はれたる高尚なる有名の理學者美亞、貞耳等の流派を汲み、世の塵を避くるの人なるべしと信ぜらる、巴比陀は固より理論を好む性質なれば、老翁に向て疑問を發し、互に膝の進むを覺えず、深く深妙

の理學を談じけり、主人は又巴氏が今日此處に迷ひ來りし顛末を問ひしが、其岐路に臨で小徑を擇びしことを聞て、獨り頻りに打首肯き巴氏に對して語りけるは

世事は皆な君が今日の旅行に似たるのみ、遠しと雖ども坦夷なる大道を擇ばゞ、危険少ふして加績多し、近しと雖ども徑路を取らば、功績少ふして危険多し、君が容貌意氣を察するに、君は必ず其の胸中に人民を救濟するの大志を懐くの人なるべし、決して功名をのみ之れ求め、富貴をのみ之れ欲するの常人ならじ、然れども銳氣の爲めに誤られて大道の遠きに倦み、岐路に臨て小徑を取らば、其事必ず功無くして其身は甚だ危ふかるべし、君は唯旅行の小徑に迷ひし人が、將た世事の小路にも迷ふの人か、靜思ありたきことにこそ

と思ひ懸けなき訓戒の辭に、巴氏も心中陰に深く感ずる所ありしなるべし、巴氏は主人に辭して寢に就きし後も、何となく主人の訓戒の心に懸りて、眠らん



とするに眠られず、且つ雅典に在る諸有志者等も、今頃は定めて我が身上を憂ひ居るならん、又瑪留は如何に爲し居るやなど、通宵思ひ廻らして睡眠もせず、終に此夜を過ぎせしが、翌朝は夙く起出で、主人に別れを告げて其の言に隨ひ、辛ふして再び村落に出で、尙ほも本國に向てぞ進みける、然るに昨夜の降雨に身體を濕せし故にや、此日の午過る頃より、頻りに惡寒を催ふして苦痛を覺へ、今は行歩も自由ならねば、則ち其邊にて然るべき民家を求め、故を告げて其家に投宿し、只管病ひを養ひしが、數日を過ぐるも病勢益々重るのみにて、獨り客窓の下に呻吟しけり、然れども不幸中の幸なるは、此家の主人老夫婦が、最と親切に其病苦を勞はり呉る、なり、巴氏は其病ひ日々に重りしが、一夜暗燈の下に在て、熟々既往將來を想へば、懐愴感慨の情、自ら止むこと能はず、前きに本國に於ては、危くも追兵の難を免れ、又た途中にては溺死の厄を救はれ、雅典に於ては、幸に刺客の難を避け、又其人民の厚意に因て、僥倖にも斯波多の強迫逮捕を蒙らず、今日まで天の祐を得て、斯る千辛萬苦の中を

恙なく歴來りしに、今若し一朝病苦の爲めに此處にて死することありなば、今まで辛苦の甲斐もなく、我が濟民の大業も、空く泡沫と消へ行くべし、若し此病の癒へざらんには、如何に口惜しき事なるべきか、昨日に比らべて今日は又、最と苦痛を増したるは、我身も天より棄てられたるか、獨り臥床に嘆ちつ、窓より外面を打ち眺むれば、月の光りは朦朧に、見えては隠れ、隠れては又現はる、有様ぞ、有爲轉變の世の中に、能くも相似た景色かなと、尙ほも悲歎を増しける折しも、遙かの彼處に琴の音して、歌の聲さへ聞ゆれば巴氏は耳を敬てつ、斯る田舎の片山里に、優しき調べを聞くものかな、如何なる人の手すさみにて、斯る妙音を奏するかと、憂きが中にも病苦を慰め、暫時彼の音を打聞く中に、琴聲次第に近づきしが、此家の窓下に立止り、又一曲を奏しつ

一歌寄托絶  
佳恨聲調未  
入雅耳

歌 見渡せば、野の末、山の端までも、花なき里ぞなかりける、今を盛りに咲き揃ふ、色香愛たき其花も、過ぎ越し方を尋ねれば、憂きことのみぞ多かり



余嘗味禮溫  
一絕云月明  
樹暗夜沉  
獨以存亡問  
古琴一斷行  
花曲舊闌春  
吟依舊操南  
音庶幾足以  
形容此段矣

き、霜降る朝には葉を隕し、雪降る夜には枝を折り、枯れしとまでに眺められ、集り會ふ憂きことの、積り積りし其中を、耐へ忍びし甲斐ありて、長閑き春に巡り逢ひ、斯く咲き出るぞ愛たけれ、世の爲にとて誓ひてし、其の身の上に喜の、花の苔は憂き事と、知りなば何か憾むべき、春の花こそ例なれ、春の花こそ愛たけれ、  
と最と面白く歌ひければ、巴氏は大に打ち驚き、是の歌は之れ數年前我が本國に在りし頃、戯れに作りたる春の花てふ短歌なるに、之を歌ふは心得ずと、思へば歌ひし其聲は、兼て聞知る音聲なれば、巴氏は窓より差しのぞき、月の光に透し見つ、忽ち思はず聲を揚げ、  
其所に立ちしは禮溫にあらすや  
と問はれて驚く樂人は、一時は驚き極りて、未だ答ふる辭もなきうち、又もや巴氏は聲をかけ  
禮溫にあらぬか過まりしか

と聞くより、彼方は振り仰ぎ  
然か曰ふは郎君ならずや、禮溫にてこそ候ふなれ  
と見上げ見下す主従の、其の悦びは如何ならん、  
抑々禮溫は去年の秋、再び雅典を彷徨ひ出で、本國齊武の北境なる法斯須に赴きしが、逮捕の難を避けんが爲めに、本國をば經過せずして、西南なる間道より齊武の國境を迂回し、夫より彼地を徘徊して、只管主人の踪跡を索むる中に、同地にて又此の年を過ごし、幾んど尋ね倦みたりし頃、此地にて不圖二三の有志者に、出會し、主人は尙ほ雅典に在りと聞きしかば、此年の春再び法斯須を出立し、以前の間道を経過して、雅典の境に入り來り、今宵も道に行き暮れて、宿りを此邊に求めんとせしが、月影の面白きに乗じ、兼ては食を乞はんが爲めに、今一曲を奏せしに、琴の歌より圖らずも、尋ぬる主人に廻り逢ひ、其の病に侍するを得たるは、天其の精神を感ぜしならん、  
斯くて巴氏等主従は、再會の喜びを陳べ、互に既往の遭難を物語り、此夜を語





(圖七第) ス會再ニ主舊溫禮ニ夜月ノ村孤

り明しけるが、禮溫が其力を専ら看護に盡せし故にや、數日を経るに從て、巴氏の病も少しく苦痛を減じけり、此に於て禮溫は巴氏に向て此行の甚だ不利なるを切諫し、又巴氏の物語にて聞きたる瑪留及び有志者の居宅に、私かに人を馳せて書を送り、與に共に巴氏の此行を止めんことを請求したり、

鋤雲云。山中老人。大有似圮橋黃石公。而留侯能從其教。巴氏不然。蓋因其未試博浪一擊。奮往之氣不能自制耳。易地必皆然。

柳北云。禮溫鼓琴乞食而尋舊主。比之盲女朝顏尋情人。非同日之談。

鳴鶴云。這回寫出智力時爲憤情所制之狀。蓋作者用意處。又假巴氏之舉動。示恢復計窮。使人切齒極妙。

又云。春花歌。流暢溫和。足慰志士於窮厄中。禮溫鼓琴。邂逅舊主一節。暗自英史中翻案來。

又云。隱士之言。不能回巴氏之銳意。唯有疾病能阻其行耳。巴氏臥病。是借天濟人手段。尤見作者苦心。



學海云。此回自事實論之。無甚麼功驗。徒多一遭病苦耳。然志士千艱萬難。毫不屈撓氣象。不得不一寫然後逼出後段奇計來。不然巴氏在李氏家裏。消受安樂。乘好便宜。遽博功名。何以爲名士。何以爲俊傑。

### 第十二回

小憤の爲に豪傑身を誤る  
諸名士境上に囚徒を奪ふ

儲又巴氏と共に李氏の別荘に匿れ住みたる瑪留は、一夜巴氏が夜更くるまで歸り來らざるを疑ひ、暗殺の患もあれば痛く心配し居たりけるに、夜明るまでも歸り來らざれば、猶更ら疑ひ惑ひつゝ、翌朝は夙く起き出で、別荘の番人なる老僕に向ひ、昨日巴氏の出行きし容子を委く問糺せしに、老僕は昨日巴氏より今朝此書翰を三ヶ處に送致せよとの依託を受けたることを告げ、乃ち瑪留に一通の書翰を與へ、又他の書翰をも夫々に送致せんとて直に外に出去りける、瑪留は何事ならんと巴氏の書を披き見れば、這はそも如何に俄に思ひ立つ事ありて單身此地を出立せり、事宜に因らば此を以て訣別の書



前回は比陀  
歸國一事既  
是屬萬不得  
已之筆剗至  
瑪留這個粗  
笨漢子巴一  
去後將何處  
安置其單身  
追躡亦萬不  
得已也極不  
作者苦心見

と爲さんも知れず  
との文意なれば、深く心に怪みしが又情々思ふやう、今巴氏が外に思ひ立つ可  
き事なし、察するところ必ず單身にて本國に忍び還り、身を棄て、奸黨を除く  
ならん、然るにても是迄國事を共にせし我身には何故に告げ知らざりしや、  
我が性來の短慮を恐れ、斯くは計りしものならん、好し好し、然らんには我も  
是より單身にて立歸り、巴君に優れる功業を立つべしと、思ひ直せば今更に、  
恨むる心も消へ失せて、獨り欣然と踴躍せり、抑々瑪留は常に單身にて奸黨を  
除くの論を主張し、此地を飛出さんと欲せしこと度々なりしも、常に巴氏に制  
止せられて其志を果さざりしに、前きに己れを制止せし其人の、今日却て此  
策に出たりと思へば、今こそ己れの素望を達する時節到來せりと喜び勇も理  
なり、又假令其推量に違ひ、巴氏の眞意は他の策を行ふに在りとも、瑪留は  
唯巴氏が此家を去て己れを止むる邪魔なきを悦ぶのみ、必ずしも巴氏が此策を  
行ふと否とに關せざるなり、

同辭之書最  
妙最起是與  
第九回憶起  
哲切の憶起  
筆法懸心作  
用寫出逼真

然れば瑪留は天へも昇る心地しつ、早や功業の成れるが如き思を爲し、巴氏の  
殘し呉れたる金子を帶び、他の有志者へは一通の書翰だも遺さず、唯當家の主  
人に、巴氏が己に與へたと同文なる簡短の書翰を遺し置き、即日此家を立出  
でける、然れども瑪留は巴氏の如く西南の路を取らずして一直線に東南なる本  
街道を進みけるが、日ならずして遂に本國の境上に近づきけり、然るに思ひ  
懸なく途上にて不意に我名を呼ぶ者あり、振り顧て之を見れば、有志者の一人  
なる俱利善にて、是人は曾て有志者等の商議に因り、本國の容子を探るの便を  
計らんとて、國境に散居したる一組の其の一人にてありければ、互に無事を祝  
せしが、俱利善は瑪留の此地に来れる所以を問ふに、瑪留は甚だ簡短なる辭に  
て

余は本國に歸て奸黨を除かんと欲するなり、巴君も己に出立せり  
と答へしかば、俱利善は益々怪み、種々に之を尋ね問へども、巴氏の事は固よ  
り只瑪留の想像にて、確かなる證據あるにもあらねば、俱利善は痛く此策の不



利を説きて瑪留を止め諫めけり、然れども瑪留は固より直實の性質にて、一たび其人の德行才略を信する以上は深く之に服従すと雖も、尋常人の辭は中々に信服せず、故に其の信する巴氏の一言は能く瑪留を左右するの勢力あれども、他人の辭は平生の細事と雖も一向に聞き入れざるに、今斯く喜び勇んで大事を行はんと欲するに當り、何とて他人の辭を聴くべき、俱利善の忠告も馬の耳吹く風の如く、別を告げて立去りければ、俱利善も強て之を止むるの力なくして獨り心をのみぞ痛めける、

此に瑪留は國境を距ること一里許の地に來りけるが、境上には關門を設けて旅客の取調べ最も嚴重なる有様なれば、流石短慮の性質も、此處より進むを危しとや思ひけん、道を違へて遙か隔りたる山路に分け入り、山を越へ谿を渡りて進みけるが、荆棘秦蕪の中を行くことなれば、道程甚だ撓らずして、此日の薄暮に至り、漸く一村落到いで些やかなる旅亭を求め、先づ其家に投宿せり、然るに此家には年紀四十許にて最と篤實に見ゆる主人と三十許の女房あり、又主

人の妹なるべし、年の頃十八許にて容貌醜からぬ一人の少女あり、田舎人の慣ひとて、主人は最と親切に瑪留を取扱ひけるが、固より村舎の旅亭なれば、其家甚だ狭小にて、瑪留が休息せる客房の隣室は、則ち家族の居間と應待の間とを兼ねたる部屋にて、其處の談話は手に取る如く聞えけり、然るに黄昏過ぐる頃より、主人の居間に於て次第に聲高き談判やうのこと起りければ、瑪留は徒然の餘り聞くともなしに聞き居たるに、二名の客人ありて、村長ならんかとも覺しきが、其一人は主人に向ふて頻りに何事かを要求し、又他の一人は傍より之を宥め賺すに、此家の女房も傍より頻りに之を主人に勧むるさまにて、尙ほ能く聞けば、村長等の上に立つ郡吏の意なるや、或は之に媚びんと欲する村長等の思ひ付きにや、主人の妹なる彼の少女を、郡吏の許に遣らしめんとすの談判にて、其の時一人の村長云ひけるやう

斯くなす時は、上吏の執成しにて、近村の公有地も低價にて我々に拂ひ下けらるべく、又其他樹木の拂下け等に付ても此村の爲となること多く、運上年



貢の取立期限も緩やかに見過ごさるべし、若し又是の儀を拒むに於ては、此村中は勿論我々までも何かに付けて多くの咎めを蒙るべし

と言へば、傍なる一人の村長又言へるやう

我々の辭に隨ひ、足下の妹を遣られなば、其方等は此邊の村々にも肩巾廣く、我々に至るまで他の者よりは上首尾ならん、若し又之を拒むときは我等は勿論其方等兩人娘子に至るまで、如何なる難儀の來るやも知れず、今が難儀と仕合せの界目なりと量見せられよ

と主人夫婦に禍福を諭すも、實に中間にて己等が利益を盗むの心算なるを、知るや知らずや、此家の妻は頻りに村長等の辭を助け

然か爲るときは妹も玉の輿に乗るのみかは、我が家繁昌の基ひなれば、枉けて其意に従ひ給へ

と頻りに主人を勧むるは、之も亦利欲に迷ふの嫂とこそ知られられ、此の談判中主人は始終詞無かりしが、怖る怖る村長に向ひ、父母の存在せる時より遺言

せる事あれば其の詞に隨ひ難しと、只管之を辭退すれども、彼の古人の名句にも「地僻にして吏に權多し」と言へる如く、村長等は役威を振ひ、強迫したる手詰めの談判に、愚直一途の此家の主人は、一方には村長の威勢に怖れ、一方には父母の詞を守らんと、進退維れ谷まりて最と不憫なる有様なり、先程より一重の扉を隔て、此談判を聞き居たる瑪留は、然らぬだに弱きを助けて強きを挫く慷慨義侠の性質なるに、今本國の奸黨等が手下に屬する村長共迄、斯く人民を惱ますかと思へば、怒火忽ち心頭に發し、間の扉を蹴開きつ、主人の居間に躍り入て物をも言はず村長が上坐の邊りに突と進み、鐵もて作れる蠐螬の如き握り拳を振上げて、村長一人の頭上を二たび三たび打ぐりければ、一坐の仰天一方ならず、其中にも此家の主人夫婦は瑪留の手に縋り付き、右左より止むる間に、彼の兩人の村長は鼠の如くこそくと外面を指して逃げ行きけり、主人夫婦は、瑪留の亂暴を悲み恨む其中にも、妻は頻りに立腹して「由無き無法者を宿せし爲めに、我が家に入り來たりし福の神を追ひ出すのみと、村中舉



つて怖れ避くる彼の村長に無禮をなし、我が家向後の難儀を惹き起せし」と泣きつ恨みつ嘯きける、瑪留は獨り意氣揚々として更に顧る氣色もなく、最と誇り氣にぞ見えにける、蓋し今奸黨を除くの大功を立んと欲するに當り、其の配下なる村吏を打ち懲らせしは、手始め良しとぞ思ふなるべし、瑪留は三年目にて久々に快心の事をなしけるよとて、主人に命じて酒を持來たらしめ、獨り數杯を擧ぐる中、主人は早くも瑪留の性質を察し、其後難を慮りしにや、瑪留に向ひて村長等の性質を説き「早く此地を避けずんば必ず難儀を蒙るべし、疾く疾く此家を逃れ去るべし」と忠告しければ、瑪留も主人の辭を實にもと悟り、夫れより直ちに長劔を佩びて旅装をなし、暇を告げて立去らんとする折しも、早や多勢の人音して此家を取巻く模様なれば、瑪留は心の中に、彼奴等何程の事かあらん、久々貯へて黴を生ぜし日頃の武藝を試み呉れんと、庭の隅なる手頃の稻をおつ取て家の外面に躍り出づれば、村長等の命に因て、僻者を搦め取らんと進み來りし數十の村民、すは、僻者なり、遁すなと一度に進んで取

先從潺湲之  
響聽出夜徑  
景包如繪

巻くを瑪留は勇を揮つて縱横無盡に打伏せ打伏せ追立つれば、役目仕事に集まりたる村民等は、皆な蜘蛛の子を散らす如く右往左往に逃去りけるにぞ、瑪留は長くも追はず、星の明りを便りとし、山路を指して落行けり、斯くて行くこと一里許なる時、先きに村民等を追つ散らしたる働きに、數盃の酒の醉氣を發せしにや、口中頻りに渴を覺へけるが、前路に當り潺湲と谿水の音聞ゆるにぞ、乃ち其處に下り立ちて、水を掬して喉を濕ほし、頗る愉快を覺へしが、此時又頻りに眠りを催しければ、心の中に思ふ様、最早や彼村を距ること遠く且つは山路の事なれば、暫し此處等の木陰に假寐し、潜び行くとも晩かるまじと、遂に大膽にも谿の邊りなる樹蔭に獨り眠りける、  
偕て村長共は、村民等の逃げ歸りしを憤り「暗夜の上には不知案内の村路なれば、僻者は逃るとも遠くは落行くまじ、追ひ付きて搦め捕れと、厳しく下知して、夫れ々に手分けを定め、三組四組の村民等を口々の村道に派出しけるが、其中の一組は山路に傍ふて追ひ行きしに、不圖或る谿の邊に至るに、夜は早や



三更の頃にして、深山路の事にしあれば、峯吹く風に谿の音のみ寐莫く聞ゆるに、路邊の谿の彼方に當りて最と大なる鼾の如き聲しけり、村民等は相怪み、斯る夜中に如何なる怪物のうめくやらん、若し人ならば五六人前の鼾聲なりと訝りつゝ、密かに其處に赴きて窺ひ見れば、豈圖らんや尋ぬる僻者は、樹の根を枕に打ち解ぎ、前後も知らず眠り居たり、此に於て村民等は先づ靜かに彼れが佩びたる長劍を奪ひ去り、然る後に、一同折り重つて手取り足取り搦めける、瑪留は最前より快けに眠り居たるが、俄の物音に驚かされて兩眼を見開けば、這はそも如何に、其手足は既に鐵鎖を以て十重二十重に縛められたり、流石武勇の瑪留も、夢中に其不意を折たれしことなれば、其無念さ遣る方なけれど、今更ら爲んやうもなく、村民等に引立られて村長の家に至り、小暗き一室に閉籠められて、此處に其夜をば過しけり、翌日村長は瑪留を引出して其の住處姓名を取調べしに、始めの程は哥命の者にて此度始めて雅典に赴き、夫れ故道に迷ひしと偽りしかども、例の性質なれば、

醉倒睡路  
及劫押兵  
囚等蓋亦  
者萬不得已

言語の中に不都合なる箇條多く、遂に其所持せる物品等を搜索せらるゝに至り、始めて眞姓名を知られしかば、村長等は大に驚き、這は大切なる罪人なり取遁しては一大事と、夫れより一層嚴しく瑪留を監守し、先づ村落を管する邏卒の屯所に此事を通知し、明日を待て邏卒の出張を請ふか、或は此方より之れを送致すべしと決しけり、又此村にて有志者を捕へし評判は早くも其近傍に傳播したりしが、明けて翌日となりければ、村長等は鐵鎖を以て罪人を縛し、三十名の村民を警固として自ら之を率るつゝ、此地より二三里計り隔たりたる國境の邏卒本部を指して、意氣揚々と出立せり、斯くて瑪留は鐵鎖に縛せられながら村民等に打ち圍まれ、穀糠として屠所に赴く牛羊の如く、心の中に思ふ様、嗚呼我ながら鈍ましき事を爲してけり、回復の大計も十分一を果さずして斯く暗々と捕縛せられ、非業の最後を遂ぐるこそ憾みて尚ほ餘り有りと、悔ひの八千度百千度我が身の不運を恨みつゝ、行くこと凡そ二里餘にして、彼の國境なる邏卒本部を距ること凡そ一里餘の處まで



之筆矣然畢  
竟以未去盡  
斧鑿痕水滯  
傳可以有之  
經國美談如  
以無之何如

來りし折しも、一叢茂れる前路の森より、咄つと擧げたる鬨の聲と諸共に、顯れ出たる數十の壯士、手に手に得物を打ち振りて、勢ひ鋭く殺到せり、不意を打れし村民等は、何かは以て堪まるべき、囚人を打捨て、只一齊に散亂せり、平生より心服せぬ村長共の命なれども、餘義なく附添ふ村民なれば、此變事を幸に皆我れ一に逃け去りけり、村長は暫し村民を勵ませしが、總崩れとなりしかば、遂に己も逸足出して逃げんとするを、早くも壯士等に生捕られて其縛めを受けたりける、抑々是の一群の壯士は何者ぞ、則ち雅典の國境に屯在せる一組の有志者等にて、今又何故に瑪留の危急を救ひしやと尋ぬるに、前日境上にて俱利善が瑪留に出會せしより、其必ず珍事を生ぜんことを憂ひ居たりしに、昨日國境の評判にて、脱走の有志者一人遂に村長の爲めに捕縛せられ、又其者は烈き亂暴を爲したる勇者なり等の噂、早くも喧しく處々に風聞ありしかば、扱こそ其者は瑪留ならん、之を救はずんばあるべからずと謀議し、彼邊の村落は、國境なる齊

武の邏卒本部の所管なれば、必ず其處へ護送すべし、幸ひ境上の場所なれば、途中に要して之を奪ひ返さんと、此一組の有志者等は、今日早天より此處に埋伏して其過ぐるを待ち居たりしが、今遂に首尾よく瑪留を救ひ出せしなり、瑪留は諸有志者を見て欣喜する中にも、今更ら俱氏の諫を用ゐずして斯る危難を惹き出し、又有志者等を勞せし事を深く氣の毒に思ふの様子なり、乃ち有志者等は瑪留の鎖縛を解き之を以て彼の生捕りたる村長を路傍の大樹に縛し、其上なる樹皮を削りて、奸黨を助けて民を虐する村長の罪狀を記し置き、皆々打連れて山路を傳ひ、再び雅典の境にこそ歸りける、又雅典の都なる有志者等は、前日に巴比陀瑪留兩人の出發せるを聞て、皆其の安危を憂苦し居たるに、國境の一組なる通信委員より、以上の顛末を報知し來り、又西南の國境なる村落より、禮温の書翰到着し、巴比陀は重患の爲めに、尙ほ雅典の國內に滞在せることをも報じ來りしかば、皆々大に打ち喜び、其の看護及び忠告の爲め數名の有志者を派出しけるが、其後、日ならずして巴氏の



病も快復しければ、則ち諸士諸共に再び雅典の都に歸り住み、尙ほ回復の計略をぞ旋らしける、

鋤雲云。描出一個黑旋風李逵爲波瀾。此是小説家之本事。

柳北云。暴虎馮河。其免禍害。眞天幸己。

鳴鶴云。壯士直情徑行之態。大快人意。瑪留不容諫。拂袂而立一段。叙事逼真。遙呼應第

九回。志士分屯境上。救瑪留於萬死中。布置周密。一筆不苟。

又云。瑪留一拳毆懲暴吏。亦是快事。

學海云。此回亦與前回同趣意。描出瑪留人物。無他關係。然村吏凌虐一節。以見民間情狀。是志士之所以謀恢復也。蓋筆在於此。而意在於彼。所謂文之至者。如畫梅畫月。其正面在不着墨處。看畫者亦當向不着墨處求之。

### 第十三回 賢士獄中に在て理學を修む

傳曰慷慨赴

紀元前二百七十九年と云へる年も、秋の半に至りけるが、此時本國なる齊武に

義易從容就  
死難本回可  
以爲之註脚

於て、有志者の身上に關係せる一大事を生じたり、彼の正黨の一人にて、有徳の賢士と稱せられたる威波能は、去る三百八十二年第八月十二日の騷亂に、公會堂にて他の有志者と共に奸黨等の爲めに捕縛せられ、其後永く獄中に幽閉せられしが、同氏は年尙ほ壯なりと雖も、兼てより有徳の聞え高き人物なれば、獄に繋がる、の後と雖も、獄吏獄卒等に至るまで、皆深く心中に其人と爲りを愛敬し、奸黨等が残酷に之を取扱はしむるにも拘らず、彼等の爲に咎責せられざる限りは、最と丁寧に威氏を取扱ひ、又時としては、談話の序に國內の狀勢をも密報しければ、威氏は騷亂の日の顛末より、以斯明氏及び陀仁布氏等が就刑の事をも詳知するを得たるが、彌よ其身の遠からずして死刑に處せらるべきを覺悟し、獨り心に思へらく

古より英雄豪傑と稱せられて、其の生涯には幾多の功業を立て、聲名を天下に轟かせし人物も、一朝不幸の死刑に臨んで、未練なる舉動を爲し、之が爲めに其の徳操を傷け、其の人物を下し、前きに辛勞せる一生の事業を空しく

道本邦小説  
家者輒皆推  
曲亭氏爲兩  
首然彼學藝  
淺薄器識卑







ながら、身を起して窓下に就き、我を呼びし其人を見るに、此者は一兩月以前より此獄舎の監守と爲りたる一人の獄吏なりしかば、愈よ怪みて其意を問ふに、其者は忍びやかに答へて云ふやう

予は其名を安重と呼び、有志者を救ひ出さんが爲め此獄舎に入り込みし者なり、去る騷亂の年以來、巴比陀君の教示に隨ひ、獄中に在る有志者諸君を救はんとして、國都に忍び來りしが、獄舎の用心嚴重にて容易く入り難ければ、空く數月を過ごすうち、不幸なるは以、陀の二君にて、早くも處刑に及びしかば、我が遺憾やる方なく、何卒して手術を用ひ、責めては存命せらるゝ有志の重もなる人々兩三名なりとも、救ひ出さんとて頻りに肝膽を砕けども、未だ其便りを得ず、空く月日を過ごしたり、且つ不慮の變事を防ぐが爲めにや、獄舎の規則嚴重にて、其獄卒を備ひ入るゝさへ、委しく素性を問糺し、然る後にあらざれば容易に之を使用せず、然れば大切の罪人なる諸有志者を監守する獄吏の如きに至ては、之を採川するに最も厳しく注意を加へ、先づ



(圖八第) ム 術ヲ學理ヲ在ニ中獄氏威



獄卒の最も勤直なる者を選び、一二年之を使役し、其勤勞を察するにあらざれば、決して之を採用せず、故に假令ひ獄卒と爲て此の獄内に入り込むも、有志者には容易に近づき難き模様なれば、深く心を苦めしが、斯く思案して有らんより、兎に角獄卒と爲るには如かずと、夫れより頻りに傳を求めて、近村の相識る者が獄卒と爲り居たりしを幸ひ、先づ賤役に住み込みしが、心をを用るし甲斐ありて、一年計りを過ぎす中に、獄吏等の信用を得たりしかば、隙もあらばと伺ふ中に又一年を過ぎしけるが、我に深意の有りともし知らず、獄吏等は深く我が勤功を賞美し、本年の春に至りて、遂に獄吏の末に拔擢されしかば、尙も勤務に心を盡すに、今は早や大切なる罪人をも監守せしめ、君等の在ます此獄舎の監守役を命ぜられしは、僅に一兩月以前の事なりし、我が身の念願も早や成就せし思を爲し、直ちに此意を告げんと欲せしが、尙ほも注意に注意を加へて、今日までは過ぎしたり、今夜こそ人の在らぬを幸ひ、始めて本意を告げ参らすなり



と、彼の騒亂の夜、其老父が巴比陀を助けたる事、及び其家は嘗て巴家の恩を蒙りし事、又援兵を乞はんとて巴氏は雅典に赴きたる事まで一々委細に物語れば、威氏は疑心漸く解けて、深く其の厚意を謝する中にも、亦た熟々思ふやう、前年德行を以て希臘の聖人と稱せられたるソクラテス、冤罪の爲に牢獄に繋がるゝに當てや、就刑の前夜に、其の徒弟某竊に獄中に忍び入り、與に共に牢獄を脱せんことを強請せしに、ソクラテスは「獄を脱して國法を破るの人と爲らんより、寧ろ冤刑に死するの人と爲らん」とて、其徒弟の厚意を謝絶し、翌日に至りて遂に死刑に處せられしは、世上に傳ふる美談なれども（ソの一節は慈氏の希臘史）我とソクラテスとは其趣同じからず、何となれば我を捕へし奸黨等は、政府に似て政府にあらず、政府を奪ひし奸人なれば、今此の獄舎を脱するとも、徳義を害する所はなし、寧ろ此地を遁れ去て、此の國政を回復し、民を塗炭に救ふこそ、賢人君子の本意なれと、忽ち此に心を決し、乃ち安重の辭に従ひけり、然れども亦た己れ獨り牢舎を脱するを悦ばず、其身と與に厄難

を蒙り、今尙ほ獄中に繋がるゝ諸有志者をも伴ふて與に走らん事を望みしが、安重は之を難じ、獄舎の區別種々にして、監守の獄吏も同じからず、今己等の監守する獄舎には、威氏の外に唯一人の有志者あるのみにて、其人は前きに雅典の有志者より國情を探ぐるが爲に派出せられ、不幸にして捕縛されたる彼の安知本なり、故に若し他の獄舎に在る有志者を救ひ出さんと欲すれば、其事甚だ至難にして、且つ此獄舎に在る威氏安氏の二人をさへ、或は救ひ得ざるの恐れあらんと、切に之を諫めしかば、不本意ながらも、威氏は其意を枉けて、遂に安重の言に従ひけり、  
儲又遁れ出づ可き當日は、近日の内に執行する例年の大祭日の夜半と定め、尙ほ兎に角と逃走の順路及び其の手續等を謀り、此夜は互に別れけり、斯て又安重は隙を窺ひ、此獄舎に在る有志者安知本にも此企を通知し、唯其日をぞ待ち居たりける、愈々大祭の當日に至れば、舊例に従ひて、政府より、獄吏獄卒に至るまでそれぞれ酒饌を賜はりしかば、安重は其身の立身せる心祝にとて、



又更に酒肴を調い、同僚及び獄卒に至るまでも、手厚く之を饗應しければ、此夜は皆々打ち甘き、十分に歡を盡すに、安重は傍より頻りに酒を強ひけるに、同僚獄卒も酔を増し、暇を告げて各々酒席を退散せり、斯くて夜半に至り、兼て謀し合せし如く、安重は獄室を開きて威氏安氏の兩人を助け出し、各々用意の兵器を佩び暗夜に紛れて、三人共に恙なく此の獄舎を脱しけり、齊武より雅典に至るの街道は、行客の往來繁く、警備最も嚴重なれば、此の街道を経て、雅典の有志者と相合せんと欲するも、途上の危険甚だ多し、寧ろ是れより西北に向ひ、法斯須の地方に走るに如かず、同國は未だ半開の土地にて、其の人民の援助を求む可らざれども、前年より有志者の彼地に走って潛伏する者も少なからず、且つ其の道路も極めて險惡なれば、隨て行客出入の警備を忽せにするの有様なきにあらず、加ふるに齊武の國土に近き士是倫の山は、其の山脈遙かに遠く法斯須の地に連り、人の通はぬ地方も多ければ、都より直ちに此山路に潛び入り、法斯須の地方に赴くときは、或は逮捕の難を免かるゝを得べしと、兼て

謀議せしことなれば、三人は直ちに西北なる廓門に進み、其堞壁を攀ぢ越えて、只管に夜道を走りつゝ、翌朝の味爽には、早くも士是倫の山中に隠れ入りけり、三人は兼て數日の糧を用意し、山又山を踏み超えて、山に臥し山に起き、遂に日ならずして、齊武の國境を遁れ出で、法斯須の地方にぞ到着したりける、抑々威氏は正黨の有志者中にて、最も人望ある有徳の賢士にして、且つ沈勇壯武の人物なるに、今此人が斯く牢獄を脱したるは、民政を回復する有志者には、莫大の勢力を與へたるものにて、天茲に回復の大計をして漸く其緒に就かしめんと欲するものに似たり

鋤雲云。至平生勤厚劉文叔亦成此事乎。世間信賴者果多矣。

又云。我師安積良齋翁所著閑話中記。慶長五年關原軍敗。西帥石田三成就擒。戮死有

日。而三成偶病泄痢。猶求醫藥。不異平日。三成雖至奸。臨死從容。可謂有將人之度。況

如威氏其人。固守正君子。其坦々履道。雖在獄窓幽愁之中。不敢惶遽失措。可知也。

柳北云。仙鶴一朝脫樊籠。直冲天宇去。何等快活。



鳴鶴云。威氏通篇之行狀。寫出君子慎獨之真境。曲摸直描。精細無遺。特如這回。從容甘死狀態。筆々活動。蓋非自己胸中備道義者。決不能寫到此。又評人於患難。而不於安樂一語。最見作者之意見。

又云聞諸作者。本篇數百葉中。最苦心處。唯在這回僅々數葉。真然。

學海云。名賢豪傑。著功名於當世。垂聲譽於千歲者。人或求之於功名聲譽赫奕顯著。以爲是所以爲名賢豪傑也。不知名賢豪傑之所以名賢豪傑者。在學問德義心術。不在勳業事功也。作者欲寫出威氏後來大事業。先執置之囿囿中。極力摸寫其人物。以見名賢豪傑之本領。決非輕躁浮薄激義於一時者所夢見。其識可謂卓矣。

## 第十四回

名士身を屈し回復を謀る  
壯士慷慨して變節を詰る

巴比陀、瑪留の兩人が本意を達せずして途中より引返せし以來、雅典に在る有志者等は頻りに回復の計を旋らせども、未だ萬全なる良策を發明せず、又空しく五六ヶ月を過ごして秋の半に至りしが、長く他邦に落魄して、益々困苦を極む

凡貪婪權位  
不能見幾而  
全勇退高踏  
之節者大抵  
多古於然蓋  
自古若路易  
後世若那  
十四世則皆  
其才略足以  
濟之故能由

る中にも、有志者等は種々の手段を用ゐる、本國奸黨等の罪狀を枚へ擧げたる文書杯を作りて、之を本國の人民等に傳へしかば、人民は益々奸黨の治下に甘んぜずして、痛く彼等をぞ惡みける、又奸黨等は其政府を維持すること既に三年有餘に及びければ、何となく其心に弛怠を生ぜしものと見え、此年の春以來、稍く其本心を現し來り、政府を以て私利を營むの舉動次第々々に増長し、且つ擅に人民を逮捕して、己等の疾惡する者を罰せしかば、其爲めに獄舎に投ぜらるる者數百人の多きに至れり、故に此年夏頃に至りては、國內の人心頗る穩ならずして、民政を回復せんと欲するの志念益々其舉動に露はれけり、是に於て、奸黨等は大に驚き、如何にもして之を鎮靜せんと、百方其心を苦めけるが、國人をして思想を内政より轉ぜしむるは、外戦に如くものなし、然れども國事危殆に瀕するときは、又人民の爲めに乘ぜらるゝの恐れもあれば、寧ろ大事に至らざるの外戦を開くに如かずと決心しけり、嗚呼己等の政柄を失はんことを恐れて不急無用の戦端を開き、其の人民をして親を伐たれ子を撃たれ鋒







之を途上に要撃せんと論ずる者あり、或は又穩に詰責して耻辱を與へんと論ずる者あり、議論頗る有志者の間に喧しかりしが、巴比陀を始め重立たる人々は、痛く之を制止して、彼の比留利は深沈にして遠慮あり、且つ其志甚だ堅固なる性質にて、平生の行状より之を推すときは、決して俄に節操を變ずべき者にあらず、然るに今まで奸黨に屈仕するは、必ず止むを得ざるの事情あるならん、兎にも角にも密かに同人と相見て其胸中を叩くに若かずと、頻りに諭め止むれども、意氣激揚せる壯士輩は、中々に承引せざるを、辛ふじて宥め諡し、乃ち要撃論を唱ふる有志者の中より邊禮仁を選び、此人と巴氏とをして、隙を伺ひ、比留利に密會せしむることに決定せり、齊武使臣の一行は程なく雅典の都に到着せしが、隣國親密の交際なれば、總て鄭重待遇を蒙りて、準備の館舎にぞ投じける、是に於て巴氏等兩人は、直に比留利を訪はんと欲したれども、奸黨の腹心なる比道が同舎に在りと聞きければ、容易に比氏を見ることが能はず、殆んど之が爲めに困却せしかば、巴氏は忽ち一計を案じ出し、彼の恩人

なる當國の行政官李志を訪て、此困却の有様を物語りしに、李氏は暫時打ち案ぜしが、忽ち一策を授けて曰く、他國の使臣當國に來たるときは、當國の行政官たる者、時として之を私邸に饗應することあり、然れば今我が家に正使比留利を招待するは易けれども、副使を措きて獨り正使を招きなば、必ず其の疑を蒙らん、然ればとて副使をも與に招待せば、或は君等の比留利と密會するの形跡を推察せらるべし、因ては我と親き同僚法禮馬と相ひ謀り、兩人同時に招状を發し、同日同時に我が宅へは副使を招き、法氏の宅には正使を招き、法氏の宅に於て君等を比留利に密會せしめば、事或は安全ならんと聞くより巴氏は大に喜び、彌よ其期日を定むる上は、直ちに之を通知せんことを求め置き、相別れてぞ歸りける、其後、日ならずして、李氏より饗宴の事愈よ定まりし旨を通知し來りければ、其期日に至て、巴氏等兩人は疾くより行政議官法禮馬の宅に赴き、主人の言



亡士未叙數  
語大起個悽  
既來其胸間  
無限感慨使  
讀從不言絕  
妙處冥會深絕

に從て一室に潛み居たり、斯くて案内の時刻に至り齊武の正使比留利此家に入  
來せしかば、主人の意を用ゐて懇ろに之を饗應し、酒酣なる比、比氏に引き  
會はずべき人物ありとて、密かに之を巴氏等兩人の潜居せる一室に伴ひ行き、  
己は直ちに其處を避け去りけり、比留利は二人を見るよりも、且つ驚き且つ喜  
び、辭短く互に再會の喜びを陳ぶる中にも、比留利は熟々巴氏の容貌顔色の  
以前に變りしを打眺め、深く心に感ぜしにや、悵然として巴氏に向ひ  
富貴の家に長じ玉ひし昔の姿は消へ失せて、斯くまで容貌顔色の變り果てた  
る有様に、騷亂以來三年の間、他邦に流寓落魄せる憂き艱難も然こそなら  
ん  
と愁を含む其辭の、未だ終るや終らざるに、憤激慷慨の邊禮仁は、忽ち傍らよ  
り言葉を發し  
斯く我々は落魄して濟民回復の事業に奔走し、貧苦、疾病、刺客の難に命を  
殞せし者さへ多く、積もり積もり不幸に引き換へ、君には本國の奸黨に仕

へて、今は正使に拔擢せられ、斯く迄榮華を得らるゝは、さぞ満足にやある  
ならん

と言句の間に憤怒を含み、其變節を詰責する不滿の心緒を現はしければ、比留  
利は更に容を更め、辭を正して云ひけるは

余は兼てより此地に潛伏せる我が朋友に巡り會はんと欲するの心切なりしか  
ども、副使の嫌疑を避けんが爲めに、今迄躊躇し居たりしに、今斯く君等に  
密會するを得たるは、是れ天の我々をして民政を回復せしむるものなり、我  
が心中を包まず吐露して、君等の疑惑を解かんが爲めに、本國を出立せしよ  
り、豫じめ二品を携へ來たれるなり、其一品は則ち之れなり  
と一包の封牒を取り出して之を二人の前に差置き、又曰ひけるは

今一品は外ならず、旅宿に遺し留めたる我が一人の愛子なり、君にも兼て知  
らるゝ如く我には一人の愛子有り、其年未だ十餘歳、父母の膝下を引き離し  
て、他國に留むる齡ならず、然るに之を同伴せしは、愛子を以て人質とし、



我が濟民の丹心を諸君に明さん爲なるのみ

と聞き畢て、巴氏は其心に符合する所ありしにや、少しく欣然なる色を現はし、邊氏をして其の封牒を開かしむれば、是れなん、國境國都の通行券にして、其數凡そ十二枚ありければ、巴氏等二人は又更に喜色を現はし、今は比留利の他志なきを信する旨を陳べ、夫れより本國當時の民情を審問せしに、比留利は之を詳説して曰く、

齊武舉國の人心日に舊時の民政を渴望し、而も未だ之を回復し得ざるの有様は、恰も千斤の爆發藥を積で一點の導火線なく、萬頃の水を貯へて一條の決水口なきが如し、假令ひ未だ爆發決潰せずと雖も、其爆發決潰の大勢は已に全く完備せり、故に若し今其導火線となり、其決水口となる者あらば、千斤の爆發藥は一時に破裂して天地を震動し、萬頃の水は忽ち決潰して原野を掃蕩し、舊時の政體容易く此に回復して、人民鼓腹の樂を得ん、濟民の功業をなすは唯此の時を然りとす

と、是より又其心算の密計を説出して曰く

他國にさせる使臣の本國に歸るに當り、行政議官之の響應するは齊武の舊例なり、然るときは使臣も亦た其答禮として行政議官を私宅に饗宴することあり、然れば此度己が本國に歸るに當りては必ず行政議官の響應を受けん、然るときは己も亦た自宅に彼等を招待すべし、故に此時を期し、十數名の有志者本國に忍び歸りて己の邸中に潛伏し、宴飲方に酣なる頃、不意に起つて奸黨を掩撃せば、之を除くこと甚だ容易ならん、然して後此事を人民に通報せば人民は必ず狂喜して直ちに回復を布告すべし、然るときには手に唾せずして一瞬間に回復の大功を立て、濟民の大業を成し得べきことにあらずや

と巴氏等二人は、是の奇計を默聽して暫時の間は肅然たりしが、是の策は眞に奇功を奏し得可しと思ひけん、大に之を賛成せり、然れども此策は本と奇計中の奇計にして、其危険なる事、實に名狀す可らず、假令ひ有志者等の身に通



行券を帶るも、國境より國都に至るの長途に於ては、逮捕に逢ふの危難あり、好し又果して恙なく國都に入るとも、奸黨が其の心を安んじて、比留利の宴饗に赴くべきかは是も亦た覺束なし、且つ又た奸黨を除き得るとも、カデミーの本城には猶ほ勇悍なる斯波多の成兵あり、故に早く變報を得て疾く逮捕の手配を爲さば、事忽ち中ごろに敗るべきなり、故に尋常平生の思慮を以て之を見れば、此策は危険のみにして成功の望なき者なれども、只管回復に熱心して、閃見する小機會にも乗せんと、待ちに待ちて三年有餘の歲月を空過せる有志者なれば、其眼中には此策も唯成功萬全の者とこそ見えしならめ、實に此奇計を成就せしめんには、唯非常の大膽と非常の秘密とを要すべけれ、斯くて此事に付き、三人の計議略々定まりければ、比留利は又曰く（比留利が雅典に使用して有志者と密謀を爲すことは俱氏の希臘史）

奸黨を饗應するの期日彌よ定まる上は、宴饗を助くる爲めに逆、絶技の樂人を當國雅典より招聘すべし、故に此地の樂師某の許に、我が招聘の使者來ら

ば、其者に就て宴饗の時日を詳知せよ、又十數名の有志者が齊武の國都に到達するは、宴饗の前日の薄暮を以て期とすべし、且つ又國都に入るときは、先づ某街なる加倫の家に潜伏すべし、前年騒亂の後、同人は深く世事のあじきなきを感じ、百事を擲ちしと披露して、今は城市の片隅なる一街に閉居し、敢て世人に交らざれば、世人も今は全く其人を忘れたるが如く、從て奸黨等も亦た其の舉動に注意せざれば、同人の家こそ有志者の爲めには究竟なる潜伏處なれ、我が齊武に歸りし後は、尚ほ同人と與に當日の模様を計り、委細の事を謀し合せん、其他當時齊武に在る堅志の有志者數十名をも、宴饗の夜我が家の近街に集め置き、萬一の時に臨んで始めて委細を打ち明し、彼等に盡力せしむべし、又此の事に付き腹心を打明けて、與に共に計る可き本國の有志者は、唯加倫と匹方善の兩人なり

と語りければ、巴氏等二人は一々之を了諾する中にも、巴氏は比留利に向ひ、加氏は其の志堅固にして事を敗るの恐れなしと雖も、匹氏は其性勇氣に乏く、







## 第十五回

賢士治亂を説て親友を諫む  
英雄機を察して大計を定む

齊武が法斯須の諸國と開戦に及ぶも、雅典政府は齊武に對して別に敵意を挿まざる旨を返答せしかば、齊武使節の一行は使事全く果て、其吉報を一日も早く本國の政府に通知せんとて、直ちに此地を出立したりけるが、正使比留利は、其一子を然る可き雅典の學士に托して、之を此地に留め置きけり

又巴比陀、邊禮仁の兩人は、比留利に密會して、意外の好報を得たれば、直ちに之を重立たる有志者勢應本、圭皮度、勇具貞、多莫具、吳兒陀、區利染、杜倫、美、波、重、生良明の九名に通知しけるが、此計策は最も秘密を要するが故に、他の三百餘名の有志者にも、猶ほ之を秘し置き、更に通知すべき場合をぞ待ち居ける、又重立たる者の中にて多莫具の如きは、其の應饗の期日を知らんと欲し、音樂を學ぶに事寄せて、早くも日々樂師の家に出入しけり、斯くて一兩日を経たる時、巴氏の寓居に來て氏に面謁を請ふ者あり、其姓名を問へ

ば、何ぞ圖らん、其者は去る騷亂の年に別れてより、絶て久しく音信なき彼の漁翁の一人安重にてありければ、巴氏は大に喜て直ちに之を延き見るに、安重は巴氏の恙なきを祝し、夫より別後の經歷を陳べ、前きに比留の港に於て巴氏より密計を授かりし後、一旦村里に立歸り、齊武の國都に赴きて、以斯明、陀仁布の二氏を救ひ出さんと欲せしも、其意を遂ること能はざりしが、此度幸にして遂に威氏を救ひ出せる願末を譚り、且つ威氏と共に救ひ出したる有志者は安和本にて、其雅典に在りし頃の通信委員たる人々の住居を知り居たれば、今其言に従て此地に尋ね來り、斯く易すくと巴氏に再會せることを述べ、又威氏は其後尚ほ法斯須に在りしが、同地に潜伏する齊武の有志者も、其數甚だ少からずして、百餘名に上れるが、不圖威氏に巡り會ふ者ありしより、次第々々に相會して一團結をなし、遂に威氏を推して其首位に置きければ、威氏も暫く彼地に留りて、當地に來たる事をば見合せたり、因ては此願末を當地の有志者に通知し、以後は南北相應じて共に回復を計らんとの趣意なるを語りて委



細に威氏の傳言を致しければ、巴氏は滿面喜色を呈して其悦び大方ならず、蓋し國事に就て死生苦樂を共にせんと誓ひたる親友が、久しく獄舎に繋がれて、釜中の魚に似たるの有様は、巴氏をして其奔走艱難の間にも、常に之を忘るゝこと能はざらしめたるに、何ぞ圖らん頼み甲斐なしと思ひたる漁父の子安重の苦心に因て、我が親友を救ひ出し、後來與に國事を計るの悦を得んとは、今一人の威氏を得たるは、巴氏の身上に取ては尋常千萬の兵を得たるにも、遙に優るの思ひせしなるべし。

巴氏は深く漁父の子安重の才幹を賞し、其辛勞を謝せしが、前きには齊武の正使留比利が密謀を通じて奇計を授くるあり、今又得難き賢士が獄を脱して回復に盡力するあれば、巴氏は回復の大計も最早や十二分に成就せしが如き心地して、威氏の脱獄の顛末を速に此地の諸有志者に通知しければ、諸人の悦びは又更に大なりき、諸密謀を行ふの期日も甚だ遠からざれば、巴氏は片時も早く此事を威氏に通知して、共に事を謀らざるべからずとて、乃ち翌日直に密謀の

大略を一書に認めしが、此は極めて大切の密書なれば、彼の敏捷にして才幹ある禮温に命じ、此書牘を齎らして、漁父の子安重と共に、法斯須なる威氏の寓居に赴かしめけり、是に於て兩人は晝夜兼行し、雅典より西北の道を迂回して法斯須に向ひ急行せり

扱も巴氏等は雅典に在て、一方には日々本國の響應期日の定まるを待ち、一方には日々威氏より返書の來るを待ちけるが、日ならずして執事禮温は威氏の返書を齎らし、恙なく雅典に歸り來て之を巴氏に呈しけり、巴氏は心急かれて取る手遅しと披き見れば、這はそも如何に、其の意見の全く己と反對して意表に出たる返答なり、其返書の大略に曰く

堂々たる舉兵公戰の改革は、其利大にして其害小なり、然れども暗刺狙撃を行ふ詭計の改革は、其害大にして其利小なり、凡そ公戰を以て改革を成さんと欲するときは、國人衆多の勢力を合せざるべからず、然り而して、衆人歸向するの正黨は、獨り衆多の勢力を合し得べきも、衆人歸向せざるの邪黨は、



衆多の勢力を合すること能はず、故に公戦を以て勝を制する者は、是れ國人の好む所を遂る者なり、公戦を以て敗を取るものは、是れ國人の好まざる所を行ふものなり、是を以て公戦の改革は正理を執り、民心に従ふ者獨り之を能くす、苟も民心に背き邪路に在る者は、公戦の改革を行ふこと能はず、是れ公戦の改革は其國人に不利少き所以なり、然らば則ち公戦の改革は、常に國人を利すべきのみならず、天下後世に對して、其の改革は實に當時人民の好む所なることを公表明示するを得べし、昔時雅典の正黨が二十奸黨を追ひ、其國政を回復するに當てや、堂々たる公戦の改革を行ひ、其の舉動は實に國人一般の好む所なることを天下後世に表明せり、是則ち雅典有志者の美德なり、

若し夫れ詭計の改革は、國人衆多の力を要せず、僅々數名の人を以て能く之を行ひ得べし、故に國人と希望を同する者獨り之を行ひ得るのみならず、國人の希望に排反する者も亦た能く之を行ふ、是を以て詭計の改革は假令ひ容

易に其功績を收め得るの僥倖ありとも、其改革は果して國人多衆の之を好む所なるや否やを知ること能はず、又之を天下後世に證明すること能はざるなり、然るに不祥なる詭計の改革を行ふの悪例を開き、正黨邪黨をして國人多衆の力を要せず、互に爲し易き詭計の改革に依頼せしむ、其の害たる舉て言ふべけんや、假令ひ今日詭計を用ゐ、我々正黨をして一旦回復の志望を達せしむるも、他日又必ず詭計を以て之を改革せんと企つるの邪黨あるべし、斯く循環して互に詭計の改革を行はば、政緒紊亂して騷擾絶えず、齊武の人民夫れ是より疾苦せん乎、果して然らば、後世子孫に對して、我々有志者は其の咎責を辭するを得ざるべし、斯の如くんば、我々有志者が今日齊武人民に與へんと欲するの利益は、適々以て其の不幸を増加するに過ぎざらん、先きに雅典の正黨士良武等をして、詭計の改革を行はしめば、爾後奸人も亦詭計を用ゐて之を傾覆せんと企て、擾亂絶ゆる期無かるべきに、雅典が今日の如く安寧昌盛を保ちて民政の幸福を享有することを得たるは、是れ實に



當時の有志者等が詭計の改革を行はずして公戦の改革を行ひしに因れるなり、

且つ本國の奸黨等が、比留利の招請に應じて其宴席に赴くは、是れ彼等が深く比留利の異志なきを信ずればなり、然るに其の事業は假令ひ人民の爲めなるにもせよ、人の我を信じ我を疑はざるに乗じて之を掩撃せば、又徳義の罪人たるを免かれざるべし、是れ我々の宜しく爲すべき所にあらざるなり、故に假令ひ向來尙ほ幾多の歲月を費し、幾多の艱難辛苦を嘗むるとも、我々は只公戦の改革を行ふべき時機の至るを待つ可きのみ、若し雅典に在るの朋友皆舉て奇計を可とし、之を舉行せんと欲すとも、我れ一人は斷じて其の密謀に與みする能はざるなり、雅典に在るの朋友諸氏も亦た齊武人民の爲めに一時の幸福を求るに急ならずして永遠の福利を計圖せられんことを企望す、云々

亡士宿志將

と、嗚呼是れぞ後世に至るまで、聖徳の君子と稱せられたる齊武の政治家が、

近於酬而忽  
提出個經了  
其熱心使讀  
者閱地懶  
殺氣殺懶  
妙絕

治亂を察し徳義を重んずるの金言なりき（威氏が詭計を沮むことは慈氏俱氏の希臘史）

巴氏は此の返書を幾回となく繰り返して熟讀したる後、直ちに人を馳せて、勢應木、圭皮度、勇具貞、區利染、波重等を其寓居に招集し、扱諸氏に向ひて威氏の返書を示したるに、諸氏は皆兼てより威氏の勇武を頼み、其徳行を信仰したることなれば、今此書を見るより恰も熱石に冷水を注ぎ懸けられたるが如く、暫時の間は只呆然として黙し居たりけるが、威氏の説に従はんか或は彼の密謀を決行せんかと、議論頗る紛々として定まらず、此時まで終始沈黙せし巴氏は、之を見るより少しく憤然たる顔色を見はして、諸氏に打向ひ「抑々一國政治の基礎は一國の人心に在り、故に假令ひ奇計の改正なりとも、正人之を行へば國內安寧の好結果を得べく、姦人之を行へば久しからずして敗るべし、今や齊武の人心は皆回復を渴望して、其基礎已に定まれり、然らば之れを改革するに當て、假令ひ奇計を用ゆるとも好果を得んこと疑ひなし、若し又他日邪人有



て奇計の改革を行ふとも、二三の正人をば除き得んも、一國の人心をば動かす得べからず、且つ我々有志者は、回復を思ひ立たる其日より、身をも思はず、名をも思はず、只國政を改革して、現世未來の國人に幸福を與へんとこそ誓ひしなれ、假令ひ天下後世より如何なる批評を受くとも、此大業を爲さずや止む可き、諸君は兎もあれ、我一人は斷じて我が意を行ふべし、天我々に奇計を授けて其事將に成らんとする、斯る場合に至りながら、今更ら何とて遲疑すべきや」と決然として見えにければ、其一言に勵まされて、他の人々も色を作し、皆々同意を表しける、  
抑々巴氏と威氏とは刎頸の親友にて、共に久しく國事に盡力し、騷亂の日も同じく危難に罹りし程にて、兩人私交の友情を論ぜば、骨肉も啻ならず、然れば今此の大事を擧ぐるに臨では、兩人の中何れか其意を枉けて一方の見込に隨ふならんと思ひの外、人民の利害、國事の得失に至ては、兩人少しも持論を枉けず、各々其意を行はんとするは、是れ則ち私情を捨て、公義に就く英雄志士の

交際なり、若しも二氏にして尋常女々しき性質ならんには、互に事を與にせざるを怨み、或は憤恨を醸す可きに、其意見の異なるにも拘らず、互に豁如たるの有様は、尙ほ後回を讀で之を知れかし、  
衆議彌よ奇計を行ふに一決しければ、巴氏は乃ち又一書を認め、雅典に在る有志者が議決の趣を、法斯須なる威氏に通知せん爲め、再び其執事禮温をして彼地に赴かしめんと欲せしとき、樂師の許に出入する有志者多莫俱は、遽たゞしく來訪し、只今本國なる比氏の許より、樂師を招聘するの使者到着し、饗應の期日は彌よ來る十二月十一日と決定せる由を通報しければ、之を聞く諸有志者は、狂喜して手の舞ひ足の踏む所をも覺へず、巴氏は此等のことをも委細に認めて訣別の一書を作り、禮温をして之を帶び、威氏の寓居に赴かしめたり、

鋤雲云。威波能意見。公明正確。決非迂緩不達機者。但較之巴氏。欠一段活潑耳。

柳北云。威氏之仁。巴氏之義。共不失爲正人矣。

鳴鶴云。威氏諫巴氏書。句句君子之言。使人知所戒慎。最覺益世。不可等閑讀過。又巴、



威二人所執各異。而不傷交誼。是妙處。志士盡國。不苟合。最足戒世人。巴氏不容威氏之諫一段。見實不能已之情。叙事悲壯。

又云第十三回威氏脫獄。大強人意。第十四回比氏通謀。始有望于恢復。而這回首插威氏諫止之一段。使讀者憾其蹉跌。是老手筆。

學海云。凡欲起一大事業。必有許多障礙。或未發而作。或將發而生。或業殆垂成而出。或自外而來。或自內而至。變幻百出。不可端倪。此回名士等得好便宜。欲直行之。忽爲威氏所沮。其理明義確。殆不知所出。是一障礙也。然巴氏有計。雖詭而事出正。決無不可一言。乃排除此障礙。何等敏捷。以下每一障礙。有一排除法。或出人意。或成天意。逆做箇恥復大事業。一層妙一層。一節奇一節。是作者手敏而密處。

### 第十六回 諸名士死を決して國都に歸る

本國にて響應の期日既に定まりければ、雅典に在る重なる有志者は、皆喜び勇む中にも、此に當惑せる一事あり、度々前にも記載せる如く、當時雅典に潛

伏せる有志者は、其數凡そ三百名以上なるに、此度の奇計を行ふには、其人員唯僅に十數名を要するのみ、且つ通行券の數も亦た十二枚に過ぎざれば、事を行ふ有志者の員數も、此數に超ゆべからず、又前きに主謀者比留利も「事を行ふ人員多きに過ぐれば發覺の恐ある」を戒め置きたれば、此密謀を行ふの人員は、如何にするとも十二名を超へしむ可らず、然れども單に十二名を以て行ふときは、彼の慷慨悲憤の氣其の胸中に充滿して、只破裂の風窓を求むるの有様なる、三百餘名の有志者等に取て、如何ばかりか不本意ならん、然れば當時雅典に在る有志者の惣數三百餘名をして、悉皆其働をなさしめ、其成敗安危を一同に決せしむるに如かず、爾爲さんには公戰と奇計との兩策を同時に併せ行ふこそ宜しかるべけれ、因ては十二名の志士が國內に忍び歸りて奸黨を除くのを夜を期し、三百餘名の有志者は、之と同時に國境に於て義兵を擧げ、堂々と國內に攻め入るべし、斯く外攻内發の二策を併せ行ふ時は、雙方共に便宜あり、若し内發の奇計其成功を過つとも、外攻の策は或は成就するやも知れず、又不



三百人之與  
雖有高下若  
其磨一劍之  
志三歲猶一  
日則未嘗始  
不相敬也今  
至舉事日設  
令有彼此之

異不特拂人  
情亦已悖天  
理矣如是配  
劑來極爲不  
偏頗妙絕巧

幸にして外攻の策を誤るとも、内發の奇計は成就するも計られず、斯く兩計を並び行ふときは、事に於て至便なるのみならず、雅典に在る三百餘名の有志者をして、悉皆其力を盡さしむるを得べしと、衆議遂に一決せり、抑々瑪留始め三百餘名の有志者は、三年の間他郷に落魄して同く艱難辛苦を嘗め、節を屈せぬ人々なれば、其智愚才略に異同ありとも、回復の熱心には輕重なきに、今斯く大事を擧ぐるに臨み、十二名の外なる人々をして、其辛苦を空くせしむるは、蓋し巴氏等の情誼に於て忍びざる所なるべし、故に今此二策を并用せしものと察せらる、亦た以て有志者等が友情の深きを知るべし、扱又奇計を行ふ十二名は、最も強健勇武にして、且つ沈靜なる者を、三百餘名の中より精撰すべき筈なれども、始めより此謀に與る十名の人々は、皆自ら之を切望して他人に譲る事を肯ぜざれば、乃ち此十名に巴氏を加へて、此に早く十一名の人員は定まりけるが、通行券は十二枚にて今一枚の餘殘あり、乃ち然るべき人物を誰れ彼れと評議せしに、彼の瑪留は性來短氣にして動もすれば失

策ありと雖ども、膂力絶倫にして武藝も亦た拔群なれば、宴席に切り入る緊要の働きには、實に究竟の人物なるべし、又此度は彼一人獨行するにあらず、他の有志者に伴従することなれば、前日の如き失策を爲さしめざるを得べしとの論多數にて、遂に今一人は瑪留とぞ定まりける、蓋し瑪留は其性頗る淡泊にして、諸有志者にも平常甚く愛せられ居たりしかば、今此撰には當りしなるべし、又巴氏は此決議に付て、憂喜相半ばするが如き色あり、蓋し氏は瑪留が此度の人員に洩れしを憤て短慮に飛出すの患なきを喜べども、又其の途中にて如何なる珍事をか惹き出さんことを憂ふるならん、斯く諸有志者等は、既に外攻公戰の策と内發奇計の策とを定め、又此の奇計を行ふ可き十二名の人員をも定めたれども、猶ほ此計の洩れんことを恐れて、未だ輕しく三百餘名の人々に通知せざりけり、巴氏は其寓舎に歸るや、瑪留に向て、始めて此度の密謀の大略を陳べ、同人をも一行の人員中に加へたる事を語り聞せければ、瑪留は之を聞くより、狂喜の餘り室内を踴躍してぞ廻りける、



有志者等は出立及び到着の日限日割など會議を爲しけるが、彼の樂師の家に出  
入せる多莫俱の報告に據れば、饗應の當日は彌よ十二月十一日との事なる故、  
兼て比留利との打ち合せに隨ひ、其の前夜則ち同月十日の夜までに、本國の同  
志者加倫の家に達せざるべからざるなり、  
抑々雅典の都より齊武の都までは、其路程凡そ三十六里にして、通常は之を四  
日程とす、然れども此度は大切の旅行にて、假令ひ其身に通行券を帶るとも、  
成る可く人目の少きを好み、本道を避けて間道をのみ通行すべければ、四日程  
に尙ほ一日を加へて之を五日程と見込み置くべし、又雅典の都より齊武の國境  
までは、相距ること十六里に過ぎざれば、若し早曉に出立せば、其日の中に齊  
武の境上に到着すべし、故に三百餘名の有志者が義兵を擧ぐるの期日を、同  
く奇計を行ふ十一日の夜と定むる時は、公戦を行ふ一群の有志者等は十二月十  
日の朝を以て、雅典の都を出立すると、其の時間には不足なし、故に十日の  
前日九日及び八日を以て、此の一群三百餘名が擧兵の準備を爲すの時間と定め

なば、八日の朝に於て此企を通知すると遅かるまじ、然るときには奇計漏  
泄の患なくして、兩策與に全からん、然れば本國に忍び入る十二名の一組は、  
十二月六日の朝を以て此地を出發し、十日の夜を以て國都に忍び入るの手筈と  
し、其他三百餘名の有志者には、十二名が出立せし後、第三日目即八日に此企  
を通知し、十一日の午時までを以て境上に赴くの時間とし、十一日の夜を期  
して國境に亂入せしむべしと、評議愈々決定せり、  
此時は早や十二月の始めにて、出發の期日も程近ければ、重もなる諸有志者は、  
假染にも三年間此地に在て、交を結び好を重ね、國事に關して多少の援助を與  
へくれし人々、さては一身上に付て恩誼ある人々の家を、只何となく餘所なが  
ら暇乞ひの心持にて訪問し、深く是迄の厚意を謝したりけるが、彼の當國の慷慨  
家なる志士阿慈頓等の如きは、有志者に拘る密謀のあるとも知らず、頻りに  
彼等を慰め勵まし、雅典人民の義俠心昔日の如く盛ならざるが故に、未だ齊  
武の志士を援くること能はざれども、若し齊武の志士が、一旦回復の義兵を擧



ぐる等の事あらば、當國の人心も必ず之が爲めに奮起すべし、然る時には、假令ひ當國政府の官吏は應援を拒むとも、當國の有志者等は、義勇兵を募りて齊武の志士を救ふこと難からざれば、何卒齊武の諸有志者も屈撓せずして百難に堪へ、回復の義旗を擧ぐべきを勉めよと、最と親切に慰めければ、有志者等は心の中に深く其義心を感じつゝ、後援あるを喜び合へり、  
偕て出立の前日に至りければ、巴比陀、瑪留の兩人は、彼の行政官李志の邸に赴き、「近日思ひ立つ事ありて此地を出立する」旨を告げ、當國に遁れ來りし始めより、三年間の歲月を、何不自由なく歎待せられたるの厚意を謝しけるに、主人は固より世故に慣れたる老政治家なれば、略々兩人の意中を察せしにや、痛く其の別れを惜み、俄に小宴を開きて二人を饗應し、又其愛女令南をも呼び來りて、此宴席に待せしめけり、  
家女令南は、去年の秋に盡きぬ名残りを惜みも敢へず、一たび別れを告げしよ、思ひは轉た眞澄鏡、晴れぬ案じに打過ぐる、月日も已に一年餘り、三里の

路は遠からぬも、家の訓への嚴正ければ、相見る由のなきのみか、空行く雁の便りさへ、絶えて久しき其人に、今相逢ふの喜びは、世に譬ふべき物なきも、其喜びに引換へて、又も別れの酒宴とは、情緣薄き我が身かなと、平生の端正なる風姿、惻愼なる言語動作も何となく、唯茫然と見えにける、又巴比陀も今此人に相逢ふに及んでは、斷腸の思ひあるなるべし、されば巴比陀と令南と二人が暗に別れを惜むの情は、彼の主人李志が名士の遠く別るゝを惜み、又瑪留が其恩人に別れを惜むの情趣とは、甚だ異なる所あらんか、斯くて主客歡を盡すの後、兩人は暇を告げて、遂に此家を立出けり、  
扱も十二名の有志者等は、尙ほ明日出立の手筈を誤らざらんが爲めに、此夜も再び會合しけるが、此時巴氏は諸人に向て二條の要求を爲しにける、其の第一條は則ち  
此度の奇計は、固より甚だ喜ぶ可きものに非らざれども、國政を回復し人民を救ふが爲めに止むことを得ずして之を行ふものなれば、成る可く心を用る



て残酷の所業を避けざるべからず、就ては當國の名士士良武が、民政を回復せしに當り、三十奸黨を死刑に處せしめて之を追逐せるの美德に倣ひ、此度宴席にて奸黨等を襲ふも、萬々止むを得ざるにあらざれば之を殺戮せず、之を捕縛し置き、事定まるを待ちて後、彼等を他國に放逐すべき事、

又其第二條は

奸黨に従屬して暴威を振ひ、常に人民を虐げ有志者を苦しめたる者と雖も、其正理に歸順するに於ては、既往の罪迹を咎めずして之を不問に置く可き事若し諸氏が以上の二件を實行せざるに於ては、此度の奇計は、天下後世の爲めに私憤を洩らすの誹を蒙るべく、且つ正人の本意にあらざるを切論せり、然れども諸氏の中には、國政を回復し人民を濟ふの公憤と、己等の苦しめられたる鬱怒とを散せんとするの私憤を混交したる者なきにあらねば、或は此の要求を難んずるの有様ありしが、皆巴氏の要求の正理なるに服して、遂に一回此の約束を守るべき誓詞をぞ爲しにける、

人情之微妙  
昔者松雪爲  
馬身盤礴爲  
馬作者草是  
等處時亦蓋  
以己爲齊武  
亡士矣

此夜も程なく明けて彌よ六日となりければ、諸有志者は喜び勇み、兼ての手筈に隨て、十二人を三組に分ち、巴比陀、瑪留及び多莫俱、邊禮仁、吳兒陀の五人を一組とし、又勢應本、波重、圭皮度、勇具貞、杜命美の五人を一組とし、又區利染、生良明二人を一組として、或は農夫或は商人と、思ひ思ひの扮装を爲し、各々一枚の通行券を帯びて、本國の都なる加倫の宅に再會を約しつ皆夫れく旅立ちけり。今までは多年の志願を遂げ回復の大業を果さんと欲する憂憤熱情の爲めに、然まで此度の密謀を危険なりとも思はざりしに、今彌よ出立するに臨んで、始めて此企の實に危険にして、其成功は只倖僥の天運なるべき眞性質を發見せり、

却て説く雅典に使したる齊武の正使比留利は、其の使事を本國に復命したるに、奸黨等は比留利が首尾よく使事を果せしを賞賛し、又副使より比氏の舉動を聞くに及で、益々其他志なきを信じ、乃ち舊例に因て宴會を開き、大に比氏を饗應したりしかば、比氏も亦た其答禮の爲めに、十二月十一日を以て、己の邸



宅に奸黨の重立たる者七八名を饗應せんことを請ひ、又宴席の興を添へんが爲めに、雅典より妙技の樂師を聘し、且つ數名の佳人を撰んで杯酌に侍せしめんと欲する趣を陳べければ、奸黨等は何れも大に喜びて、其招きに應ずべきよしを許諾せしが、其中にも比律布の如きは、固より漁色の人なれば、猶ほ更ら之を喜びけり、然るに茲に主人をして失望せしめたるは、彼の奸黨の巨魁なる冷温知にして同人は如何に思ひけん、事に托して此の招待を辭したりけり（タの一節は志氏の希臘史）

抑々冷温知は、其性質勇武にして且つ才略あり、若し私慾心だに無かりしならば、之を正黨の中に置くも、亦一廉の人物たる可きに（レの一節は慈氏の希臘史）只其私利心の強きが爲めに正黨に齒せられず、然れども猶ほ其才略を以て奸黨等の巨魁と仰がれ居たり、主人は冷温知の來らざるを聞きて大に失望せしが、又熟々思ふに、假令ひとり人の冷温知を洩らすとも、其羽翼たる究竟の奸黨七八名をだに除きなば、冷温知如何に勇略ありとも、翼を失ふ鷲鳥の如しと、

猶ほ頻に其日の手段に注意しけり、然るに奸黨の一人なる皮貞も、亦た此招待を辭してければ、重立たる奸黨九名の中にて、主人の招きに應じたるは、亞留知、比律布、方柳知、久理知、次久禮、枉刺善、可武利知等都合七人とぞ爲りにける、（ツの一節は慈氏の希臘史）主人比留利は種々に此日の手筈を憂慮し、常日饗應の設けにとて、其の房室に大修理を加へ、又客室と隔たりたる其家の堅固なる石室を修理し、窓牖及び出入の扉をば、悉く堅固なる鐵扉に改造して、家内の用意は略ほ夫れ々に整ひけり、又國都に忍び入る十二名の有志者を潜伏せしむるの手筈をば、是より先き已に同謀者の一人加倫と相謀り、其家を以て彼等の潜伏處と定めけり、又事を行ふの夜に當り、有志者の應援に供する爲め、事に托して、數十名の志士を其近街に集め置かんと欲せしが、容易に此夜の企を他言し難ければ、只志士の中にて頭立たる匹方善一人に通知して、他の者には其夜事を行ふの際に至る迄、之を通知せざるこそ萬全ならんと考慮せり、斯くて饗應の前々夜、即ち九日の夜に至りければ、始めて私かに此企



を匹方善に告げ知らせける、斯くて内外の準備已に全く整ひたれば、主人比留利は只管響應の期日の至るを待居たり、九日の夜、始めて比留利より此企を聞き得たる匹方善は、頻に當初之を賞賛したりけるが、元來此人は熱心の有志者なれども、曾て巴氏の比留利に忠告せるが如く、其性質に勇氣乏しく、事を行ふの際に臨んで、遲疑不斷の失あるなり、今比留利より此企を聞かば、此夜は遂に眠ること能はずして、獨り心に思ひけるは

此企は其の成就する一方より考ふれば、實に新奇の妙案なれども、亦た一方より考ふれば、危険此上もなき手段にて、先づ第一には兼てより奸黨等が國境國都の出入及び旅客の宿泊を取調ぶること甚だ嚴重なれば、十餘名の有志者が國都に入込む間には、或は逮捕を蒙る者有りて、此企必ず露顯に及ぶべし、又第二には好し有志者等が首尾よく國都に忍び入るとも、奸黨等は常に數百の衛兵を従へ居れば、果して之を宴席より遠ざけ得るやも覺束なし、

果して然らんに、有志者等は奸黨を掩撃するに充分の機會を得べくもあらず、又第三には果して首尾よく宴席にて奸黨等を撃取とするも、本城には強なる斯波多の成兵四千餘人あり、若しも宴席の變事を聞知し、手早く逮捕の手配を爲さんには、有志者等は恰も函中の鼠の如く、回復の大計も空しく此に敗るべし、彼れを思ひ此を想へば、猶更ら危険彌増して、其夜は遂に熟眠せず、夜明けて後も他事を打忘れ、只管此事のみ案じ續け深く前後を顧みるに付ても、愈々危険は多くして勝算は覺束なし、然れば暫時如何にもして此企を猶豫せしめ、有志者の生命を全くせばや

と、然れども是時は此日の午過ぎ頃にして、此日(即ち十日の)夕暮は有志者が國都に忍び入り、第一の危険を冒すの時刻なれば、速に之を廓門の外に遮り止めて暫時他所に潜伏せしむるに如かず、然れども今若し此事を比留利に謀り居らば、大切の時間を失ふべし、寧ろ獨斷を以て人を廓門の外に遣はし、有志者を遮り留めし上にて、比氏に此事を告ぐるに如かずと決心せり、



匹方善は、乃ち年來召仕ふたる腹心の家僕加里頓と云へる者を呼び寄せて、此事の大畧を物語り、有志者が本國に在て我家に往來せし時より、汝は諸氏を兼て見知り居ることなれば、廓門より成るべく遠き地に諸氏を待ち受けて此の書翰を渡すべし、時後れなば大事を破らん、急げ急げと命じければ、加里頓は直に身を起し、大事の使と氣を焦急ちて、此家より程遠からぬ市街の偏隅に在る我家を指して走せ行きけり、此の加里頓と云へる者は元と匹方善の家僕にして、今も猶ほ主人の家に出入し、我家に主人の馬をも預り居れば、今主人の命に因り、此馬に打乗りて有志者を待ち受けんと己が住居に歸へるなり、(匹方善が使を遣して有志者を止むる一節は俱氏の希臘史)

勦雲云。匹方善之沮危計。其意全在恇恐一邊。非威氏同日之論。所謂可斷而不斷之類也。

柳北云。冒危中之危。行險中之險。使人冷汗淋漓。

鳴鶴云。巴氏臨發。戒殺戮一段。對照前回却威氏之諫一段。巴氏始得爲完人。作者用意

匠綴。

又云。同謀者反洩計敵人。是陳套。同謀者中而悻怖自沮計。是新案。

又云。巴氏別令南一段。定是少情緒纏綿。而叙事反過簡。讀者蓋言外領之。

學海云。諸名士初不將密謀爲危險來。意是容易做出的。及臨發忽認得是最大危險事。

水滸傳武松打虎一節。大蟲從半空裏攢將下來。被那一驚。酒都做冷汗出了。是寫極

駭人之事。却盡用極近人之筆者。凡手寫豪傑。只極力寫不近人情的大膽。反不得其

情實。若夫才子寫豪傑。從近人情處寫來。自知危險。自犯危險。是忍耐熬過去氣象。乃

豪傑真面目。不是鹵莽鶻突做去的。

## 第十七回

人民の爲に天意小价を遅延す  
奸人急使を馳せて密謀を報す

斯て加里頓は其家に馳せ歸り、早くも馬を引出して之れに轡を含ましめんと、頻りに探し求むれども、常の藏處に見えざれば、其妻を呼んで、夫婦諸とも限なく家内を搜索するも更に見出すやうもなし、大事の使に時刻を失はば、主人







余管甲安度  
土塵封未死  
魂身仇國賊  
更多冤他年  
風雨故山晚  
笑送田夫入  
里門矧生而  
躬入里門者

に時刻を後る、一節は俱氏の希臘史)  
雅典に在る十二名の有志者は、六日の早曉を以て同地を出立し、成るべく間道  
村路を経て齊武の國境に忍び入りしが、我が郷里とは云ひながら、時の不運は  
是非もなく、樹にも草にも心置れて、恰も其足を敵地に入る、が如く、注意に  
注意を加へしかば、幸ひにして邏卒にも怪しまれず、七日、八日、九日の三日  
を経て、無難に三十六里の路程を進行し、遂に十日の薄暮國都の廓門に近づき  
ける、有志者は騷亂の年以來、夢寐にも忘る、能はざりし我が本國の都をば、  
今斯く面前に見るに至りし其喜びは如何ならん、  
扱此日も夕暮になりければ、廓外の田野に耕す都民及び廓外に雉兔を獵す  
る獵夫等は、其家に歸らんとて、廓門に入る者多く、又廓外の村民の菜葉を  
城内に販ぐ者は我家に歸らんとて廓門を出る者多く、往來出入織るが如くにし  
て、人の面も見分け難き黄昏を幸ひ、有志者等は城内に紛れ入らんと兼て計り  
し事なるが、此日は幸ひ雨降て、人々雨具を被りたれば、人目を忍ぶ身の上に

勢空復涌起  
個驚浪恐絕

は、猶ほ更ら便宜を得たりけり(此の日雨ふることは俱氏の希臘史)此夕べ先  
づ廓門に入りしは、巴比陀、瑪留等にて、此の一組は無難に廓門を通過せり、  
又其次に到着したるは勢應本等の一組にて、之も無難に通過せり、區利染等兩  
人の一組は此日最も後れて到着しけるが、廓門に入らんと進み行く時しも、廓  
門より出で行かんとする兩三名の村民あり、各々城内に蔬菜を販ぎて其歸るさ  
些かの貨物を購求したりと見え、之を擔ふて出で来りしが、區利染等兩人は、  
此村民等と行違ふとき、如何にやしけん、過ちて村民の擔ひし貨物に觸れ、之  
を地に落してけり、然るに此村民等は、途中の寒氣を防がんが爲め、城下にて  
酔を買ひしと見え、太く酒氣を帯び居たるが、大に區氏等を罵りける、區氏等  
は痛く其過ちを謝せしかど、彼等はなかく承引せず、直ちに打てかゝりしか  
ば、兩人は程よく之を受けながし、隙もあらば逃げ走らんとする中に、廓門に  
屯集せる邏卒等は、早くも之を認めて、其の喧嘩を取押へんと、五六名馳せ來  
りしに、不幸なるかな其中の一人に區氏等の面を見知れる者あり、區氏等を見



るより大に驚き、兼て政府より厳しく逮捕を命せられたる罪人なれば、取敢へず多勢を以て取り圍み、遂に奮闘せし二人を捕縛して、其夜は彼等を其屯所に留置きけり、

雅典に在りし三百餘名の有志者は、十二人が出立せるより、第三日目則ち八日の日に於て始めて此企を聞知せしが、重立たる十餘名が今迄此策を己等に通知せざりしを憤るの情は舉兵の策を喜ぶの心に拭ひ消されて、皆一同公戦の策を決行するに議決し、此日より翌九日に至るまでは、唯一向に發足の用意をなし、十日の朝に至りなば、思ひ思ひに打ち立ち、境上の一組と申合して山中に集會し、十一日の夜を期して、愈々大事を擧ぐべしと喜び勇まぬ者もなく、愈々十日の朝となりければ、五人十人打ち連れ、皆國境に向ひて進發せり、偕此の出立せる有志者の中に、亞幹と云へる者あり、歳尚ほ弱冠にして慷慨の人なりしが、此の人は騷亂の年より本國を脱走し、諸有志者と共に雅典に落魄せるとき、貧苦に迫り、一年計り以前より、雅典の都の片邊なる牛乳を鬻ぐ或

る商家に雇はれて、此家に月日を過ぎしけるが、此家は固より富めりと云ふほどにはあらねど、亦た貧しと云ふにもあらず、主人夫婦の間に一人の女子ありて、其年尚ほ十七歳許なりしが、不圖其の傭人亞幹に懸想して、此頃は唯ならぬ中とぞなり居たりける、然るに此度愈々諸有志者が舉兵の策を決し、己れも共に出立する場合となりければ、亞幹は心に思ふやう「此度の事は其の成否測るべからず、若し不幸にして事敗るか、或は戦死することあらば、是ぞ此世の訣れならん、暫し旅寐の假枕に、結び初めたる仇縁も、流石に名残りの惜まれて、告げず去らんは本意なし」と出立の其前夜、彼女子に出會し、只些かの事に云ひ做し、遠別の旨を告げたるに、女子の常とて聞き入れず、深くも亞幹を恨みつゝ、強て此地を去るならば、己も共に從ひ行かんと、中々に承け引く氣色の見えざれば、亞幹も今更ら持て餘して、別れを告げしを悔ゆれども、他に爲ん術のあらざれば、遂に我身の素性を打ち明け、且つ此度の密謀まで幻けに物語り、若し幸にして事成る後は、本國齊武より人を遣はし、



迎へて正室となすべければ、其時を待ち居よ」と辭を盡くして慰めければ、之を聞くより、女子も稍く得心せしと見え、再び強て之を止めず、亞幹は其の翌十日の早曉、遂に此家を脱走して、諸有志者等と諸共に境上を指して出發せり。

女子は理に責められて亞幹に別れし後も、猶ほ其人の事のみ思ひつゞけ、夜明け日高き頃に至るまで、心地あし、とて寢所を出でねば、其母は之を訝り、日頃の容子に思ひ合せて、心當りの事もやありけん、其の娘の寢所に至りて、或は賺し或は怒り、様々に其所以を語り問ひしに、娘も今は包み得ず、有りし次第を物語れば、母は大に驚きしも、其相手たる亞幹が、素性賤からぬ有志者の一人なりと聞き、少しは心を安じけり、然るに有志者の爲に不幸とも云ふべきは、時々此家に牛乳を買はんが爲めに出入する商人あり、此者は當國の行政官にて齊武の奸黨と互に志を通ずる亞留智の家に召仕はれ、其股肱と頼まれたる執事の弟なりければ、兼てより齊武有志者の舉動に付き、探り出せる

事もあらば、直ちに通知すべしとの依頼をば、其兄より受け居たりしが、今朝しも牛乳を買はんとて此家に来りしに、圖らずも母と娘の物語りを洩れ聞き、慥なることは知る由なけれど、只此月十一日の夜に、有志者が忍び返りて、本國の奸黨を除かんと欲する事と、同時に擧兵の用意を爲す事の大體を聞き得しかば、這は大變事を聞き出したりと、直ちに亞留智の家に馳せ至りて、其兄なる執事を取次とし、早くも此事を注進に及びけり、亞留智は之を聞くより、此は一大事なり、一刻も打捨て置くべからずと、急に此事を通報するの一書を認め、之を齊武奸黨の一人なる其親族亞留智の許に遣さんとぞ計りける、こは之れ十日の朝のことにして、有志者等が事を擧ぐるは、翌十一日の夜の事なりと聞けば、此地より齊武の都までは、三十六里の里程にて、通常四日を費すことと故、十一日の夜の事變に先だち、之を奸黨に通知せん事甚だ易からず、然れども此日の午時より起算すれば、翌十一日の暮五時頃迄には、尙ほ一晝一夜と半日、合せて二十九時間あり、故に驛々にて使者の乗馬を繼ぎ替へしめば、十



一日の夜に入らざる前に、早く彼都に達せんこと疑ひなしと、乃ち直ちに馬術に達者なる者を選び、此書を持たせて出發せしめたるは、此日の午過ぐる頃なりけり（ナの一節は慈氏の希臘史）

勦雲云。加里頓、亞留智共要健馬者。一以失轡不能果。一雖能果不及。是天所以助仁人也。而急遽之際。非馬無可用者。故點出爲姿。用意始全。

柳北云。諸子身事之安危。在一轉瞬間。殆哉。

鳴鶴云。加里頓失時不及。一憂僅消。又有區氏等之就擒。有奸人之報變。恰是怪雨纒收。盲風復至者。使讀者心目常聳然在惶悸中。何等好脚色。

學海云。一箇障碍已去。一箇障碍又來。齊武國門爲衛兵所沮止。是諸人意中固在的。雅典國中飛信。從背後襲來。是諸人意外生出的。

說十二名不漏一箇入國門來。反疑湊合。又說幾人爲所抑止。事即發覺。不得做箇事業。恰好見捕即未發覺來。留待明日鞫問。乃爾妙絕。

## 第十八回 十二の婦人宴席に入る

扱又齊武の都に於ける同謀者の一人加倫は、其宅に有志者の忍び來るを待受けんとて其用意を爲し居たりけるに、十日の夕に至り、巴比陀等の一組は早くも其家に到着し、引續きて勢本應等の一組も亦此處に到着しければ、主人及諸有志者は久別の情を陳べて互に其無事なるを喜ぶ中にも、主人は此度の企の露顯せずして、有志者等が國都迄無難に忍び入りし幸運を祝し、兼て目立たぬ様に用意したる酒肴を取り出して物靜かに有志者を饗應しけり、有志者等は尙ほ主人と明日の手筈を事細かに打ち合せ、彼の奸黨等は常に多數の衛兵を従へて警備最も嚴重なりと聞くに夫等は如何に爲すべきやと問ひければ、主人は答へて曰へるやう（有志者が加倫の宅に潜伏する事は慈氏の希臘史）

其の事は比留利氏が兼ての注意にて、奸黨等が深く同氏を信ずるを幸ひ、其の邸宅なれば衆多の衛兵の不用なるを陳べて其過半を歸し去らしめ、又殘し



止むる少數の衛兵等をば、兼て修繕に托し堅牢なる鐵扉に改造せる別室に伴ひ、十分に酒を勧めて酩酊せしめ、大事を行ふに臨んで急に四方より鐵扉を鎖し、彼等を其中に閉込め置くの趣向なり  
と聞くより諸有志者は打喜び、尙又奸黨を宴席に襲ふべきの手續を尋ね問へば、主人は答へて曰へるやう、  
其事も兼て比留利氏の手配あり、此夜は數名の美人を進めて奸黨等の酒興を添ゆべき約束なれば、十餘名の有志者を美人或は侍女に仕立て、酒酣なる頃之を宴席に導き、彼等に近づくまで覆衣を被り、其傍に至るとき進て襲ふの手筈なり  
と聞て皆々喜ぶ中に、瑪留一人は暗に困却の色を見はしけり、蓋し同人は狀貌魁梧の偉丈夫なれば、如何に其身體を装ふとも逆も窳窳たる美人と見ゆること能はざるを恐れ、若し又侍女の装ひを爲さば衆美人の後へに隨ふが故に、眞先に進んで奸黨を襲ふの愉快を得ること能はざらん事を深くも懸念するなるべし、斯くて主人は猶ほ有志者と奸黨を襲ふて後、人民に回復を報告するの手配りまでも詳細に打合せて後、有志者等は長途の疲勞あるべしとて、主人は之を寢室に導きて臥さしめけり、  
諸有志者は數日の間非常の危険を冒し、辛ふじて國都に忍び歸り回復の大業を爲すも早や明晩となりければ、安心と疲勞との爲めに早くも眠りを催す者あり、或は明晩の事を案じ或は又今一組の人々が未だ到着せざるを憂ひ、既往を懐ひ將來を案じて眠に就くこと能はざる者もあり、抑々諸有志者は此度雅典を立せしより兼て其身を無き者と思ひ定め、成敗の運を天に任せんと同様に決心せる人々なれば今更ら少しも怯憶せず、故に憂ひも無き筈なれども、憂ひと云へる一事は人生の死期迄其身を去らぬものと見え、斯く決心の有志者にも尙ほ其心に憂ひあり、這は身上の安危に關するの憂ひにあらずして回復の大計、濟民の大業の空く敗れんことを恐るゝの憂ひなりける、  
諸有志者は斯る有様にて此夜を過すに、明日に大望ある身は最と、此の夜の

223



長きを覺へて偏に曉を待ち兼ねけるが、已にして早や東雲の空となり、紀元前第三百七十九年十二月十一日の朝とぞなりにける、有志者の心中には、此日の一時間は一年の長きが如く、頻りに日脚を眺むる中にも、瑪留は屢々歎息し何とて今日の日は斯くまでに暮れ難きや  
と一人囁き居たりければ、多莫俱は其傍より瑪留に向ひ  
斯く長き時間の間に君は爲し置くべき事こそあれ、早く此家の細君に請ふて然る可き大女の衣裳を借り置き玉へ、然らざれば比氏の宅にて用意せる尋常の女服は逆も君の肥大なる身體には合ひ難かるべし、然あらんには君一人は我々と與に宴席に入ること能はずして此度の働きに漏れざるを得ざるべし  
と云ひしかば、瑪留は如何にもと思へる容子にて大に困却の色を見はしければ、諸有志者は皆一同に覺えず笑を含みてけり、此中にも有志者をして憂慮せしめたるは、唯彼の區氏等一組の未だ此家に到着せざる一事にて、深く其安危に懸念し居たりける、斯くて此日午後二時頃と覺しき頃、此都の邏卒總長より主人

加倫に宛てたる一封の書翰到來して、至急其宅に出頭すべき旨を申し來りけり  
(呼出の一節は慈氏の希臘史)諸有志者は此事を聞くや否や立ち上り  
多莫俱

すは、事露顯に及びたり、奸黨等の爲に縲紲の辱を受けんより寧ろ只今潔く自殺せん

瑪留

然り々々

邊禮仁

捕卒の未だ來り圍まざるに先だち、是方より逆か寄せして二三奸黨の邸宅を襲撃し、重なる奴等を殺戮して潔く自刃せん

瑪留

然り々々大に然り

と議論紛々として決せざりしが、最も世故に熟練せる勢氏等は此等の人を押止



め

若し我々の密謀已に露顯せしならば、捕卒をして直ちに此家を圍ましむべきに、然は爲さずして主人に書を遣り之を呼出すを以て考ふれば、書翰の來りしこそ尙ほ此事の十分に露顯せざる證據なれ、然るに我々より荒らたてなば自ら大事を破るべし

と言へば、主人も此の意に同じ、乃ち奸黨等の嫌疑を蒙らざる爲めに死を決して主人は速に出頭すべしと決しけり、主人加倫は出で去るに臨で、其齡尙ほ十餘歳計なる愛子を有志者の前に伴ひ來り

諸君、假令ひ奸黨等が如何に暴威を以て迫るとも、我は決して屈撓せず、只一死を以て飽くまで此度の密謀を隠蔽し、君等をして回復の大業をなさしめ我が國人を救ふべし、我が決心を證せん爲に今此の愛子を留め置くなり（ラの一節は慈氏の希臘史）

巴氏

お、加君、君の決心は皆善く知れり、今更ら何とて疑ふべきや、早く此子を無難の地に落し遣り、我々が非命の最後を遂けたる後、更に回復の事業を爲さしめよ、若し此室に長居せしめば、後來に望みある容貌秀異の此子をして我々諸とも空く此所に死せしむべし

加氏

否な否な巴君、我が子に取ては諸君と與に善事の爲に死するほど名譽の死はあらぬぞかし (declaring, "that his son could never aspient a happier fortune. than

that of dying in a good cause with his father and friends. 慈氏の希臘史)

と述ぶるを聞きて、諸有志者は轉た哀れを催し、頻りに之を止むれども主人は更に肯せず、遂に其子を有志者等に授け、天を拜して加護を祈り、有志者と相抱きて訣別の意を表し、直に邏卒總長の許にぞ赴きける、

抑々有志者等は多年の辛苦を他郷に積み、今稍く此の處まで忍び歸り、本意を達する時刻には十時間をも隔てざるに、今に於て事露れ、奸黨等に捕へられな

至語亦苦語  
聲底自有熱

極力寫其險



ば、多年盡せし憂き艱難も空しく泡沫と消へ行くべし、若し然もあらば如何に口惜しきことなるべきかと、無念の中にも、主人の返答次第にては何時捕卒の來り圍むも知るべからず、然るときには潔く決闘自盡なすべしと、皆な其の兵器を身邊に引き付け、家の外面に注意して片時も油断せざりける、有志者等は斯る憂慮の有様にて三時間餘を経たる後、俄かに人の靴音して其の居室に近づきければ、すは、何者の來りしかと身構へなして待ち居たるに、其の人は別人ならず、此の家の主人加倫なりければ、先づは無事には歸りしかと、皆々ほつと吐息をつきつ、辭せはしく容子を問へば、主人は答へて曰へるやう  
彼の呼出状は別事にあらず、君等に後れし一組が遂に邏卒に捕はれたるなりと聞くより皆々面を見合せ、憂苦の色をぞ見はしける、主人は又詞を繼ぎ然れども彼等は未だ密謀を白狀せず、只其一人の懷中に我が姓名住所を記載したる紙片のありけるより、邏卒は我を疑ふて其者と何等かの縁故あるべしと、遂に邏卒長に訴へければ急に我を呼出せしなり、然れど我は幸にして彼

讀者劣斂了  
手裏汗

の一組の二人とは未だ深く相知らざれば、決して彼等に關係なき旨を強辯し、我が彼等を招きしにあらざることを證しければ、尙ほ明日彼等を糺問したる後、更に呼出すことあるべしとて一と先づ歸宅を許されたり、然れば如何なる事のあるにもせよ、今夜の間は無事なるべし（加倫の恙なく歸り來ること  
は慈氏の希臘史）  
と語るを打聞く有志者等は、少しく安堵の思ひをなせしも、彼の兩人の不幸をば大に悲み歎きけり、此等の混雜にて兎角する中、最も短き冬の日の何時しか薄暮に至りければ、主人及び有志者は十分に用意を調べ、相圖の時刻に至りなば比氏の宅に出で往かんと、唯時辰儀を見つめて居たりけり、  
又主謀者比氏の宅にては、此日の晝頃より響應の設けを爲し、家内の混雜一方ならず、其の夕暮に至ては、總ての用意全く調ひ、客室の宴席には最と華かなる花麩を敷き列ね、又此時代希臘諸國に流行せる仰臥椅子の美麗に彫刻裝飾せる者八九脚を上坐に据ゑ並べ、室内には有名なる畫圖若干幅を掛け連ね、又椅



子の前なる食卓は錦繡を以て之を覆ひ、卓上諸處に美麗の花枝を飾りつけ、數十の華燭を燈し連ねたれば、室内の裝飾光り輝き、四邊眩く見えにける、已にして日の暮るゝに間もなく、奸黨等は皆打連れて列をなし、其乗車を軋らせつ、前後左右に衆多の衛兵を隨へて靜々と邸内に入り來りければ、主人比留利は忙しく出迎へ、彼等を先導して設けの席に伴ひつゝ、其來臨を拜謝して、亞留知、比律布を頭とし、其他官位の順序に隨ひ、各々椅子にぞ即かしめける、又幾百名の衛兵等は、門内庭中及び宴席の廊下に列立して、長槍を携へ、弓矢を執り、用心最も嚴重なり、主人は夫より肴核を陳し美酒を勧め、頻りに諛辭を獻じて、奸黨等が勢力の強盛なると人民等が悦服の有様とを陳べければ、坐客は益々興に入り、頻りに杯酒を傾けて十分の酔を發しけり、其中には比律布は主人に對ひ、早く彼の美人を延き來らんことを促しける、然るに二更の頃に至り、俄かに上坐なる奸黨亞留知の宅より至急の使者到來し、雅典の親族亞留智より大事の急書を齎し來れ

ば、是非とも、亞留知に面謁を請ひ度き旨を申し入れたたり（ムの一節は俱氏の希臘史）  
亞留知は其の使者を宴席に延て對面せしに、使者は其書翰中に極めて大切の事を記しある旨の傳言を致し、之を其手に授けたり、亞留知は其書翰を受取りしが、醜酌の餘りにや、其使に向ひ  
大切の書狀は明日の事なり（「business to-morrow」）（亞留知の辭及ウの一節は俱氏の希臘史）  
と、書翰をば其儘己の懷中に收めて之を披き見ず、直ちに使者をば歸しけり、此書翰こそ是れ彼の雅典の行政官亞留知が、此の夜の密謀を洩れ聞きて、之を通知せんが爲めに、急使を飛ばして送り來りし者なれば、若し此席にて奸黨が此書翰を披見しなば、有志者の計策は忽ち此に露顯して、事皆書翰に屬すべかりしに、今奸黨が書翰を披見せずして、直ちに之を懷中せしこそ、是れ天の未だ齊武人民を遺てざるの致す所なるべけれ、坐客は皆醉を盡くし、酒酣に



從座客眼裏只  
看出尤妙蓋  
醉降迷離不

辨物色所謂  
蓮步風柳露  
芙蓉等形容  
亦其迎想的  
語其黨沉醜  
酣暢模樣繪  
得趣絕趣繪

及びければ、主人は坐客に向ひ

今夜は他の場處と違ひ不慮の憂もあらざれば、衛兵二十餘名を残し置き、其餘の多衆をば暫く散して歸らしめ、又後刻に來り迎へしめんは如何にや（主人の請求を爲せしことは俱氏の希臘史）

と陳べけるが、坐客は興に入りし時分なれば、少しも疑ふ心なく、又美人を延き見るに事の妨げと思ひけん、容易く其の意に任せければ、主人は即ち命を衛兵に傳へて、悉く之を遣り歸らしめ、残り留まる二十餘名を別室に誘ふて、頻りに酒肴を勧めけり、斯くて坐客は益々醉を生じ、夜も早や三更に至りければ、頻りに美人を促すにぞ、主人は直ちに其意を得て、伴ひ來らんと約しつゝ、此宴席を退きたりしが、霎時の後、主人は十餘名の婦人を伴ひ、之を導て宴席に入り來れり、座客は之を眺むるに、皆窈窕たる風姿にて、身には綾羅錦繡を装ひ、蓮歩を移す有様は、風に惱める柳の如く露を帯びたる芙蓉に似たり、主人は下坐より座客に向ひ

前なるは美人にして後なるは侍女にて候、未だ物馴れぬ處女等にて高貴の前に出るを愧づれば、御側近く進むまで覆衣を御免候へかし、いざ此方へと案内しつゝ、座客に近く進み寄り、奸黨等を距ること其間ひ二間ばかりと見ゆる頃、先きに進みし一人が、ヤツ、と掛けたる聲諸とも、一度に覆衣を削除すれば、十二の美人にあらずして十二の英雄突進せり、

斯くと見るより奸黨等は、絶驚狼狽しながらも、兼て坐邊に備へ置きたる短劍を抜き合せ、早や組付かんと飛び入たる有志者に渡り合ひ、刺し傷けんと揉み合ふたり、十二名の有志者は、國の爲め、又世の爲めに、積もり積もりし多年の鬱憤幾干ぞその艱難も皆是れ奸黨の爲す業にて、今其仇に面り近く出逢ひしことなれば、春待ち得たる優雲華の花咲き出る心地して、勇氣日頃に百倍すれば、何かは以て堪るべき、巴比陀、勢應本の兩人は難なく方柳知、久理知を組伏せて、直ちに繩をかけたけり、又奸黨の上座なる亞留知は、其性頗る勇悍にて、短劍を閃めかし、抵抗猛烈なりけれども、大力無雙の瑪留は、遂に此



者を組伏せたり、此時加倫、多莫俱も亦た比律布、可武利知を縛し、邊禮仁、圭皮度等は次久禮、刺杜善を捕縛し、全く此に一坐の奸黨を捕獲して、國民の爲に多年の本意を達しける、奸黨等は多く醉中の事として、難なく捕獲されし中に、巡邏事務長官の任を帯びたる可武利知のみは最も能く戦ひければ、是れが爲め有志者中にて、一二の微傷を蒙りし者もありたりき（牛の一節は俱氏の希臘史）

多年の積憤を散ずる掩襲格闘の間にも、斯く迄志士が私憤を抑へ、殺戮を慎み、一人の性命をも絶たずして之を縛し得たるは、古今稀有の舉動なりとて、感ぜぬ者こそ無かりける（宴席掩襲の事は諸家の希臘史俱氏に據れば是時奸黨四名を殺す）

有志者は、斯く難なく一坐の奸黨を捕獲したるも、彼の奸黨の巨魁なる令温知及び皮貞の兩人は、此夜の會に赴かずして、尙ほ捕獲を免れ居るに、之を其儘に活かし置くときは、如何なる防禦を爲さんも知れずと、兼て期したる手筈に

隨ひ、其の近街に屯集せる一群數十名の有志者に、此時始めて委細を通知し、有志者の總勢を二手に分ち、其一組をば、巴比陀及び圭皮度等之を率ゐる、奸黨の巨魁なる令温知の宅を指して一散に押寄せ、又一組は加倫及び瑪留、邊禮仁等之を率ゐる、奸黨の一人なる皮貞の宅にぞ押寄せける、又是より先き有志者等は、窓外より二十餘名の衛兵等に事の始末を説き聞かせ、若し抵抗せば饜殺せんと切して、尙ほ暫時其室中に閉鎖し、比留利の家人等に命じて厳しく守らしむ、蓋し衛兵従者等をして此場を散走せしむる時は、變報早く四方に聞えて、中頃に大計を敗らんことを恐るればなり、巴氏等の一組三十餘名の人々は、巨魁令温知の宅に押寄せ、比氏一人先づ進んで外より守門の者を呼び、其宅に來會せる亞留知等の命を奉じ、主人令温知に面會せんが爲め來りし旨を告げて其門を開かしめ、一度に咄と邸内に亂入せしに、居合せたる衛兵等は、不意を打たれて狼狽しながら、暫しが間は支へたり、時に有志者の一人圭皮度は、兼て此家に入出入して家内の模様を知れるものから、



先づ彼の巨魁を生捕らんと、只一散に奥まりたる居間を目掛けて突進せり、此時令温知は其居室に在りたりしが、俄に邸内物騒がしく、其有様尋常ならねば、何事ならんと訝りつゝ、傍へに有り合ふ剣をおつ取り、居間の扉を押し開きて立出でんと爲したる折しも、有志者圭皮度の進み来るを見るより、すは、狼籍者ごさんなれと、持たる剣を抜き離して、日頃の武勇を顯しつゝ、二回三回度り合ひしが、如何にやしけん、圭皮度は右なる肩に深手を負ひ、二足三足だちろぐ所を、早くも令温知は付入て、只一刀に打果たさんと、右手なる剣を振り揚けたり、此の時遅く彼の時早く、巴比陀も兼てより此家の案内を知り居たれば、圭皮度に引續き、居間を目掛けて駆入りしに、今其の危急を見るよりも、二歩を一步に飛び入て、手裏の寶刀閃電の如く、あはや、打たんと切り下る刀を丁と受留て、兩人互に奮闘せり、此處は扉外の狭廊にて、一人の外に戦ふ能はず、續き進める有志者等は、是の有様を打見つゝ、巴氏を伐たせては叶はじと、氣を焦燥てども助くる術なく、唯後ろより聲を放ちて、巴氏の勇氣を勵ますのみ、



(圖九第) ス進突ニ席宴雄英ノ二十



今ぞ正邪兩黨の巨魁が、こゝに死生の決闘なり、相戦ふこと十合餘り、巴氏の  
武術の勝りしにや、將た上天の祐けにや、一聲叫んで斫り入りし、巴氏の劍に  
レオンチアデス、其腦上を斬破られ、尻居に撞と倒れたり、後へに在りし有志者等は、  
令温知は、其腦上を斬破られ、尻居に撞と倒れたり、後へに在りし有志者等は、  
一度に咄と聲を揚げて、其悦を表しける、(圭皮度重傷を負ひ巴氏小郎に巨  
魁を斬る事は慈氏の希臘史)斯く巨魁を討ち取りし上は、互に無用の狼藉を戒  
しめ、惶て迷へる婦女子には、他意なき旨を告げ曉し、遂に打連れて、仕合せ  
よしと祝しつゝ、此の邸内を引き揚げたり、是より他の一組に出會せんと、  
兼て謀し合せたる街頭に駈け行き見れば、彼の一組は、既に先より此處に待ち  
居たり、抑々此の一組は先きに奸黨皮貞の家を押寄せて不意に亂入したりしに、  
皮貞は固より怯懦の小人なれば、此の物音を聞くよりも、其の容子を糺すに及  
ばず、惶て、窓より忍び出で、屋根を傳ふて逃んとせしが、早くも瑪留等に認  
められ、終に引き落されて捕縛せられければ、瑪留等は之を引立て、先程より  
此處にて待ち居たりしなり(皮貞の屋上に忍びて縛されしことは俱氏の希臘史)



讀者從頭十  
數回之積憾  
觀至幾平  
然冰釋乃作  
志得氣滿故  
者狡險語不  
得道險語不  
得道險語不  
得道險語不

是に於て、又三十餘名をして急に獄舎を襲ひ、冤罪の爲め奸黨に捕へられたる者二百餘名を救ひ出し、小武庫を襲て兵器を奪ひ、直に中央の大會堂に馳せ至らしむ（俱氏の希臘史）今は早や重もなる奸黨等を残りなく捕獲したりければ、諸有志者は少しく其意を安じたるも、回復の大業は猶ほ未だ成就したりと云ふべからず、如何となれば、カドミーの本城には尚ほ強勇なる四千有餘の成兵あり、若しも其の成將等が早く有志者等の舉動を聞き知り、逮捕の手筈をなさんには、特り回復の大計を成就し得ざるのみならず、諸有志者の性命も、容易に彼等の手中に落つべし、故に當時有志者の計たる、唯迅速果斷の舉動を要す、鋤雲云。幾多辛苦。至此始酬。其喜可知而未至喜者。以後圖猶重也。於此不加戒。大事忽去矣。

柳北云。積年苦辛。幾處艱險。恍然一夢。俄見此快絕。活劇使人喜極而泣。

鳴鶴云。宴席掩襲一段。是本書之荆門。前段幾回群山萬壑悉赴此。然若論結撰之巧。志士潛匿加倫宅。期死形容最見其妙。自第十五回至這回。障得百出。使人惴々不能須

與安其意。是作者得意處。至大事粗定。志士襲令溫知宅。巴令二人死。關於小廊一段。尙使讀者不能絕危悸。擒縱自在。

學海云。奸黨應招期已定矣。又有一箇障得來。忽排除去。奸黨入座。酒酣燕閑矣。又有一箇障得來。這般障得。真箇排除不得。使讀者胸悸膽落。那圖將輕々一句排除去。一驚一喜。何等筆力。

說奸黨一齊應招一齊就縛。是不異印版文字。乃說兩箇不來。其一忽爲正黨首領所斬戮。其一欲逃見縛。變化錯綜。有天然妙處。

## 第十九回

賢將古廟に義兵を部署す  
人民會堂に回復を布告す

有志者は兼て謀りし手筈の如く、五人六人を一組として部内各區の會堂に馳せ行き、又巴比陀を始め比留利、加倫等の如き重立たる者十餘名は、直ちに市街中央の大會堂を指して馳せ行きたり、此時齊武の都市には十箇の區劃ありて各區には皆區内人民の小會堂あり、又中央には各區人民の名代人を會合すべき大



會堂あり、是等の各會堂には皆警鐘を設け置き萬一不慮の大事變發生する時は、行政官の命を以て各區の警鐘を連打するの先例なり、然るときには各區の先輩長老は直ちに其區内の會堂に馳せ集まり、壯年の者も亦兵器を携へて其區の會堂に馳せ集まり、かくて各區内の重立たる長老若干名は僱竟なる壯者若干名を隨へ、中央なる大會堂に集合して事變に應ずるの憲法なれば、各處の會堂には常に番人ありて警鐘を守護し、人をして容易に之に近づかしめず、今幾組の有志者等が各區の會堂に馳せ行きしは、則ち人民を招集せんが爲に、彼の警鐘を打鳴らさんと欲してなり、番人等は有志者より今宵の始末を聞きて喜び勇まぬ者はなく、自ら樓上に驅り上りて頻に變報の警鐘を連打しける、頃は此夜も己に夜半を過るの時なりき（有志者人民を集むることは俱氏慈氏の希臘史）

智ある人なりければ、忽ち奇異なる一策を案出しけり、是の時は方にこれ「ヘラクリヤ」の大祭に近かりしが是の祭日には、喇叭を吹く者其巧拙を競ふて褒賞を得るの古例なるが故に、此頃數百の喇叭樂師已に齊武の都に來りて客舎に集まり居るを思ひ出し、巨額の金錢を與へて俄に彼等を雇ひ來り、數百の喇叭師をして各街に散走し、頻に喇叭を吹き立てしめければ、果して大に人民を驚起せしめたり（俱氏の希臘史）

全都の人民は、深夜警鐘と喇叭の聲とに打驚かされ、何事ならんと起き出で、東西南北に馳せ違ふ、其混雜は名狀すべからず、其中にも、長老壯者は銘々急はしく其區内の會場に馳せ集まりければ、之を見るより有志者は、詞短く奸黨を除きし大略を説示すに、人々聞きて喜び泣かぬはなかりき、蓋し齊武の人民は、久しく自由政治の下に樂みしに、幾百年來傳へ來りし政體を、一朝にして奸黨の爲めに滅絶せられ、其怨み骨髓に徹すれども、未だ回復の機會なく、無念の月日を過ごせし折柄、今有志者等が斯く僅々の人數を以て、強勢な



る奸黨を容易に除き得たることなれば、人民の之を狂喜するも道理にて、此報知を得るや否や、一齊に三回の歡聲を放つて其祝意をぞ表しける、斯くて又巴氏等十餘名は中央の大會堂にて、各區より馳せ集まる長老壯士に、粗々今夜の顛末を語り示して、喜び勇む人民等と善後の計策を廻らしけり、有志者人民を會することは慈氏の希臘史實に此夜の警鐘は、只是れ不意の事なれば、全都の騷擾沸くが如く、老幼婦女は周章狼狽し、浮説訛傳は四方に起り、人心恟々として何事の發生するやと恐れ惑ひしも、各區の會堂より、今夜の事實次第に諸街に傳はりければ、皆々歡び勇みけり、此時又中央の大會堂には、各區の先輩長老等洩れなく馳せ集まり、又驅け付けたる壯者の數も八百餘名に及びければ、巴氏は先輩長老と謀て之を三隊に部署し、直ちに本城戍兵の攻撃に備へけり、又會堂群集の中に於て、巴氏は此夜の顛末を報告するが爲に儀式の演説をなし、且つ有志者等が國法を犯して、擅に諸人を捕獲せる罪を述べ、回復の大事定まる上は、人民の命に従て就刑すべき覺悟なることを説き出せしに、堂内に充

滿せる先輩長老と堂外に佇立したる人民とは、一堂に歡聲を放ちて、其の功勞を賞賛し、雜沓喧擾せる有様は殊に勇々敷ぞ見えにける、斯る折しも、兼て法斯須の地に在りと聞えし威波能は、兵器を帶せる二十餘名の壯士を隨へ、此の會堂に馳せ來りければ、之を見たる人民は皆手を以て額に加へ、威氏來れりと喜びつゝも亦其の來着の意外なるを怪みけるが、巴氏は絶て久しく相逢はざりし我親友に、圖らずも回復成就の今夜を以て、再び相會するを得たる喜びは、何に譬へん様もなく、兩人相抱きて祝しけり（威氏が壯士を牽て眞先に來會し、有志者を助くる事は慈氏の希臘史による）抑々威氏が今此處に馳せ來りし顛末を尋ぬるに、先きに巴氏の送りたる再度の返書を見て、雅典に在る有志者等が、己の忠告に隨はずして其の意を執行すること、及び其の期日をさへ知りたるが、其計策を危ぶみつゝも之を傍觀するに忍びず、豫め手段を盡し置かば、彼等が事の破れん時之を濟ふの手立もあらんと、深く當日の事を憂ひ、彼の北境なる山脈の都近き士是命の深山に連なるを



幸ひ、二十餘名の壯士と共に山又山を忍び來り、士是命山の麓なる民家に匿れ  
て此夜を待ち、山村の農民に金を與へて、城中の容子を探らせ、奸黨等の宅に  
て變事あらば直ちに報知せよと命じ、其消息を待つ中に早くも此夜の大略を報  
じ來りければ、直ちに二十餘名の壯士を引連れ、狼狽する廓門の守兵を追ふて、  
此處には馳せ來れるなり、今此の危急の時に當り、勇武にして兵事に長じたる  
威氏の出現を見たる人民等は、皆百萬の兵を得たるが如き思をなせしなるべ  
し、去程に中央會堂を指して馳せ集まる壯士等、續々として引きも切らず、其  
の人数早や一千五百餘人に上りければ、先輩長老等は假りに威氏をして之を統  
轄せしむ、威氏は乃ち戊兵攻撃の衝に當れる「アンヒヨン」の神廟に兵を移し  
て、専ら戊兵の攻撃に備へけり、是に於て先輩長老等は、初めて此に公會の式  
をぞ開きける、是ぞ之れ去る騷亂の年以來四ヶ年を経て、初めて開きし人民の  
公會なりける（ヤの一節は俱氏の希臘史）扱中央公會に於ては、先輩長老其他  
會民一齊の同意を以て、全國内に通知すべき回復の文案を議決しけるが、其の

重もなる箇條は第一に齊武の都民は十二月第十一日を以て舊來の民政を回復し  
たる事、第二に奸黨の制定せし法令は一切之を無効の物と見做す事、第三に向  
後國政の基礎を定むるまでは國都の中央公會は解散せずして假りに自ら施政の  
任を帶ぶる事、第四に右時間の間は理事委員二十餘名を置きて回復の事を專任  
す其人名は下の如き事、巴比陀、比留利、加倫、勢應本及び某某等（先輩長老  
及び有志者を混合して都合其數廿餘名なり）又第五に回復に關する兵務は軍務  
委員二名を置き一切之に專任す其人名下の如き事、（威波能、邊禮仁）等の數條  
なり右の文案を議決し了るや、會堂内外の人民は皆一齊に歡聲を放ちて回復  
を祝賀しけり、然して此通知書は、直ちに幾百通を寫して之を街頭の處々に掲  
示し、又國內の諸處に至急傳達せしめけり、頃は十二日の曉、近き時なりし、  
扱又本城の中に屯在せる斯波多の戊兵は、夜半過る頃迄更に何事をも知らざり  
しが、深夜俄に警鐘の響くを聞き、何事の起りしならんかと、遽て、細作を派  
見したる處に、早や奸黨の餘類共本城に逃げ來て、頻に戊兵の助けを求めけり、



奸黨の黨類中には、初め議政堂に集りし者もありけるが、其の首領を失ひしことなれば、恰も頭なき蛇の如く、何事をも爲し得ず、遂に其罪を謝して人民に降るもあり、或は逃れ匿るゝもあり、或は他國に走るもありけり、城中の成將曼度及び具登は、逃れ來りし者共の辭にて、漸く今夜の様子を知りしも、狼籍者の人数も分らず人民の意向も知れざれば、敵の多少を見定め難きに、輕々しく兵を出して此本城を奪はれもせば、悔ゆとも及ぶ可らず、因ては先づ委しき様子を聞き定め、然る上にて兵を出すこそ萬全の策なれと、評議まぢくなる中に、物見の者歸り報ずるを聞けば、早や各區及び中央の會堂とも、無數の壯者兵器を帯びて之を警固し、用心甚だ嚴重なる由にて、此の夜回復の大計已に全く成就せんとするの有様なれば、早く大兵を以て騷亂を鎮め得ず、斯る大事に至らしめしを悔ひつゝも、今若し此儘にて過行きなば益々人民の勢力を増すことゝなるべし、然らば一刻も早く之を攻撃するに若かじと、乃ち具登に一千餘人を殘して城内を留守せしめ、曼度は自ら三千の精兵を率て、中央の大

會堂を攻撃せんと城門よりぞ繰出しける、頃は夜も早や曉近く、東天白らむ頃なりけり、中央公會堂に馳せ集まれる壯士の數は、追々に増加して、今は早や四千餘人に上りければ威氏は之を二隊に分ち、千人をして會堂を守衛せしめ、三千餘人を以て成兵の攻撃に備へ、又之を四手に分ち、邊禮仁、多莫俱、吳兒陀をして各々七百餘人を率る、本城より中央の會堂に達すべき三條の街道に分屯せしめ、自ら一千人を帯びて遊軍となり、胸中に城兵を敗るの方策を定め、斥候をして絶えず城兵の舉動を探偵せしめけり、然るに曉天に至り、城中より討て出づべき有様あるを報じ來りければ、齊武の壯士は腕を撫してぞ待居たる、是時城將曼度は三千人を一團として城門の外に繰出し、此處の廣遠に於て之を三隊に分ち、三條の街道を並び進で、中央の會堂を唯一撃に打破らんと、靜々とし

て押行きける、回復兵の總督威氏は、之を聞くより、急に命を遷禮仁、多莫俱、吳兒陀の三將



に下して、各々城門より七八丁許隔りたる處に進ましめ「假令如何なる苦戦を爲すとも各々死を以て其場所に一時間敵兵を支へ留むべし」と令したり、暫くして、城兵は回復兵の屯在するを見るより、三道共に鯨波を作り、喊き叫で殺到しければ、齊武の人民も、他年の怨を報ゆるは此時なりと、面も振らず戦ふたり、一方は名にし負ふ斯波多の精銳にて、列國第一と稱せられたる武勇の兵なり、又一方は民政回復の大功を立てんと、勇み進める壯士等なれば、互に奮戦亂闘して、三道の戦ひ共に何時果つべしとも見へざりける、此時總督威氏は、其の手兵一千人を引率して、疾風の如く殺奔し、近街に戦ふ邊禮仁を援け、れば、衆寡の勢敵し難く、斯兵は本城を指して右往左往に敗走せり、威氏は邊禮仁をして、其隊兵を率て城兵の來援を支へしめ、己は直ちに手兵を抜きて、再び第二道に馳せ向ひ、吳兒陀の一隊を助け、れば、斯兵は衆寡敵し難く、亦此口も敗走せり、威氏は再び手兵を抜きて第三道に廻り、斯兵の背後に出でけるが、此の時多莫俱は驍勇なる成將曼度の爲めに攻撃せられて、其兵

將に潰走せんとするの時なりし、驍將曼度も其の腹背に敵を受けては、前後に當ることも叶はず、遂に威氏の爲めに散々に断け立られける、然れども流石兵事に習熟せし驍將なれば、其殘兵を一團とし、追來る敵を防ぎつ、城門指して引きにけり、此時は旭日既に光を放ち、夜も全く明け離れたる頃なりき、此の一戦に勝利を得し齊武の壯士は、益々奮起し、兼て強勇の聲名ある斯波多の兵も恐るゝに足らずと、勇氣日頃に十倍せり、斯くて城兵も此後は打て出るの勢なきに、城外の人民は益々兵數を増して城門前なる街道に備へを立て、遂に本城を十重二十重に取り巻きたり、此中に巴氏等は、先輩長老と共に尙會堂に相會して向後の政略を談じ、諸般政務の整頓を謀りけるが、此日の薄暮に至り、雅典に接する境上より急報有て、三百餘名の有志者、昨夜果して義兵を擧げ、既に國內に亂入し、早や國都に向て進み來るの旨を通知しけり、斯て翌十三日に至りければ、百事漸く其緒に就き、理事委員等は假りに百般の政務を措辨し、人心稍く安定したりしが、早や此日



に於ては民政の回復を祝賀すると見え、市中の子女は相伴ふて祝歌を謳ひ、街上を徘徊する者も多かりけり、此の一兩日を過る中、雅典の有志者阿慈頓等より使を遣し「當國の有志者が擧兵の義舉を聞きしより、其後援を爲さんとて、雅典にて義勇兵を募りしに、人心大に奮激して馳せ集まる者頗る多く、二千餘人に及びしかば、早や國境に打向ひしが、途中にて齊武國都回復の吉報を得たりしかば、今境上に屯在せり、若し本城なる戍兵の勢ひ強大にして制し難き有様ならば、齊武人民の應援として直ちに國都に進むべし」との事なりければ、先輩長老皆共に雅典人民の義心を感じて大に之を喜びけるが、最早や城兵を降すには、雅典有志者の援兵を要するにも及ばざればとて、厚く其惠を謝し、尙ほ齊武の政府より、後日更に謝する所あるべしとて其の使者をば送り返しけり、扱て城中の戍兵等は、本國斯波多の大兵が後詰として此地に來り援くるまで、本城を死守せんと欲すれども、此の風説の本國に聞えて援兵の來るまでには、今より四十餘日を要するに、現に城中に蓄ふる所の糧食とては、僅か數日を

支ふるにも足らざれば、逆も籠城覺束なし、然ればとて又圍を潰ひて走らんと欲すれば、城は幾重にも圍まれたり、加ふるに齊武の壯士が驍勇なるは、前日の戰にて其手並に懲りたれば、今は唯戰死を待つの外、其の名譽を保つの手段もなし、  
齊武の壯士は勢に乗じて頻りに本城を攻め破らんと勇みしかど、總督威氏は之を肯ぜずして「此度の主意は唯舊政體を回復するに在り、然るに殺を嗜みて無用の戰をなし壯士を殺すは本意にあらず」と、乃ち裨將邊禮仁をして城中に使せしめ「若し速に本城を明渡すに於ては、戍兵をして戰陣の名譽を保ち齊武を退去せしむべし」と懇に其の利害を説諭せしめけるが、二人の戍將中曼度は此處を死守すべしと主張せしも、具登は徒らに兵士を殺すの無益なるを説き、遂に齊武の人民と退城の契約を取り結びける、是に於て雙方より委員を撰定し、左の條約書に調印して雙方互に之を取替はしたり、  
齊武の軍務委員威波能、邊禮仁と斯波多の戍將曼度、具登と斯波多兵の退



城に付左の條々を契約せり

第一 斯波多兵は其兵器を帶び輜重を保護し戰陣の名譽を保ちて此城を退去すべし

第二 斯波多兵齊武の國境を出るまでは齊武の人民は相當の價を以て糧食を賣渡すことを拒まざるべし

第三 齊武人民の城中に逃れ入りて戍兵の助けを求めたる者共は斯波多兵之を伴ひ去るを得べし

第四 斯波多兵は此條約決定の後一晝夜間に當城を退去すべし

齊武軍務委員

威波能

邊禮仁

在齊武、斯波多兵將

曼度

月 日

具、リ、ト、登

巴爾內、威逐外、是使巴、落平之功、處分

右の契約書を取替はせし後、斯波多の戍兵は即日直に本城を退去し、國境を指して出立せしかば、齊武の全部は全く靜謐に歸したりけり、

勦雲云。陳平周勃能安漢家。威波能、邊禮仁二人之功大似之。

柳北云。匆忙之際。措轉得宜。威氏真人傑哉。

鳴鶴云。這回專爲威氏立功用力。縱戍兵歸國一段。最見威氏之德量。筆力悠揚。

又云。威氏街戰之兵略。作者蓋自奈勃翁一世之戰法得來。

學海云。威波能是後來成絕大功業人物。若不出於齊武恢復時。乃爾冷落。是有尾無首的。然彼既以行奇謀爲不可。殊難着手。乃乘間自來。於會堂出現。先博全國喝采。然後將兵行策。都從他胸中搬出來。極爲順便。

第二十回

功を賞し勞に報て國內清平に歸す 霸國大に同盟軍を擧て齊武を侵す



說來政治家  
之本志確  
光明借他  
人杯酒自  
己磊塊者歟

奸黨は己に洩れなく斬獲せられ、斯波多の戍兵は己に悉く本城を退去し、獄中に繋がれたる諸有志者は悉皆己に助け出され、且つ回復の事務を取扱ひ國政を整理するの任を帯びたる理事委員等は、晝夜其の心力を盡しければ、此月二十一日頃に至ては國內の狀勢全く安穩の舊態に復しけり、又國內各地方の人民は、此度回復の飛報を得しより、皆雀躍して處々に公會を開き、直ちに民政回復の事を可決し、且つ國都の人民に同意を表し、諸有志者に回復の勤勞を謝するが爲めの惣代として、各都邑の人民より兩三名づゝの委員を派遣しければ、此頃は各邑市の委員續々として國都に來集しけり、  
是より先き、理事委員等は、奸黨等の爲めに久しく廢止せられたる四百名公會を再興すること、及び行政議官を改撰することの兩件を國內に通知し、此等の議員役員撰擧の手續を至急に執行せしめたり、斯て此月即ち十二月の末に至りければ、日を刻して其の當撰者の報告をなしけるが、其報告書に據れば、巴比陀、波威能及び加倫、勢應本の四人は、總統官當撰者の中にて、投票最も多數

首回威波能  
之言以寫出  
政治家之令  
德豫見後來  
誅奸之功萬  
不巳之尾回  
巴比陀之言  
以寫出政治  
家之本志亦  
見前萬不巳  
之功巴威不  
已夫造於萬  
不巳則固本  
成乎蓋首不  
已矣蓋首不  
兩雄映對處  
乃作者精神

なりき、然れども威氏は此度の回復に功勞の少きを陳べ、且つ此重任に堪へざれば更に有徳の人に譲らんとて、固く之を辭したりけり、巴氏も亦之を辭して曰く

政法を改良し政體を改革して以て己を救ひ人を救ひ自他の福利を増進し仰て天に愧ぢず俯して人に愧ぢず内に顧て其の良心に満足するを以て報酬と爲すは、是れ政治家の本意なり、余が今日に至るまで力を國事に盡して辛勞を辭せざる所以の者は、是唯自他の福利を増進せんが爲めなり、若し夫れ一身の功名利達を求むるは、是れ余の本意にあらず、又政治家の本意にあらざるなり、故に今余は此の重職を辭し、余の本意を明にして以て其の志唯だ一身の功名利達に在る者を戒め、兼て又政治の本意は専ら功名利達に在りと誹謗する卑劣の小人をして愧死せしめんと欲するなり  
と、固く之を辭退せしが、先輩長老及び人民皆之を強て聽かず、二人の中一人は是非とも其撰に應ずべしとて勸めしかども、巴比陀は威氏と與に遂に之を辭



注匯處讀者  
豈可免涉哉

退せり、是に於て衆議の上、巴氏威氏の次に投票の多數なりし加倫、勢應本の  
兩人を以て、行政部總統官の職位に即かしめけり（人民が巴氏及加倫を高官に  
撰びしことは俱氏の希臘史）

特筆得體遙  
願篇首喪亂  
時日作起結

此度の回復に盡力せる諸有志者は、皆多く四百名公會の議員にぞ撰舉せられけ  
る、此に於て、新年即ち紀元前三百七十八年第一月一日を以て、新行政官新議  
員が一同に誓盟を爲し新任に就く可きの日と定め、又此日に於て回復の大祝祭  
を施行することに議決せり、  
扱も新年第一日祝祭の當日となりければ、此の日全都の子女等は、皆打連れて  
祝歌を謳ひ、相伴ふて街上を徘徊しけり、又新撰の行政議官、四百名公會の議  
員、各市邑より派遣されたる委員、都市各區の先輩長老等は、此の日皆先づ中  
央の大會堂に集まり、此處より儀仗を整へ、列を爲し、兼て誓盟をなすの場處  
と定められたるカデミーの本城を指して、しづしづと進み行き、威波能は護衛  
兵二千餘人を従へて最後にぞ進みける、全都の人民は、此日の盛式を觀、回復

に盡力せる諸有志者の辛勞を謝せんとて、此行列の過ぐる街上には隙間もなく  
充滿し、恰も人もて兩側に長屏を築きたるが如し、又子女等は種々の花圈を造  
り、其の謝意を表するが爲めに、行列をなして通過する有志者に之を投げ與へ  
ければ、巴氏等の乗車は、擲ち贈れる花の爲めに埋もれる程となりけるが、巴  
氏を始め有志者等は、斯る歡喜の中にも、彼の不幸にして回復を見るに及ばず  
して死亡せし有志者、安度具、波莫忠の諸士が、此盛式に逢はざるを懷ひ、  
其心中には却て悲哀の情を生ぜしなるべし  
街上に充滿する人民は、歡聲を放ちて回復を祝し、知るも知らぬも互に相抱き  
て此日の喜びを祝しけり、斯て此行列の本城に進み入りし後、兩人の新總統官  
は、誓盟の席に充滿せる多數人民の面前に進み出で人民及び諸議員に向ひて  
國法を奉じ、民心に順ひ、謹んで職務を奉ずべし  
との誓詞を陳べければ、此時人民は一齊に聲を放ちて歡呼したり、夫より職位  
の順序を以て、新議員及び先輩長老等與に皆其の誓盟をなし、此に回復祝祭



の盛式を畢て、國事全く定まりたり、是より人民は有志者の功勞を賞し、謝恩の意を表するが爲めに、其功勞に隨て多少の年金を給與し、又回復の爲め國難に死せし有志者安度具、波莫忠等の遺族を手厚く賑恤し、且つ又宏大なる殉難の紀念碑を國都の中央なる大遠に築造し、其上には簡短にして意味深く、人をして悲ましむ可き左の一句を彫刻せり、

我輩は汝等を濟ふが爲めに死せり

猶又人民は前きに捕縛せられたる奸黨等を誅せんと欲したれども、諸名士は痛く之を制止して其生命を絶たず、唯彼等を屬地の海島に放たしめたり、斯く諸般の事已に全く終りければ、人心安着して、今は内政に一の不満を訴ふる者なく、一國の人心協同せる其有様は、恰も人體内部の疾病を療し得て已に全く強壯健全となり、今や身外の事に滿身の力を盡さんことを思ふものゝ如く、人民は只管列國に對して國勢を振擡するの機會を望むの有様となれり、

一縮内勢與  
下篇做引

却て説く、齊武の本城を明け渡して退去せる斯波多の成兵は、日ならずして其本國に到着しけるが、國王阿世刺を始め、國人に至るまで、皆其の本城を死守せざりしを憤り、成將曼度及び具登の兩人を死刑に處し、又遁れ歸りし兵卒をば市民の權利を剝奪し、且つ齊武が斯波多に對する今度の不遜の所置を憤り、大舉して之れを伐たんと欲するの議論盛に國中に起りける（ネの一節は須氏の希臘史）

抑々斯波多が今日獨り覇國の威を振ふは、彼の雅典を壓倒せしに因るものなるに、今將に興起せんとする齊武をして、深く雅典に結ばしめば、斯波多は決して長く盟主の地位を保つこと能はざるべし、齊武の未だ深く雅典に結ばざるに先ち、直に之を壓服して、雅典と相結ぶに至らしめざるは、是れ即ち斯波多の大利なり、されば斯波多は、齊武の人民が其成兵に無體を加へしを口實として、羽檄を其の同盟列國に傳へ、日を期して大軍を擧げ、勇武にして智略に富めるの聲名ある國王雷音武自ら之に將とし、以て齊武に向はんと欲す、又齊武

一縮外勢與  
下篇做引



是歲二月經  
國美談後三  
影題成越三  
月前篇亦卒  
業偶得自嘲  
一律  
森田思軒  
自嘲少小學  
迂儒不悟文  
章是緒餘天  
下功名委人  
取中形勢吞  
與吾疏胸氣  
東海一流吞  
眼蔑西京以

後書今日居  
龍無所用春  
初窓掃視點

は未だ斯波多の如く強大ならず、且つ同盟列國の援兵なしと雖も、其國內已に全く整頓して人心方に外事に向ひ、加ふるに爲政の才略ある巴比陀、用兵の武略ある威波能等の如き人材有て、壯武なる國人を左右すれば、斯、齊二國の勝敗優劣は未だ容易に之を定むべからず、遂に是れよりして又希臘全土の大騷亂をぞ惹き起しける（ケの一節は須氏の希臘史）

鋤雲云。日月再明。後又起一團愁雲。信乎。人生常在憂患之中。

又云。通篇文章。擒縱自在。頗得孔明征服南蠻王孟獲之法。所憾造語時有生硬欠圓熟者耳。

柳北云。讀此書者。宜注眼于作者精神潛匯之處。否則至竟與矮人觀場一般。

鳴鶴云。寫出諸名士善後之策。極精極密。然這回作者最用力處。唯在巴氏辭選讓職之語。僅々數行文字。深寓箴戒。世人須服膺。

又云。全篇結構之精密。筆力之縱橫。固不待論。若夫不枉正史。統貫以實蹟。呈這奇觀。實是傑作。是書不伍尋常小說者。則在此。是書妙味亦在此。然更知作者苦心即却大也。

又云。作者以智力。良心。情慾。三者組成是書。巴氏。則是智力。威氏。是良心。瑪留。是情慾。假

三人之舉動。寫出三者相賴相制之狀。瑪留常服從巴氏。是情慾爲智力所制者。第五

回。第十二回。瑪留與巴氏相離。則是情慾獨專其力者。故或困於政論。或被縲紲。又其

人時有奇言奇行。是情慾之發。而時隱見者也。又第十回。巴氏單身決死。是智力晦

惑者也。又第十五回。威氏送書諫巴氏。是良心制智力者也。其他三人之舉動。莫非表

三者。是通篇之大主眼。讀者玩索之。

學海云。恢復大事業至此收結。在諸名士。不免有一篇陽護遜陰誇張的大文字。而見今

總統官與議員及人民誓約言語。不過單々奉國法順民心數語。又諸名士殉節碑上。

只有我徒爲濟汝輩死一句。可見前數語。是治國第一緊要秘契。周誥湯誓。反覺多嘴。

後一句。是千頌萬贊過不得的。功德遺烈等碑文。不免饒舌。

編者曰。此書は前篇後篇の二冊にて完結する者にして、紀元前三百八十二年

奸黨が齊武の民政を顛覆せしより、諸名士が之を回復して國勢を振興し、遂に



臣を大に國都に會する迄、前後通じて十九年間の實事を補述する者なり、而して前篇は三百八十二年より三百七十九年民政の回復に至る迄四年間の事柄を記載し、後篇は齊武の諸名士が列國分争の間に立て合從連衡の策を行ひ、我は文勳を立て或は武功を奏する十五年間の事柄を記載す、故に此書の表題とせる經國の大業と其の美談とは多く後篇に在る者なり、今豫め後篇中の重なる事柄を左に掲げて以て讀者に示さん、

斯國大軍を擧げて齊武を討つ、斯王雷音武親ら將として齊都に迫る、齊人死を以て國都を守る、斯王阿世刺智謀を用て齊、雅の二國を離間す、巴氏路を失て重圍に陥る、巴氏三百の神武軍(サクレット、バンド)を率ゐて重圍を突き國都に返る、斯人齊武の田實を掠めて兵を旋す事、  
斯國二び大兵を募る、斯將スホドリ阿斯大軍に將として齊武を侵す、齊國の總統官勢氏奇策を用て斯、雅の二國を離間す、雅人斯國に絶つ、齊人銳を避けて國都を死守す、斯軍大に齊武の野を掠む、斯人兵を旋す事、

斯國三たび齊武を伐つ、斯國の勇王阿世刺親ら大軍を統べ、斯軍百計を盡して齊都を陥れんとす、斯人兵を分て齊武の諸屬邦を攻陥す、雅人兵を擧げて齊人を助く雅將カブリアス齊武の諸屬邦を援ふ、斯王阿世刺國都に歸る、其の將法美代て諸軍を督す、齊武の諸名士策を定めて斯軍を破る、斯將法美戰歿する事、

斯軍連年田實を掠め加ふるに年穀登らず齊國大に饑る事、齊武の諸名士策を設けて穀を幽美に求む、斯國の戰艦海上に輸送を妨ぐ、幽美の人民齊武に結んで斯國の戍兵を追ふ、齊人雅國の援助を請ふ、雅國の海軍キナソウ島に戰ふて斯國の海軍を破る、齊人糧を得る事、

斯人大に戰艦を同盟列國に募る、雅國の海軍總督チモヂウス斯國の海軍とニコロチウスに戰て之を破る、諸名士の諫に反して齊人兵をブラーテヤに出す事、希臘列國長く干戈を止め大平和を謀るの議起る、列國の特命使臣大に斯都に會す、雅人其の大論士アントクレス、ストラチユスの二人をして、使



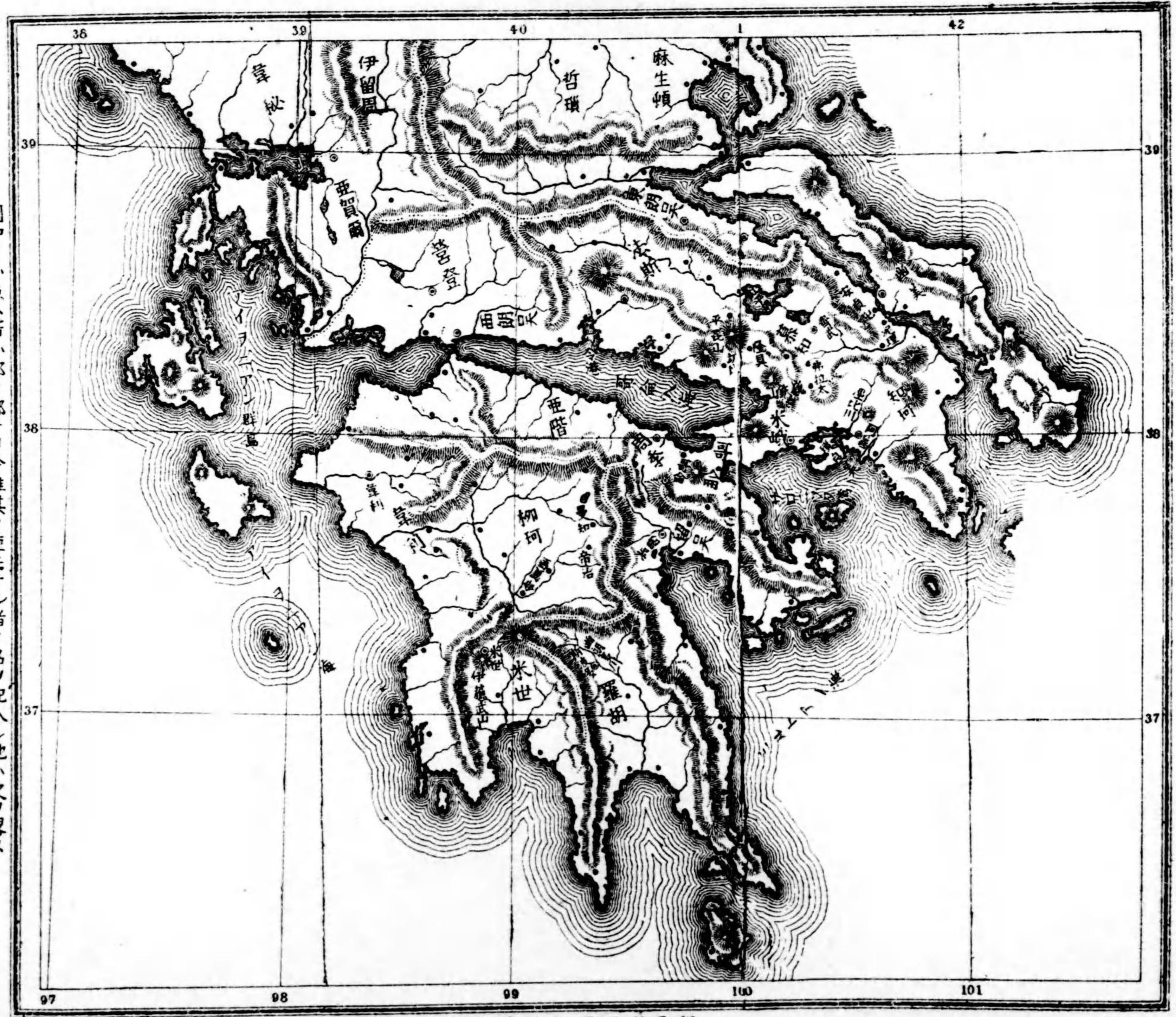
臣の使を帯びしむる事、齊人威氏を擧げて使臣に任ずる事、斯人其王阿世刺をして其國を代表せしむる事、平和の條約將に成らんとする事、諸強國諸小邦をして獨立を保たしめ相ひ侵犯せざるを誓ふ事、斯人傲慢の事、齊武の使臣列國平等の地位を主張する事、列國使臣の面前に威氏斯人の舉動を抗論する事、齊武の使臣會盟を拒絶する事、斯國同盟列國の兵を徴し大擧して齊武を伐つ、斯王雷音武大軍に將として齊武に入る、齊武同盟軍を募て敵兵を境上に邀ふ、斯軍の兵數齊軍に倍する事、齊人威氏を擧げて總督に任ず、威將軍新戦法を案じて諸將を部署する事、列國の大兵大にレウクトラの野に戦ふ事、巴氏親ら神武軍を帥る事、斯軍大敗して國王戰歿する事、齊人禮を厚くして戦死者の遺骸を敵陣に送る事、齊人レウクトラの野に戦捷の紀念碑を建る事、齊武の威大に列國に震ふ諸國款を送りて齊武に結ぶ事、

敗報斯國に達するも祝祭を止めず戦死者の家人相賀する事、斯國の公會にて敗卒を斬るの法を廢する事、雅人齊武の強大を猜忌する事、テツサリ王ゼーソン列國平和の仲裁を爲す、列國休兵の事、斯人約に背きて齊武の同盟國アルカジャを侵す、齊人兵を擧げて之を救ふ、アルカジャを救はんとして威將軍直に斯都を突く、斯王阿世刺軍を回らし急行して國都を救ふ事、齊軍轉じてラコニヤを伐つ、斯王智計を用ゐて之を救ふ事、メツセナの遺民を招集して威將軍廢國を興す、斯人雅、齊の二國を離間す、雅將イピクラテスアルカジャを伐つ、威氏兵を回め之を救ふ、雅將退き歸る事、齊人流言を信じて賢將を罪す、威氏法庭に冤罪を辯ず、威氏刑せられて賤役に服する事、斯、雅二國兵を合して哥倫の地峽を扼守す、齊人二たび斯國を侵す事、巴氏兵を帥ゐて北部の亂を鎮す、巴氏使命を奉じてマセドンに使す、巴氏途上に逮捕を被る、齊人兵を起して巴氏を救ふ、軍中に推されて威



氏軍務を總督す、威兵敵兵を窮追して巴氏を救ひ出す事、  
 アルカジャの人民威氏の言に従つて強堡を築き斯兵を防ぐ事、齊人大に列國  
 の使臣を國都に會する事、齊武列國盟主の地位に立つ、  
 右は史中の實事に據る者にて、之を後篇の骨子とす、

龍溪學人 纂譯補述  
 佐藤藏太郎 助筆  
 龜井至一 畫圖



紀元前三百六十七年  
 希臘列國割據之圖

圖中ノ小点ハ皆小邦ノ都ナリ今唯其ノ重モナル者ノ名ヲ記入シ他ハ之ヲ畧ス

圖中ノ阿善ハ雅典



名武經國美談 後篇

龍溪學人纂譯補述

第一回

齊人兵を發して二險を扼守す  
名士使を奉じて佳人に再會す

開手雄大非  
此何足爲一  
部演義列國  
志之先茅

紀元前三百七十八年希臘列國の形勢より説き起さむ、抑々希臘は其地形北に起て南の方地中海に突出し、南に向ふに従て地勢次第に狭く、哥倫の地峽に至ては、其幅殆んど里餘に過ぎず、然れども地峽を過て南すれば、地勢俄に西南に廣延して茲に一大半島を成せり、故に地圖を案すれば、希臘の地勢は恰も袋子の中央を約して其兩端に物を盛りたるに異ならず、唯々其北部は長大にして南部は稍々小なるのみ、中央狹隘の地峽以南の地は、則ち古史中に於て巴本涅斯と總稱する者是なり、而て巴本涅斯を七域に分ち、之を羅胡、米世、柳珂、



韋利、亞階、留吳、周季と云ふ、夫の強國斯波多は則ち羅胡の域に在り、又地  
峽以北の地を中部北部に分つ、中部に八域あり、哥命、知珂、慕知、米峨、東朗  
吳、西朗吳、法斯、營登是なり、此の中央八域を總稱して古史中に平羅と云ふ、  
雅典は則ち中部知珂の域に在り齊武も亦た同部慕知の域に在り、而て北部の地  
方は五域に大別し、之を哲瑣、麻世頓、韋秘、伊留周、亞賀爾と云ふ、後年英  
雄歷山王を出だせしは則ち、北部の麻世頓なり、然れども三百七十八年の頃、  
南部中部の人民は、北部の人民を目するに尙ほ蠻族を以てせり（遇氏須氏等の  
希臘史）

此時に當り、（紀元前三百七十八年）列國に臨て牛耳を執り、霸王の大權を握り  
し者は斯波多にして、其武威は獨り南部巴本涅斯の七域に震ふのみならず、遠  
く北部中部の地に及び、麻世頓、韋秘、伊留周等の諸邦を併せて、皆其同盟保  
護の邦と爲し、又中部なる法斯及び東西朗吳、米峨の域内なる諸邦を連ねて之  
を威伏し、且つ慕知の域内に國する弗拉太、切比の二邦すら已に其同盟の一部

一轉入題敏  
捷不費力也  
輕也妙

たるに至れり、此時に於て斯國の制御を免るゝは。雅典其他二三の小邦に過ぎ  
ず、知珂の一區域のみ斯として僅に其の獨立を中部に全くせり、夫の哥命の如き  
は、未だ全然たる斯國の屬邦にあらずと雖ども、其意を承順するの有様は、  
尙ほ之を同盟國の部中に加へざるを得ず、今慕知の域内に於て、齊武の諸名士  
が辛ふじて其民政を恢復し得たるは、是れ方に斯國の勢威斯の如く、其の一言  
の令も尙ほ能く全土の列國を震恐せしむるに足るの時なりし、（以上の國勢は具  
氏格氏等の希臘史）姦黨を援助して寡人政治を布かしめんと欲する霸國の強威  
斯の如し、齊武諸名士の辛勞は、其の内政回復の時に於て乃ち止むべきにあら  
ず、其國人をして永く善良なる政體の幸福を享有せしめんと欲するには、爾後  
外寇を防ぎ、最盛の敵國を壓服するが爲め、尙ほ幾多の大難に當り、幾回か死  
生の間に出入せざるを得ざるなり、  
古今國政を改革するに當て、動もすれば避け難き慘酷の措置は、避け得べき限  
り力を盡して之を避け、又是等の場合に於て傷害を蒙る可き人數は、減じ得べ

懸括後來許  
多話頭在於  
此

贊辭絕好



き限り力を盡して之を滅じ、歴史家の爲めに千古の史中未曾有と稱せらるゝ有様を以て、民主政を恢復せし以來齊武の諸名士は、前政の人民に不利なる者を更革し、内政稍く其緒に就かんとしたるに、間もなく三百七十八年（則ち新政施行の初年）の春に至り、斯人は齊武より引揚げ歸りし其將軍曼度、具登の兩人を死刑に處し、其部下の兵士を刑するに市民の權利を剝奪するを以てし、更に羽檄を同盟列國に傳へ、大軍を募集して唯一舉に齊武を討滅せんと企るの飛報頻りに齊都に達しけり、是れ蓋し齊武の人心未だ定らざるを期とし、又雅典の未だ堅く齊武に結ばざるに先だち、大軍を以て齊都に臨まば、之を壓するの易きは朽木を摧くが如くならんと、斯王亞世刺が同國の公會に主唱せし意見を人民の聽納議決したるに因るなり、（俱氏格氏の希臘史）

齊武に於ては、民政を恢復して人心方に振起せるの時と云ひ、且つ戍兵を追て斯波多に對するの餘憤未だ去らざるの時と云ひ、其國勢の孤立して岌々たるをも顧みず、五百名會及び人民公會に於ては直に開戦を議決し、軍務委員七名を

是慷慨人之  
言齊國存亡情  
形從吳兒叱  
口裏影出香  
筆太好

選舉し威波能、巴比陀、吳兒陀、邊禮仁、比留理、杜命、明寧陀を以て之に任じ、又當時總統官なる勢氏加氏の兩人に委するに、軍務委員中より然るべき人物を選抜して、將帥と爲すべきの權を以てせり、

是に於て、軍務委員は直に其會議を軍政局に開き、大に戦守の計を議せしが、吳氏邊氏の如きは唯死戰の説あるのみにて、吳氏は

齊、斯二國の勢を比較するに、斯人は古より列國無比の勇兵と稱せられ、數十年來霸權を握りし積威に頼り、今又同盟諸國の大兵を擧ぐ、是れ獅子に鐵角を戴かしむるに異ならず、然るに我國情は之に反し、民政僅に恢復を得たりと雖も、未だ二三月を出でず、前きに奸黨に従屬せしもの、或は異謀を懷くに加るに、數十年來強國に壓せられて兵備整はざること久し、内勢斯の如きに又外援なく、慕知舊同盟の七邦すら未だ我に結ぶに至らず、然らば今や我邦は内に恃むべきの兵なく外に頼るべきの國なし、唯國人が國と存亡を



是老成人之  
言齊國兵備緩  
急從比留理  
口裏影出省  
筆大好

與にして、地下の祖先に愧ること無きの一事あるのみ  
と述べ、又比氏は  
比氏

兵數には多寡の懸隔あり、戰士には生熟の優劣あり、深く戎事に長じたる斯國の大軍に對し、野戰を以て之に當るは、固より齊人の能くす可き所にあらす、一日なりとも齊武の命脉を繋ぐは、唯城守の一計あるのみ、然るに守城の壘若未だ充分ならず、又久を支ゆるの糧食なし、敵の大軍早く城下に侵入せば、大事忽ち去らんのみ、今日の計たる、唯一日なりとも、敵の侵入を緩くして、城守の備へを整るに在り、幸にして我が境上には、東南に、魏鐵崙の險あり、西北に平昆の險あり、若し早く兵を發して兩所の險隘を守り、敵軍の進撃を支へ得ること一兩月なるを得ば、城守の備へ粗ほ整ひ、糧食も亦た七八ヶ月を支ゆるを得んと説きしかば、巴氏も亦た其意見を述べて曰く

巴氏

古今成敗の迹を案するに、戰の勝つは勝つの際に勝つにあらすして、勝つべきの數は早く其の前に定まり居れり、戰の敗るゝも敗るゝの際に敗るゝにあらずして、敗るべきの數は早く其前に定まり居れり、故に戰鬪なる者は、已に定れる勝敗の大勢を實にするに過ぎず、是を以て有識の士は常に大勢を制し、豫じめ勝敗の數を戰鬪の前に定めんことを勉む、余の鄙見を以てすれば、今や戰鬪の外に、尚ほ我國の急にすべき者あり、何をか急にすべき者と云ふ、列國の大勢是なり、若し我國をして外援なく永く孤立の他位に在らしめば、假令ひ一たび敵軍を退るの僥倖を得せしむるも、豈に能く久しきを保たんや、若し能く大勢を制するを得ば、假令一旦は敗衄の不幸ありとも、尚ほ之を恢復するに難からず、而て此の大勢を定る者は、則ち列國々勢の權衡なり、今希臘全土を見よ、南に斯波多、哥倫あり、北に雅典、齊武あり、希臘全土の邦國は其數幾十を以て數るも、其重なるものは以上の數國に過ぎず、而て

是英雄大觀  
之其高於  
人言一復  
列國形勢  
從巴比陀  
裏觀此口  
以見一歸  
脚而亦歸  
於巴比陀  
也重



齊武之於雅  
吳而斯波多  
即強魏也孔  
明當時之計  
常在結吳而  
抗魏巴比陀  
今日之策以  
敵斯波多以

斯國の威力獨り強盛を極むと雖ども、若し今雅典をして我が齊武に結び、自餘の諸國を連ねしめば、或は列國の權衡をして稍や斯國に偏重なからしむるを得ん、若し又雅典をして全く斯國に連結せしめば、列國の權衡全く斯國に傾き、諸國の興廢存亡舉て其手中に歸せん、然らば今や我國存亡の大勢は、守城にあらず、野戰にあらず、懸て雅典の向背に在り、然るに同國は數十年來兎角内政に紛亂を生じて、人心今に至る迄定まらず、既往を以て今日を推すに、若し斯波多の大軍彼國の疆上に臨むに至らば、再び前年の敗辱を想ひ起して恐懼心を發し、直に好みを斯國に通ぜずとも云ひ難し、斯くして大勢一たび斯國に傾かば、我國衰替の命數早く定り又之を如何とも爲ること能はざらん、然らば今日の計たる、速に遠く一軍を魏鐵崙の地に出し雅典を超へて斯軍を險地に扼し、之をして雅典に近づかしめず、一方には外交政略を用て雅典の人心を動し、之をして我國に向はしむるに在り、若し我が城下に敵兵を待ち、敵の大軍をして雅典以北に進ましめば、雅典の人心動搖して

亞刺

僅數行能  
明人民愛國  
心之所由發  
拔本論乘  
鈎執柄者須  
知爲政之先  
後今日耳曼  
人民脫籍而  
之異域也連  
年相踵是哉  
何以而然哉

必ず彼に應ずべし、況んや、斯亞刺は外交政略に長ずるの老政治家なり、其雅典に結ばんと企ること必ず我國に劣らざるべし、城守の計、素より急にすべしと雖も、雅典連合の策も亦た忽せにすべからずと議論區々なりしが、遂に巴氏比氏等の説に同意を表する者多く、尙ほ反覆熟議の後、巴氏と邊氏とをして二軍に將とし、邊氏をして平昆山を防ぎ、巴氏をして魏鐵崙の險を扼し、且つ雅典に入て其親交ある同國の諸名士に頼り、之をして齊武に連結せしむべしと決しけり、家を思ふの情は、其家が己に愉快を與るより生じ、國を愛するの心は、其國が己に幸福を與るより生ず、されば此時齊武全國の人民は己に民政を恢復して其内治に満足しければ、愛國の心轉た切なるを加へ、國を思ふこと家を思ふが如く、國を愛すること身を愛するが如く、一人にても生き存らへん限りは、敵をして國都に足を容れしめじと決心し、富者は財産の多分を軍費に供出し、貧者は自ら勞役に服し、老幼婦女に至る迄、或は兵器製造の職工となり、或は糧



食の輸卒となり、國中の人心恰も怒るが如く狂するが如く見ゆれども、敵は名にし合ふ霸國の強兵にして、且つ列國の大兵を擧げ來るに、味方は新興國にして内政未だ整はず、戎備未だ完からず、若し是の有様を以て覆亡を免るゝを得ば、是れ唯だ僥倖の天運とも云ふべかりしなり（齊武開戦を決することは具氏遇氏等の希臘史）

巴氏邊氏の提率して疆上の二險を扼すべき二團の軍隊四萬餘人、已に來集しければ、其の出發の前日、五百名會の議長は、總統官其他の重なる行政官等と共に、雲霞の如き多衆に繞圍せられて、國都の牙城加度武の城壁に登り、斯波多の方位に面する堞壁の上に立ち、右手に投鎗を取り、左手に獸血を盛りたる銀器を取り、其血を鎗刃に注ぎし後、遙に斯波多の方に向て此投鎗を壁上より抛ちけり、之れぞ此時代敵國に開戦を布告するの儀式なりき、圍觀せし民衆は、之を見るより皆な謹乎して萬歳を唱へたり（古代の開戦式は禹耳斯氏の萬國公法）

此行必少不得瑪留

開戦の式を行ひし後、巴氏は吳氏瑪留等と共に一萬五千の兵を隨へて魏鐵崙を指し、東南に向て出發し、邊氏は又比氏等と共に二萬五千の兵を從へ、西北平昆の險地に向て打立ちけり、蓋し西北平昆の地は守り難きが故に、此方に兵數を増したるなり、巴氏は一日も早く魏鐵崙の險を扼せんと苦心し、晝夜兼行にて進みしかば、日ならずして早く此地に達し諸將と共に敵軍の爲に之を奪はれざることを祝したり、此險山は慕知、米峨、知珂の三域に跨り、雅典の都を距ること西方十餘里の地に在り、巴氏は地形を相して壘を起し、諸將を部署して之を守らしめ、斯く敵軍をして雅典に近づかしめざる上は、今は已に心安ければ、是れより雅典に入て連結の畫策を施さんと欲し、乃ち吳氏に託するに軍務を以てし、己は唯瑪留と掌書及び傳令士官數名と親衛の精兵百騎とを從へ、雅典に向て出立せり、又出立に先ちて早く使者を雅典に遣はし、李志及び法禮馬等の諸名士に此事を通知しけり、斯くて魏鐵崙を發せし翌日、巴氏は親衛の精兵百騎と與に、靜々と雅典の都門に入りけるが、此事早くも都内に聞へける



丈夫第一快  
意之事欲使  
我踊躍

花灑淚烏傷  
心的悲愁乾  
坤一轉乍做  
出這春風滿  
意馬蹄暖的  
以景作者寫  
之咏嘆吞嗟  
滲之筆感往深

にや、齊國未曾有の改革より列國に名聲を轟かせし齊武の名士を觀んとて、多  
衆の人民沿道の街上に群集し居たりける、嗚呼榮枯盛衰は人世の習ひとは云ひ  
ながら、去歲迄は本國の奸黨に付け狙はれ、一身をさへ容るゝに處なく、此都  
に流寓せる果敢なき一個の羈客なりし人も、今は一國の大臣として一軍を指揮  
し、數多の精騎に打圍まれて進み來りし有様は、定めて勇々しく見えたるなる  
べし、巴氏瑪留は、兼て先づ李氏の宅を訪はんとの旨を通知し置きければ、同  
氏の宅を指して進みしが、二三年の其間艱難辛苦の中に在て此邊を往來する毎  
に、我身の憂きを助けたる市街苑樹の景色も、今は却て笑を含み喜び迎るが如  
く見ゆるは、今日國難の中に在りながらも、已に本國の内治を改良して其中心  
に幾分の愉快を覺ゆるに因るなるべし、心憂ふるときは草木も亦た我憂を助け、  
心喜ぶときは山川も亦た我が喜を助く、世間悲喜の觀何者か其心中より生  
ぜざるあらん、  
巴氏等の一行已にして李家の門前に至れば、主人は門外に出で迎へ、之を延て

後堂に案内せり、親交の人を取扱ふは勿論斯の如くなるべしと雖も、亦た一は  
此來賓が以前羈客たりし身分に引替へて、今は一軍の總督一國の大臣たる地位  
に在るを以ての故なるべし、李氏は巴氏の從兵百餘名をば近地の客舎に延て之  
を饗應し、巴氏瑪留の兩人をば其後堂に案内せり、席既に定まり主客互に別後  
の情を述ぶる中にも、巴氏瑪留の兩人は去歲死を決して當國を去りし後始ての  
再會なれば、特に前日の厚誼を謝し、主人の庇蔭に頼て幸に今日あることを得  
たる旨を述べ、辭終て一座を見れば、此席には法禮馬、阿慈頓を始め、  
當國の純正なる民政黨にして前年相識る諸名士八九名坐を占め居たりければ、  
又相共に別後の情を述べ、之より宴を開て歡を盡せしが、當國の諸氏は、先づ  
齊武恢復の舉を賛美して實に空前絶後の偉蹟なるを評し、且つ其時の諸人の働  
き杯を問ひければ、巴氏は其大略を物語り、又瑪留の最も力めたることを説き  
ければ、同人は暗に得色を現はせしなるべし、之より談話遂に國事に移りしに、  
主客與に雅齊兩國の幸福は、向來相互の同盟連衡に外ならざる旨を述て、雙方



巴比陀先見  
至此不爽毫  
髮  
一語既作下  
回張本

の見込の符合せるを悦びける、中にも李氏法氏等は深く嘆息の様子にて  
何時も變らず、當國人心の定りなきや、此頃は又斯波多の大軍の近境に進む  
を恐れ、暗に之と同盟せんとを望み、齊武に結ばんと欲するの志ある我儕  
を攻撃する者尠からず、彼の專制黨は素より斯人に結ばんと欲するに、曖昧  
黨も亦た開戦を恐れて其説に左袒するの勢と爲り、二黨の有様此の如きに  
加るに、時機を待て動もすれば勃興するの萌しある彼の亂黨なる者、亦た稍  
く勢を得んとするの兆候あり、左れば今日に於て此等の諸派を壓し、齊武に  
結ぶは容易の業にあらず  
と語り、如何にもして雅、齊兩國の同盟を成就せんと、互に向來の計畫を談じ、  
尙ほ明日議する所あるべしとて、此夜は當國の諸士等は一と先づ別を告て立歸  
れり、然るに是時魏鐵崙の齊軍より急使來着し「斯國の大兵十二萬人已に哥倫  
の地峽を越へたり、速に巴將軍の歸營を請ふ」との旨を申し來りければ、巴氏  
瑪留は即時に暇を告て打立たと欲せしに主人は痛く之を留め「哥倫より魏鐵



(圖一第) ムシ借ヲレ別人佳ニ都ノ典雅



讀者欲見之  
已久矣

大臣風采處

崙の路は、早くとも三日程に下らざれば、未だ敵軍の迫りしと云ふにも非ず、今夜は最早や夜も更けたるに、強て今より打立てばとて夫れ程路も拂らざるべし、寧ろ暫時休憩して明朝未明に出發するこそ然らん」と頻に抑留したりしかば、巴氏等も恩人との再會と云ひ、且つ尙ほ與に謀るべき國事なきにもあらざれば、然らば今夜を語り明さんとて、枉けて其意に従ひけり、此に於て主人は又席を轉じて更に小宴を開き、今は主客三人のみなれば、特に打ち解けて先年の事杯を物語り、轉た興にぞ入りにける、此時主人の命ぜしにや、家女令南も亦た出て二賓に見へけるが、其靚装に心を籠めたるが故に、今宵は別けて神采人を動かし、容儀特に端麗に見えける、巴氏瑪留は令南に向て去歳の厚遇を謝し、深く再會の悦を述べけり、今や令南が意中の人は、姓名を變じて他人の家に潜匿せし流浪の昔しに引き換へて、身には上將の戎衣を着け、一國の大臣に似合はしき風采、特に儼然として、言語動作に至る迄、何となく以前より打上りて見ゆるは、尙ほ近優りのせらるゝなるべし、又當家に仕る許多の家人等は、



女嬌癡作者  
於秋波一筆  
極伶俐

一句假威獲  
炎涼之情再  
側寫二賓威  
容烘雲托月  
妙甚

主人去得好  
巴令交個說  
話的事平邪  
唱亂屬民的  
報件去皆在  
主人一去裏  
辨了有和盤  
托出之妙

一問急着纏  
綸之情自在

再問急着纏  
綸之情自在  
言表數語而  
溫存慰喻之  
意完足無遺  
是情之至也

世上の評判にて齊武の恢復を聞き、其重なる名士は、曾て當家に客たりし人々なりと聞きしより、今一たび見まほしく思ひ居たりし折りなるに、又圖らずも其人々が、今堂々と從騎を帥ひ、入り來りしとのことなれば、彼のむくつけき瑪留を言りたる者共も、今は大に尊敬の心を生じ隙もあらば二賓を見んとて、

ひしめき合ふも可笑しけれ、主客共に興に入り、談話盡きせず、夜も早や痛く更けんとする時、俄に當國の同志者國事に就て急に主人に面謁を請ふ旨を申し入れければ、折り悪しとは思ひながらも、國勢危き時なれば、國事と聞くに打捨て難く、主人は仔細を二賓に語り「能く佳賓を遇せよ」と其家女に命じつゝ、接客所を指し出行きけり、跡に巴氏、瑪留、令南の三人は暫し相對してありけるが、巴氏は去歳の危難を救はれたる事杯語り出るに附け、令南は定めて其の心中に思ひ起す事多かるべし、然れども二賓に對しては、唯詞少なく撓揆するのみなりしが、暫くして巴氏に向ひ、

令

此度は我家に幾日計り滯留し玉ふべきや

巴

強て一宿せしことなれば明早朝には立出で度存するなり

令

君の歸國し玉ふときは、再び當地に立寄て我家に滯留し玉ふべきや

巴

若し運開け戦ひ利あらば、必ず貴家を訪ひ參らせん、此後太平の世ともなれば、當地と齊武の都とは程遠からぬ路なれば、父君諸共我國へ必ず遊び玉へかし

令

遊び度は思へども、親族とても候らはねば便り妙なく思ふなり

巴



語漸入嬌調  
當時二人心  
中其柔似綿  
其熱似火

●斷法絕妙

主人歸得好  
否則三人只  
是默々爾

其の時は必ず我家に止め参らせん、必ず遊び玉へかし

令

長く貴家に止まらば定めて迷惑し玉ふならん

巴

君さへ厭ひ玉はずば幾年なりとも止め参らせん

と二人の問答を聞き居たりし瑪留は、口の内にて

夫婦の様ならん

と低聲にて獨語しけるが、固より音吐の高き男なれば、此詞の兩人に聞えしにや、巴氏は淑女の前にて無遠慮なることを言ふ男かなと思ふ様子にて、最も苦々しく見えけるが、令南は満面紅を漲らし、少しく笑を含みながら首を低れて居たりける、此時主人は立歸て坐に復し、永く佳賓に失禮せり、いざ之より物語らん、と云へる容色怏々として見えければ、巴氏は之を訝りつ、  
國事の爲めに來調せる人ありと承りしに、今玉容の怏からず見え玉ふは、

一報既使讀  
者眼光迷離

若しや雅齊の間に於て妨げとなるべき事變の生ぜしには非らざるか、心懸りに候ふ

と問へは主人は打領つき

未だ心を勞する程にはあらざれども喜ばしからざる通知を得たり、其は他事にあらず、曾て一たび暴民を煽動し、志を遂けずして留吳の地に遁れ居たる平邪なる者、當時斯軍の我が近地に進み、外交政略に就て我が國論の定まらず人心頗る恟々たるを時とし、今や瓊良美の海邊に立歸り、地黃の都府にて雄辯を振ひ、亂民を煽動して其勢稍く將さに盛んならんとす、故に同地の純正なる我黨の諸士は、其の暴激なる説の社會を紊亂せんことを恐れ、今や方に之に應ずるの手配り最中なり

と聞て巴氏も眉を顰め、猶ほ兎に角と謀りし後、又談柄を他事に轉じければ、夜も早や痛く更け行て、夜半過にぞ及びける、是に於て主人は二賓を寢室に伴はしめ、己も家女と共に後堂に入りけり、此夜巴氏は熟々國事を思ふに付け、



夜半人睡萬  
鐘寂了爾時  
英雄事家  
往來於懷者  
獨有國家而  
已若夫兒女  
泣笑之件只  
是過眼之雲  
芥蒂足以爲  
用筆可謂謹  
嚴之極  
後堂夢寐之  
愛人亦可憐

雅典の形勢は兼て計りしよりも尙ほ一層の困難あり、此末如何に爲す可きやと、獨り其の事のみ打ち案しけるが、世務に練れたる當家の主人及び法氏慈氏等の才略を以て、多分は同盟の策を成し遂るならんと、獨り心を慰めつゝ、漸く眠を結びける、又此家の後堂には、巴氏の心痛に引き換へて、先刻の巴氏の辭を思ひ續け、若し彼人が目出度く凱旋せられし後は、兎せん角せん杯と思ひ惱みて、此夜を明す人もあるなるべし、斯くて殘星、光を失ひ、棲鳥啼を出で、夜もほのく明けなんとしければ、巴氏瑪留は寢室を立出で、出發の用意を整る内に、家人等は已に夙く起き出て佳賓の爲に奔走せり、斯くて定めし時刻に到り、兩人は李志、令南に送られて門外に立出づれば、傳令士官を始めとし、百餘の精兵隊伍を整へ、肅然として早や門外に列立せり、從卒頓て馬を進むれば、巴氏瑪留の兩人は李志、令南に別を告げ、靜に馬に打乗れば百餘の精兵前後を圍み、磨き立たる楯鎧は昇る旭に輝きつゝ、國境を指して打ち立ちけり、

栗本鋤雲云。前難僅夷矣。而後難又起矣。然且加大。而志士心中既有定算。所謂公遜碩膚赤寫几々之象。

依田學海云。本回爲斯、齊接仗發端。以巴氏議論爲主眼。蓋巴氏策聯合隣邦。以敵斯國。警猶合從六國。以抗強秦。當日之計也。縱使巴氏不度形勢。不量強弱。以創夷之餘。當強悍之敵。或獲一捷。難持全勝。是不過有勇無智一鹵莽漢子。何以爲英雄。何以爲奇傑。

末段過雅典訪令南一節。是從陣雲堆裏。劍光叢中。見一枝牡丹。燦然而笑。多少情致。與前毀勃率理論相映成趣。有這箇光景。乃能做小說。使人不倦。否則一部相斫書。成何世界。

藤田鳴鶴云。前篇叙齊武名士之行狀。故卷中所記專關於人事。後篇則叙列國興廢之來歷。故其所記專繫於國事。是以前篇卷首寫英雄功業。後篇卷首寫列國形勢。文法整然。有秩有序。非老手決不能作。

又云。巴氏論兵。諳地勢。審敵情。議論極精確。足以見作者本領。



又云。巴氏訪恩人一節。婉曲道勁。姿態橫生。當年流落之羈客。即今日當途之大臣。見畫錦之榮於他邦。使人不覺呼快。其會令南一段。片言隻語中。寓無量意味。作者尤得意筆法。他人恐不能到。

## 第二回

雅典國都に暴民紀綱を紊る  
公會堂上に阿慈頓節に死す

斯、齊兩國互に雅典の同盟を争ふに當り、齊人は李氏法氏等の如き純正黨の諸名士を頼て以て連結の媒と爲さんと欲したるに、斯王亞世刺の畫策は更に奇異なる手段なりけり、茲に雅典の南部瓊良美の島に生じたる一人物あり、其名を平邪と云ふ、此人や百難を犯すも屈撓することを知らざる勁剛の天性を有し、萬衆の前に立て敵論と戦ふも、激言詭説を以て能く之を壓倒するの伎倆を蓄ふ、若し其をして民福を増すに意あらしめば、誠に一廉の人物なるべきに、惜ひかな此人は人民の患害を除くの心より、寧ろ一身の功名を謀るの志熾にして、又政治上の仕組みを發明するには、特に鋭敏の才あれども、其の目的

宛然描出一  
佛蘭西政  
治家般人物  
來

とする所は、現在社會に存するの患害を除くにあらずして、唯自家の胸中に美麗なる社會の雛形を想造し、其の一時に行はれ難きにも拘らず、此の美麗なる雛形の如く現在の社會を改造更革せんと欲するに在りき、凡そ政治上に於て、害を除くと利を興すとは相ひ距ること一間のみ、毫末の差ひより遂に千里を錯るに至る、誠に畏る可き事ならずや、平邪は本と極めて寒微の家に生れし人なりしが、長ずるに及で、才學を以て小學の講師となり、今より十餘年前、其の意見を國政に行はんと欲して一たび人民を煽動したりしが、當國純正黨の諸名士等に其の詭説の缺所を猛撃せられて、勢ひ支ること能はず、終に本國を去て留吳の一部なるナプリーの島に遁れ住み、快々として歲月を過しける、然るに今や斯王亞世刺は、暗に是の黨派を利用して雅典の正黨を窘め、因て以て齊、雅の間を割かんことを企てけり、然れども平邪は素より極端の民政家に於て、斯波多の如き專制政治の國を喜ぶの理なく、又亞世刺王の所置を常に誹毀する程なれば、亞王は無論直接に是人を左右すること能はず、去り乍ら當時



此所以代議  
制度之美  
宙余嘗觀  
人斯制度  
其言共議  
政則畏之  
終非至無  
無政之極  
點破却輕  
戒讀者熱  
不許等閑  
政治家至  
因亂國其  
志則立而  
也往鑑不  
命佛世西  
於之回者  
三致本云

ナフリ島は斯波多の同盟國なりければ、乃ち竊に人を遣はし、平邪と親き者をして、今より平邪が其の本國雅典に歸るべきの好機會なるを説かしめ、又旅裝の準備等を助けしめける、斯くとは夢にも知る由なく、平邪は多年鷹隼が鳥雀を搏たんとする如き眼光を以て、本國の人心を震動し得るの機會を待ち居たりしが、今や本國の人心恟々として、國是を定むる者のなきこそ、方には是れ滿を持するの強弩機を發するの好時機と覺えたれ、斯波多の大軍愈々近く進行するに従ひ、人心益々搖々たれば、いざや、本國に立歸らんと思ふ折りしも、恰も好し又親友知己より資力の助けを得たりしかば、今は片時も躊躇すること能はず、直に二三の同志を従へ、其の本國の南海岸なる地黃の小都に上陸せり、之れぞ雅典人民の爲め不幸の時節到來せるにて、奇異なる斯王の畫策の意外に大效を奏せしことは、後にぞ思ひ知られける、斯くて平邪は先づ地黃の都府に上陸し、此地の人心を察するに、何處も同じく斯波多の大軍近疆に臨むに戦慄し、人心恟々として和戦の利害如何を説かざる

者なければ、平邪は兼て謀りし有様に違はざるを悦びつゝ、其初め先づ獨り街頭に立て意見を演説せしが、兼て政論の喧しき國柄と云ひ、又和戦中立の國是を定むべき時機と云ひ、圍繞群集する者恰も雲霞の如く、反對論者の攻撃にも關せず、一連數日打續けて街頭に論辯せしに、旬日を出でざる中に、此の小都府の細民の全數をして、早や己れの同意者たらしむる程の勢となれり、今平邪は如何にして斯く速に多衆の同意を得たるやと尋ぬるに、前きに此人が純正黨に敗られしときには、其の説全く共議政を主張し代議政を非難し、代議士を選で立法部を托する舊來の五百名會を廢して人民各自の共議政と更め、全國を分て二十大區となし、大抵の政務は、皆人民の投票を以て各自の思想を現はさしめ、多數の意向を以て之を行はんと欲するに在りき、本と共議政なる者は、人口少き小邦或は村邑に行ひ得可くして、大國多衆に行ひ得べからざる者なれば、平邪は意中に想造せる社會の雛形を實際に施行せんと試みしも、遂に散々純正黨の爲めに敗られしなり、故に前敗に懲りて此度は容易に之を説かず、先づ外



交政略に就て、純正黨が齊武を援けしを攻撃し、斯國の怒を引き起して雅典を危難に陥らしめし罪人たりと主唱し、以て前日の怨を報ひんと企て、又亂を好む細民の助を借て己の意思を達せんが爲めに、是迄各村邑の人民が村邑會に臨むに日當を受けざるを非議し、臨會する村邑の總人民には、必ず國庫より公費を以て日當を與ふべきを主張し、(村邑會は共議政にして村邑の人民皆總て出席する者なり) 又此時公私の政論場に於て狼藉の舉動を爲す者を取押ゆるの法律あるを非難し、共和政國に於て衆民の意向は即ち一國の法律なり、政論場に多數を占るの意思は則ち之を法律と見做すも可なり、又狼藉警備の法律は執政々黨をして人民を抑制せしむるの危険あり、故に政論場は公私與に隨意自由ならしめざる可らずと説き、外交政略には中立を主張し、政論場には隨意集會を主張し、村邑會には公費支給を主張し、第一説を以ては純正黨を攻撃し、第二説を以ては亂を好む暴民の援助を求め、第三説を以ては議場を亂さんと企てしが、公費支給の説は最も多數の同意者を得て、此説稍く近地の諸都城に蔓延し、

朋黨之心獨  
熾而國家之  
念稍薄者動  
輒有是齋寇  
可嘆之爲可嘆

亂黨の勢益々盛大なるに至らんとす、此時當國の專制曖昧の兩黨は、斯軍の國境に近づくに恐怖し、且つ此時を以て日頃怨みある彼の純正黨を傾けんと思ひしかば、却て暗に平邪等が亂民を煽動するの舉動を悦び、之を制服することを力めざるのみならず、時としては陰に之を援るが如き事もありき、先年平邪等が大敗を論場に取りしは、正黨及び專制曖昧三黨の爲めに、全力を合して攻撃されたりし故なりしに、今や專制曖昧の二黨は、却て亂黨を助くるに至りしかば、亂黨の勢日に盛大に向ふも、決して理なきにあらざりしなり、斯る有様なれば、平邪の説は益々各小都の亂を好む細民中に瀰蔓し、其の流傳すること、恰も洪水の氾濫横流するが如くなりき、是に於て平邪は其の腹心の者共と與に、道を分て愈々邦内の各都を煽動したりければ、勢ひ日に猖獗なりき、此時純正黨中に一の偉人あり、其名を珂理杜朗と云ふ、年未だ三十に上らずと雖も、才略英挺意氣快爽にして、盛衰の機を未然に察し、勝敗の數を將來に



佛蘭西革命時直成亂階  
者實在是一  
可無所恐懼  
哉

一言如鏡著

識るの明あり、兼てより純正黨の後進中に於ても、屈指の人物と稱せられたりしが、初め亂民の地黃の都府に起らんとするを見るや、深く之を憂慮し、純正黨の領袖たる李氏法氏慈氏等に説て云ひけるは

深く向來を慮るに、雅典今日の憂は外、斯波多にあらざして、却て内部に在り、彼の平邪等の説の如く、村邑會に臨席する者に與ふるに公費の日當を以てせば、村邑會には、村邑の男子たる者皆臨會するが故に、村邑の細民等は勤勞せずして皆供俸を受るを得べし、然るときには、彼等は其の職務を擲ち衣食を村邑會に求むるに至らん、又公私の論場をして放縱不取締ならしめば、各村邑各私會より中央公會に至る迄、必ず暴民の爲めに蹂躪せられん、且つ彼が外交上に於て諸名士の齊武を援けしを非難するは、營に之を非難するに止まらずして、其の極は將に之を擬するに嚴刑を以てせんとす、邦國治亂の勢は、恰も山顛より巨石を轉下するが如き者にて、一たび其の手を離るゝときは、落下の速力次第に増加し、當初之を放下せし者と雖ども、亦

自古好人束  
手而敗事者  
每坐有是等  
說已

た自ら驚愕する程に奔轉す、朽索一たび断て六馬奔逸するに至らば、社會の秩序一切掃蕩して、我邦を昏霧の中に置き、混亂紛擾相殺し相争ひ、殷血を流して雅典の堞壁内に漲らしむること、夫の十五年前胡爾巍の内亂の如くならずとも云ひ難し、彼等の向來に恐るべきや實に斯の如しと雖ども、然れども其の勢ひ猶ほ制し難きにあらず、今若し諸君の全力を以て壓せば、或は大害を未然に消することを得んも、若し等閑に經過することあらば、悔ゆとも及ばざらんと(胡爾巍の亂は防氏の希臘史)

然れども李氏等の諸先輩は前年の事を思ひ、尙ほ平邪等を侮りしにや假令ひ二三の小都に於て、彼等が亂民の助を得るとも、豈に之に反對するの良民なからんや、加るに彼等の主張する外交略と云ひ、隨意集會と云ひ、公費支給と云ひ、苟も中央公會と五百名會との議決を経ざる以上は、之を實行するの効力なき者なり、而て是の二會は、容易に彼等に動さるべき者にあらず、故に彼等の政略は、僅々五六の小都府に行はるゝも、決して國都の二



直就彼之語  
便又拈出一  
議論來口角  
俊爽酷肖孟  
子

會に勢力を得る能はざるは、恰も猶ほ河海に岸破あるが如し、假令ひ激浪怒濤は如何ほど其の外に荒るゝとも、決して岸破を超へて陸地に上り來ること能はじ

と答へしかば、珂氏は又之を諫め

禍を防ぐは水を防ぐが如し、水を防ぐの法は、唯其の力を既成の堤防に用ゆるに在り、若し之を等閑に附し去り、一所にても崩潰せしむるときは、水勢横流して田野を浸し、最早や之を防ぐべきの處なし、亂民の猖獗を既成の法律に因て之を防制するは甚だ易し、若し彼等をして一たび既成の法律を破壊せしめば、最早や之を制止するに地なからんのみ

と、力を極めて其の得失を陳ずれども、多年の勝勢に慣れたるが爲めか、將た天の此國に禍すべき時節なりしか、先輩諸氏は未だ深く其心を此の一事に留めず、彼の亂黨を輕んずるが如くにぞ見へにける、然るに平邪等の唱ふる隨意集會、公費支給の説は、無頼の人民に嘉みせられて、

益々各都に蔓延しけるが、共和政國の常として、其の舉動の公然と平和を破壊する迄は、無論人民の政論集會を禁ぜざれば、日子を経るに從て此説に左袒する者、愈々其の數を倍加しけり、是に於て純正なる政治家は、力を盡して之を政論場に防がんと企る者も多かりしが、多數の暴民の爲め常に政論場を擾られ、亂民の勢ひ次第に増加すること、恰も大波の打ち寄するが如く、今は雅典の都内に住する細民迄、此論に左袒する者頗る多きに至れり、然るに專制曖昧の二黨は、猶ほも眼を覺まさずして、是時迄も暗に亂民を助けたり、斯く倍加する有様を以て、亂民次第に勢力を得たりしかば、國都の公會中にても之に左袒する者多く、遂に隨意集會の説を其會場に發言するものあるに至れり、是に於て純正の良民は、猛烈に之を争ふたれども、烈しき論戰の末、僅々の多數を以て遂に此の議を決定され、以後は政論に關する公私の集會に就て、何事ありとも官衙より干渉す可からずとの議案を五百名會に廻附するに至れり、此時珂理杜朗は又李氏法氏慈氏等の先輩に説て曰く



大難未だ發せずと雖ども深く内部に匿藏し、大勢已に去る、國事復た爲すべからず、今日之に處するの道唯二策あるのみ、第一策は重なる先輩諸氏悉く其地位を去り、全く世事を抛て閑地に退隱するに在り、倩ら亂民の爲る所と彼等の人物とを察するに、其の論は唯一部の細民に利有て一般の衆民に利あらず、又其の人物は卑下にして、永く國人の望みを繋ぎ得べからざる者共なり、若し彼等をして國政を執ること暫時ならしめば、必ず人民を疾ましめ、多數の人民其の苛虐に勝へずして之を怨望し、水火の苦難を免れんが爲めに深く我黨の諸名士を追慕するに至らん、是時に當り、衆望に因て果斷の所置を行はゞ、亂民を壓して國難を鎮定すること甚だ容易なるべし、是れ上策なり、又第二策は、此度は五百名會に於て全力を盡し、以て此議案を壓服すること是なり、若し此議案をさへ遮遏し、既成の國法を嚴存して亂民を制壓せば、猶ほ或は我國をして麻の如く亂れざらしむるを得んか、唯此事に比して稍や難事に屬するを如何せん、諸君は今日全力を盡して此の議案を遏止

三諫而不聞  
乃去珂理不  
期於是乎不  
得去是乎不

今日成雅典  
之亂者非平  
邪非賤民夫  
二黨者也

せらるゝか、然らざれば早く退隱して他日を待つか、兩者其の一を擇ばざるべからず  
と、然れども諸先輩は尙ほ當時の勢力を恃みにや、珂氏の諫を聽くべき様子も見へざりければ、珂氏は退て深く歎息し、如何に思ひけん、書を諸名士に遺て志を述べ、遂に獨り雅典の都を立ち去て、行方知れずなりにけり、抑も雅典の五百名會は、本と人民より撰舉せる代議者にして、國中の人物より組成せられたる者なれば、會衆中に多少の亂黨なきにあらねども、其の數甚だ僅少なり、故に正黨の諸先輩が、此會に於て夫の議案を遮遏廢止するを容易なりと思ひしも、理なきにはあらざれど彼の專制曖昧の二黨が、純正黨の齊人を援けしを攻撃し、正黨に對して日頃の怨みを報ひんと欲するあれば、隨意集會の議案が此の會場に現はるゝに當てや、勢ひ此議に左袒する者多く、二日三日に跨りし激烈なる論戰のする、五百名會にて遂に之を可決するに至りしこそ口惜しけれ、



隨意集會之  
議決而亂民  
跋扈之勢成  
大事既去無  
復可奈何痛  
嘆黨復勝之  
亂黨有來敗  
之日既來敗

諸て隨意集會の議案の可決せられて、狼藉の舉動を公私の政論場に取押ゆるの  
國法一たび廢せられし以來は、國都の中央公會より小都府村邑の會議に至るま  
で、總ての政論場は、公私の論なく常に暴民の爲に蹂躪せられ、彼の兇惡なる  
亂民等は、論場に於て、或は力を示し或は聲を放て不同意者を脅嚇しければ、  
良民等は忍び得るだけは息を屏めて禍を避け、其の心中は不平に勝へざれど  
も、既成の國法を廢せし以上は、今は兇暴無頼の亂民を公私の政論場に取抑る  
の手段を失ひ、胸を擦て徒に時節の來るを待つのみなりき、  
亂黨は斯くして意外の強勢を得たりしかば、今は乃ち又各村邑の會議に臨むの  
人民に、公費を以て日當を支給するの議案と、人民が非常の大事ありと認むる  
時は、會議を閉ぢずして之を永續するの兩議案とを、中央公會に提出して之を  
議決し、又之を五百名會に差し廻しけり、是より先き平邪及び其の黨類の重も  
なる者共は、國都の一隅に會同館を設け、黨類の群衆此家に集て事を議し、  
衆議を以て之を決し、然る後其の議決せる議案を公會或は五百名會に提出す

嗚呼又晚矣

るの規律を定めたりき 是時より會同にては平邪に次ぐべき後進の雄辯家續々  
として現出し、其の聲名を黨類の中に轟すもの多かりけるが、其の執る所の説  
は、概して皆極端の平等主義に歸宿し、平邪に比すれば、尙ほ一層此の社會を  
意中の雛形の如く改造せんと欲するの儕輩なりき、  
斯くて五百名會に於て、愈々彼の村邑會公費議案と大小會議永續議案とを議決  
すべき當日となりけるが、純正黨の諸士も、最早や亂民の暴横に耐へ難く、且  
つ此日の議案は、最も治亂の懸る所の者なれば、如何にもして其の全力を用ひ、  
之を遏止せんと決心せり、何となれば、此度の兩議案を可決する以上は、各地  
の人民が大事と認むる箇條を議する爲めには、一定の會期を延し、或は半年或  
は一年引續て會議を永續し、其間常に官府より日當を受るを得べし、然れば貧  
民は村邑會に因て日當を受け、衣食を得るの便あれども、是等の負擔は皆自餘  
の人民の頭上に墜落する者なり、故に其の名は如何なるにもせよ、其の實は富  
者の財産を以て、全國の貧民を養育するに均しきなり、亦た集會に臨席するが



此亦晚矣雖  
噬臍何及

譬喻絕妙使  
聳蘇陸若乎  
後不覺圍破

寫議政堂之  
擾者前篇第  
四回及其凡  
二而其不景  
趣向則一奸  
蓋倡亂則人  
黨民黨則亂  
賤民黨則亂  
自民黨則亂  
耐庵打虎各  
武松李逵各  
變其面目

故に、勞せずして衣食を得るときは、亂民等は益々政治上に不要の改革を企て、其の極社會の紀綱を如何に紊亂せんやも計り難ければなり、然るに此時に至ては、果して珂氏の先見に違はず、亂黨の勢威赫灼として當り難く、動もすれば、暴民等をして隊伍を組み、五百名會の議員を脅かさしめ、或は兇暴の舉動を以て反對者に仇せしむるが如きこと多ければ、之が爲に諸名士は皆深く戒心を加ふるに至れり、彼の當初には、暗に亂黨を助けたりし專制曖昧の二黨も、今は彼等の暴横に耐へ兼ね、如何にしてか之を免れんと思へども、最早や之を如何ともする能はず、空く當初彼等を助けしことを悔るのみ、此時の有様は、宛も彼の晴雨計の亂動する氣候の如く、早晚烈風暴雨あるべき物凄き景色にて、此儘平和の天日を見んことは覺束なくぞ見へにける、左れば斯の如き時に於て開會せる此度の五百名會は、其の結果如何ならんかと案せぬ者とは無く、且つ近來公私の論場に於て、或は鬭争を惹起することなきにあらねば、純正黨の諸名士は、兼て深く戒心を加へ、此の議場に臨みけり、

更漏開會の時刻を報じ、衆會員皆議場に上れば、會堂右側の一面は、純正黨の一派集て之れを占め、左側には亂黨の一派充滿し、專制曖昧の諸黨は、正に中央の會席を占めにけり、兼て謀りしや否やは知らざれども、議堂の傍聽席より周圍一面堂外に至る迄、兇聲なる亂民ひしくと詰め合ひ、或は場内の會員席に迄溢れ入りしが、之を制する者さへなく、甚だ不取締に見へけり、既にして亂黨の中より武瑟布と云へる重なる一人先づ發言臺を占め、「國民大事を議するに當り、散會の期限あるが爲めに之を議了せずして解散するの不可なるを説き、又村邑會に臨む者は日當を受領せざるが爲に、貧人多く之に列する能はざるに至る、是れ國法の本意にあらざるなり、且つ國事を議するが爲めの集會は、則ち國事に務むる者なれば、公費を以て日當を支辨せざるべからざる」旨を論辯せり、此時議堂の内外に充滿せる亂民は、會堂も碎る計りに聲を放ち、早く議案を可決せよと叫喚せり、若し此時聊にもて反對する者あらば、直に打ちも殺さん勢なれば、兼て覺悟の上ながら、流石の諸名士も稍や躊躇して



見へにけり。此時正黨中の一人泰明は、憤然として發言臺に登り

國に良政府あるの幸福は國人皆之を受く獨り富人に多くして貧人に少きの理あるべからず、我が共和政國に於て、國政を議するの權理は國人皆平等に之を受く、獨り富人に厚くして貧人に薄きにあらざるなり、然るに一國の公費は、何故に獨り富人に重くして貧人に輕きや、富人は自ら其費を辨して村邑會に臨むに、何故に貧人のみ獨り其の爲めに公費の支給を望まんと欲するか、村邑會を永續して散會の期なからしめ、之に列席するもの皆常に公費の支給を仰がば、國人夫れ將た何に因て負擔に耐へん

と、其の詞未だ終らざるに、傍聽席より議堂の外に充滿せる亂民は、一齊に聲を放ちて、引落せ打殺せよと罵る中に、二三の暴徒は早くも發言臺の下に馳せ至り、將に手を下さんとせしが、同時に滿場亦た一齊に閔を作りて騒ぎ立ち、亂民等は傍聽席に在て、隠し持ちたる兵器を閃めかし、あはや、右側なる正黨の席に押寄せ往かんず有様なり、正黨の諸名士五六十名は、之を見るより一同

に咄と立上り、兼て用意の短劍をば、皆一齊に抜き側め、若し一人にても來り追まらば、直に左側なる亂黨の會員平邪等に飛び掛り、潔く死を決せんと身構へたり、すはや、今こそ一大事に及ばんとするとき、中立曖昧專制主義の議員は、皆我先きに會場より逃れ出でんと周章せり、此時威令行はれざる會長も、頻に聲を放ち、亂民の重なる議員等に會場を取鎖むべきことを令しける、傍聽席の亂民等も、流石に未だ手を下さず、暫し控へてありければ、正黨の諸名士も、今は早や是迄なりと思ひけん、群集を押し分けて會堂の外に逸走しけるが、亂民等の中には、之を追ひ行き、諸名士を毆打して、數人に重傷を蒙らしめたる者もありき、此日の議事は、斯る混雜の有様にて散亂したりければ、彼の兩議案も亦た其儘にて過ぎけり、此時は早や雅都の紀綱幾んど壞亂し、都内の細民等は、亂黨の公費支給の説を悦び、又市井無賴の惡漢等は、自ら求めて其の黨類と爲り、都内に横行して良民を惱ませども、各小區の會場は、幾んど亂民の爲に占據せられて皆其の爪牙と變じ、都内を支配するの勢ひなれ



ば、良民は之を如何ともすること能はず、空く時機を待ち居たるは淺ましかりける次第なり、  
此日亂黨は直ちに内會を其の運動の中心たる會同館に開きけるが、今日の議案の決せざるも、必竟は正黨の奴輩が之を妨けたるにて、且つ百事常に彼等の妨げを蒙むれば、我々の意見を充分に行はんと欲するには、先づ會場より彼等を除くを以て急とす、彼等は前きに齊武の國人を援て、我國を危難に瀕せしむるの大罪人なれば、五百名會に有する議員彈劾の權を以て、先づ彼等を刑すべし、又彼等は若干の徒黨を集め、我々を襲はんと欲するの噂なきにもあらざれば、一刻片時も猶豫すべからず、因ては今夜直に各區の警鐘を鳴らして五百名會を招集し、即時に彼等を刑するの議案を議決し、以て彼我雙方の勝敗を定むべしと、評議茲に定まりける、  
此時は已に亂黨正黨の諸人皆相互の暗撃を恐れて戒心し、双方與に各其徒を集て警衛に備る程の勢なりけるが、李氏慈氏等の諸氏は、今日の議會を退

や直に法氏の宅に會し、今日の議場の無念なりし顛末及び向來恢復の方法等を談じて、初夜の頃に至りしに、此時各區に於て俄に警鐘を連打しければ、常事ならずと察する内、續々として同志の人々入來り、今夜の五百名會にて亂黨等が暴力を以て諸名士を刑せんと欲するの企を告げけり、已に各區の亂民は續々として會堂に集らんとし、又各區民の總代をして、諸名士が前日齊武を援けし爲め、今將に斯國の大軍を引受けんとし、雅國を危くするの罪を正さんことを、五百名會に請求せしむる事を通知する中に、警鐘の聲は益々急にして、今ぞ諸名士が斷然其身を處すべき危急の時節となりける、此時或は暫く身を脱して後日再舉の謀をなさんと述る人もあり、又敵黨の爲めに早や都門の各所を扼せられたれば、此家を逃れ出るも、徒らに耻辱を求むるに過ぎざれば、寧ろ此處にて自殺せんと決心せる人もありしが、多くは皆思ひくりに落ち行きける、然るに唯阿慈頓、泰明の二人は「兼て國法にて定められたる五百名會員たる者は警鐘を聞て直に會堂に集るべき」の職務を盡し、寧ろ會堂に於て亂民の兇



及に仆れんと決心し、大膽にも唯二人、他の人々に引き別れ、會堂指して趣きける、既にして會堂に至れば、各區より集りたる亂民は、早や會場の内外に充滿せり、二人は其間を押し分けて、正黨が平常着席する右側の席に就きたりけり、此時は既に二人發言の後なりしが、亂黨中の一辯士又發言臺に登り今や斯國の大軍疆上に臨み、雅典の安危旦夕に逼りしは、皆此れ李氏慈氏法氏等の一派が、齊人を助けたる行爲より生ぜし者なり、且つ檀に義勇兵を擧げて齊武の回復を助けたるは、其の罪最も輕からず、今雅國の局外中立の位置たるを、明にし、斯人の怒を解かんが爲めには、是等諸人の罪を正し、之を嚴刑に處せざるべからず、因ては議員中に於て罪狀審判の委員を選擧し、以て此事を措理せしめん

と述べにけり、之れを聞くより慈氏は直に發言臺の下に突進し、此論士を檀上より引き落して自ら發言臺を占め、大音を放ち

雅典の長算大策は齊武と結ぶに外ならず、若し齊武をして斯人の手中に墮ち

不必說死而  
當日光景宛  
然在目

しめば、雅典豈能く獨り全きことを得んや

と未だ言ひも終らざるに、慈氏の壇上に登れるより、引き落せ打ち殺せと叫喚し居たる傍聽席の亂民は、最早や耐らへ難くやありけん、忽ち一齊に鬨を作り、五十名許り叢々と發言臺の下に至り、慈氏を壇上より引き落して、散々に之を打擲せんとせしかば、議員席に在りし泰明も怵へ得ず、立上て慈氏の救ひに馳せ行き、數十名を相手として、慈氏泰氏の兩人は暫間の間揉み合ひしが、衆寡の勢ひ敵すべきにあらねば、二人は遂に亂民の爲めに擁せられて、會場外に引き行かれ、生死も知れずなりにけり（雅人齊武を援ふの首謀者を刑することとは具氏遇氏の希臘史）又會場にては、喧騒喚呼の中に、去歲齊武を援けたる諸名士を法律外の人民と布告し、法律を以て之を保護せざるの議を決しければ、場内の亂民は鬨を作て喝采し、夫より隊伍を數十に分ち、喚き叫んで都内なる有志者の宅を襲ひ、或は富豪なる良家に亂入し、其の暴行を極めたり、是よりして紀綱壞頽し、秩序紊亂し、雅典の事又言ふに忍びざるに至れり、



鋤雲云。不料與國擾亂殆致顛覆。爲齊武志士者。其心爲何如。

又云。珂理杜朗真是高見卓識之士。僅見鬚眉既知後日必有爲。

學海云。本回爲雅典喪亂始末。其事殆與齊武顛覆相類若出凡筆。不免重複。而才子胸中。另有一副見識。齊武奸黨從邦內出現。雅典亂魁反從外間闖入。齊武奸黨引斯國做箇外援。雅典亂魁煽賤民做箇內幫。齊武正黨詳叙逃難諸子。雅典純黨細述遭害數士。從殆相類處。說出絕不相類情狀來。

鳴鶴云。珂理杜朗是雅典第一人物。作者借其口吻。說雅典之禍根。以明示其騷亂之由來。而爲後年反正之功成於其手伏線。

又云。亂民狂暴之慘毒。至此極矣。如觀佛蘭西革命之圖書。平邪是段頓之流亞。其投于細民情欲而煽搖禍亂之狀。寫出有序次。西人諺曰。猛獅一甜血。慄悍倍加。細民先得志於小都。而漸及大都。脅從議員。蹂躪公會。而猶不知飽。終至屠戮正士。殘害良民。使其邦土陷於無政府之魔域。而索其禍源。則賊激徒籠絡細民以逞私慾之由。盖作者用意最在此一段。

又云。阿慈頓屹立狂瀾怒濤中。執正義不變。終以身殉國。愛國至誠與日月爭光。讀至此。黯然掩淚。

### 第三回

平昆守りを失ひ齊兵夜奔る  
亂民都を焚き淑女難に遭ふ

起筆甚佳

遙に魏鐵崙の山脉を望めば、齊軍一萬餘壘を堅くして險要を扼し、數萬の敵軍、山下の平野に陣營を列ねたり、是れより先き斯波多に於ては、米世、柳珂、韋利の諸域巴本涅斯の同盟兵總數十二萬人を發し、其の總督を選みけるが、此時一王雷音武年既に三十餘歳にして、是迄諸國を征せし遠征軍の將校に伍し、數度戦功を立て、其の才略勇武を現はしければ、大に人民の爲に敬畏せられたり、別王亞世刺亦た其の才略を感じ、公會に於て此度遠征軍總督の任を托せんことを發言せしかば、國人皆同意を表したり、是に於て雷王は十二萬人を提督し、齊國に向て進發せしが、哥倫の地峽を過ぎし時、齊軍已に魏鐵崙の嶮に據ると聞きしかば、乃ち全軍を分て二團と爲し、一軍各六萬人、其副將仁洪量を



して一軍を率ひ、哥倫の入海を渡り慕知の西南境なる亞玖羅に上陸せしめ、自ら餘兵六萬を率て魏鐵崙の道に向ひける、已にして魏山の麓に至り、齊軍と相ひ對すること十餘日の後、密かに其の兵を分かち、他の山路を取りて齊軍の後へ突かしめんと計りしも、齊軍の總督は常に斥候を嚴にし、敵の舉動に注意を怠らざりしかば、早くも敵軍の前路に一軍を移して之に備へたり、故に斯軍は其の備あるを見、遂に戦はずして引返しける、雷王は兵を齊境に進むる能はず、空しく魏山に返るを憤り、遂に地形を相して一山脈より兵を進め、齊軍の營を攻撃せしが、其の容易に抜けざるを察して攻撃を止めければ、此戰は僅に小戦にて終りける、斯くする内既に三十餘日を経過しければ、巴氏は益々斥候を出して敵情を探り、片時も敵の舉動に油断せず、唯一日も永く敵軍を支へ留て、國都に籠城準備の時日を與へんとのみ苦心しけり、然るに一日國境より飛使到達し、平昆の險を扼せし齊軍は、數度斯軍と戦ひしが、敵將仁洪量善く兵を用ひ、

第一回中所謂平昆之地難守者至此有驗

是必然之事

味方遂に平昆の守を失ひ、國都を指して引揚げければ、此手の斯兵は二團に分れ、一團は直に國都を指して突進し、他の一團は急行して東方に轉じたり、其意蓋し國都と魏鐵崙との間に出で、魏山に屯する齊軍の後を襲ひ、雷王の一軍をして齊境に入らしめんと欲する者に似たれば、此地の齊軍は片時も速に雅典の界に沿ふて東北の道を取り、國都へ引揚るこそ然るべけれ、との通知なりければ、吳氏等の諸將は、深く別軍の守りを失ひしを怨めども、今更ら如何とも詮方なければ、巴氏は直に退軍を決し、此夜平時の如く篝火を焚きて軍勢を示し、密に兵を抜て此地を打立ち、一萬餘の人馬東北の道を取り、國都を指して急行せり、斯くて翌日雅典の國都に最も近き地に至りけるが、巴氏は是迄斷へず雅典の情を探り居たりければ雅典の國勢の覺束なきを憂ひ、且つは已に斯軍をして近境に近づかしめられたれば今此時を幸ひに、再び同國の諸名士李氏慈氏等に對面し、尙ほ後來連結の約を結び、然る後本軍に追ひ及ぶも遅からずと、乃ち本軍をし